

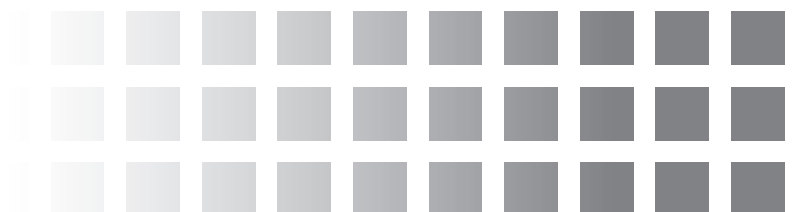
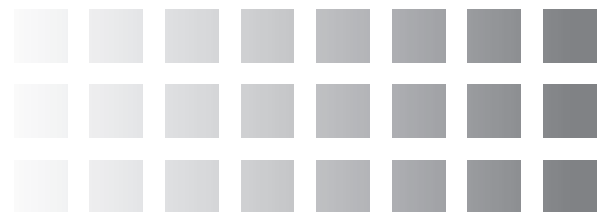
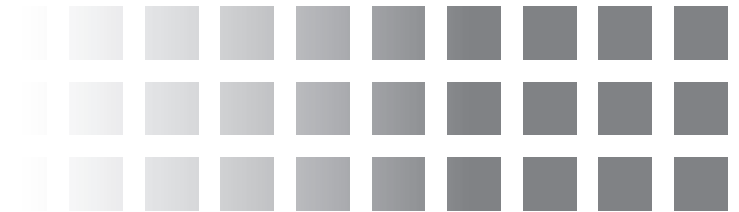
国連ESDの10年 2005-2014 ■

2014年ユネスコスクール世界大会記念

# ユネスコスクール ESD優良実践事例集

In Commemoration of UNESCO ASPnet  
International ESD Events 2014

UNESCO Associated Schools ESD Good Practices  
in Japan



ユネスコスクールESD優良実践事例集の発刊に寄せて

文部科学大臣 下村 博文



2005年に開始された「国連持続可能な開発のための教育の10年」(DESD)も最終年を迎えました。この10年間、世界的にはユネスコが、国内的には文部科学省・日本ユネスコ国内委員会が中心となってESDの理念とその実現に向けた取組を進めてきました。特に、ユネスコの国際的な学校間ネットワークである「ユネスコスクール」を推進拠点に位置付け、ここを軸にESDの普及を進めてきたことは我が国の特徴的な取組といえます。

日本のユネスコスクールでは、ESDを教育の柱に据え、総合的な学習の時間なども効果的に活用して各教科をつなぎ、子供たちの学ぶ喜びを育んできました。地域と一体となった教育は子供たちの好奇心を刺激し、地域への理解と愛着を深めてきました。同時に、先生方のちょっとした示唆によっても、児童・生徒は遠く海外での出来事にも目を向け、世界的な問題を自分との関わりの中で捉える視点も身に付けてきました。ユネスコスクールでの、こうした質の高い教育は、一人一人の現場の先生の御尽力のたまものであり、校長先生の指導力の成果といえるでしょう。先生方の日々の御努力に対して深く敬意を表します。

この10年間に、日本各地のユネスコスクールでは、地球環境、食料・エネルギー、国際理解、多文化共生、地域学習など様々な主題の下、数多くの多様な取組が行われてきました。地域の特色を生かし、子供たちの関心に応えた、他校での活動の参

考となる優れた取組も少なくありません。

そこで、この度DESDの最終年に「ユネスコスクール世界大会」の一つとして開催される今回の全国大会に併せて、これまで10年間の活動を振り返り、日本のユネスコスクールにおけるESDの優良実践事例を取りまとめて提示する本事例集を発刊することとしました。全国各地の、厳選された優良実践事例からなる本事例集は、今後より幅広くESDを推進するに当たり、ESD実践上の課題についてそれぞれの状況においての最適解を検討する際に、国内の関係者のみならず、広く海外の方々にも有益な情報を提供する資料として御活用いただけるものと考えております。

文部科学省としましては活動の質の充実、活動の継続性の確保を一つの焦点と定めて、2015年以降もユネスコスクールはもとより、より幅広いESDの推進に取り組んでまいります。ESDを実践される学校関係の皆様方におかれましても、今後地域の民間企業、NPO等のステークホルダーの方々とも一体となって、ESDを更に強力に推進していただきますようお願いいたします。皆様の活動に際して、本事例集が何らかのヒントを与えてくれるものとなることを切に願っております。

最後に、お忙しい中、本事例集の作成に関わっていただいた関係の皆様から賜りました多大なる御支援と御協力に改めて感謝申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター  
(ACCU)

理事長 田村 哲夫



2009年にドイツのボンで開催された、国連ESDの10年の中間年を記念するユネスコ世界会議で採択された「ボン宣言」には、日本が最終年を記念する世界会議のホスト国となることと、そのことに対する各国の期待が記載されています。

それから5年、国連ESDの10年の後半を経て、「ボン宣言」の通り「ESDに関するユネスコ世界会議」は2014年11月10日から12日にかけて、愛知県名古屋市で開催されることになりました。

「ESDに関するユネスコ世界会議」に先立ち、岡山県岡山市で、各種ステークホルダー会合の一環として「ユネスコスクール世界大会」(11月6日～8日)がユネスコと文部科学省、日本ユネスコ国内委員会の主催により開催されることになったのは、ESDの推進におけるユネスコスクールの役割が、より大きく注目されているからでしょう。

日本のユネスコスクールは、国連ESDの10年をきっかけに、ESDの推進拠点として位置づけられました。この10年の間に、加盟校の数が飛躍的に増加したのみならず、それぞれの学校のESD実践の質が向上し、また、学校間の交流が行われていることはたいへん喜ばしいことです。

私自身、ESDという教育のコンセプトにふれて、21世紀の教育として推進すべきものであり、子どもたちが身につけるべき知と能力、ものごとに接する態度、行動する力を総合的に培い、高めるために、たいへん重要であると感じました。また、子どもたちが、世界の子どもたちとともに、学び合い、ともに持続可能な未来をつくっていく仲間となることが、ユネスコ憲章にあるユネスコ設立の理念、つまり

「心のなかに平和の砦を築く」という理念を実現することにつながると感じてきました。多くの課題を抱える現代社会ではありますが、長期的にみると世界をよくする方法はやはり教育であり、ESDを普及させていくということが、世界をよりよい方向に導いていくという道であると信じています。

文部科学省の委託を受けて公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) が本書の企画・発行を担当するにあたり、ご協力いただいた多くの方々に、この場をお借りして心からお礼を申し上げます。

まず、貴重な実践の記録を寄せていただいた全国のユネスコスクール、またユネスコスクールに加盟申請中の学校に対して、感謝いたします。紙面の都合で、すべての事例をご紹介することはできませんが、寄せられたどの実践からも、真摯な取り組みが伝わってまいります。

また、「ユネスコスクール世界大会 全国大会宣言起草・事例選考委員会」の委員の方々に、ご多忙のなか、多大なるご協力をいただきました。事例の募集にご協力いただいた全国各地の教育委員会、特定非営利活動法人日本持続発展教育推進フォーラム、ASPUivNet (ユネスコスクール支援大学間ネットワーク) 等、多くの関係の方のご協力があったはじめて、限られた日程のなかで、本書の発行が可能となりました。

日本語、英語で発行される本書により、日本のユネスコスクールによるESD実践の優れた事例が共有され、今後のESDの推進に寄与することを祈念しています。

## 本書について

2002年に我が国が提唱し、同年の国連総会において、2005年から始まる10年を「国連持続可能な開発のための教育の10年」(DESD)とすることが決議され、我が国においては文部科学省、日本ユネスコ国内委員会が軸となり、啓発・普及を進めてきたところです。

本書は、DESDの活動を総括するとともに、2015年以降も国内外においてESDを更に推進する契機とする目的で開催される「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するユネスコ世界会議」(愛知県名古屋市、2014年11月10日～12日)に先立って開催される各種ステークホルダー会合の1つである「ユネスコスクール世界大会」(岡山県岡山市、2014年11月6日～8日)を記念して、発行するものです。

また、本書は、日本のユネスコスクールにおけるESDの優良実践事例を取りまとめて提示することにより、これまでの10年間の活動を振り返るとともに、国内だけでなく国外の教育現場において、ESD実践者の方がたが、ESD活動を推進していくうえで教育活動の在り方や進め方、授業方法や教材の開発などの課題を解決していく際の参考として活用されることを期待して発行しました。

発行にあたっては、全国のユネスコスクール及び加盟申請中の学校に対して、DESDの期間に取り

組んできたESD優良実践事例の募集を行いました。全国146校の応募の中から、このたびのユネスコスクール世界大会の一環として開催される第6回ユネスコスクール全国大会にあたり組織された、ESD及びユネスコスクールに造詣の深い学校教員、研究者そしてESD実践者の方がたから構成される「ユネスコスクール世界大会 全国大会宣言起草・事例選考委員会」の委員による厳正な審査の結果、ユネスコスクールESD優良実践事例集掲載校を決定しました。予想を上回る多くの学校から御応募いただきましたことに深く御礼申し上げます。

また、このたびのESD優良実践事例の応募は、NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムが運営する「第5回ESD大賞」の募集と合わせて実施させて頂きました。多大なご協力を頂きました日本持続発展教育推進フォーラムにこの場を借りて御礼申し上げます。

本書では、第1章に第5回ESD大賞受賞校事例、第2章にその他のユネスコスクールESD優良実践事例が掲載されています。

ユネスコスクールESD優良実践事例の選考及び本書の企画・発行は、文部科学省の委託を受けた、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)が担当いたしました。本書は、日本語、英語、両言語で発行されます。

## 目次

---

巻頭言	2
-----	---

---

本書について	4
--------	---

---

目次	5
----	---

---

第1章 第5回ESD大賞 受賞校事例	7
文部科学大臣賞 岡山市立京山中学校	8
ユネスコスクール最優秀賞 広島大学附属中学校・高等学校	10
小学校賞 岡崎市立男川小学校	12
中学校賞 多摩市立東愛宕中学校	14
高等学校賞 筑波大学附属坂戸高等学校	16
審査委員特別賞 小笠原村立小笠原小学校	18

---

第2章 ユネスコスクールESD優良実践事例	
第1節 幼稚園	21
第2節 小学校	25
第3節 中学校	93
第4節 一貫校	131
第5節 高等学校	143
第6節 大学	181
第7節 その他	185

---

ユネスコスクールについて	190
--------------	-----

---

事例掲載校 分野別 INDEX	192
-----------------	-----

---



---

# 第1章

## ESD大賞 受賞校事例

---

本章では、「第5回ESD大賞」の受賞校をご紹介します。

「ESD大賞」は、NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムが、ESDの理念に基づく取り組みを積極的に実践する学校を奨励するために平成22年に設立し、以後毎年実施されています。

第5回目になる本年には、ユネスコスクール世界大会を記念して「文部科学大臣賞」が設置されました。

---

# 京山から世界が見える学校へ

グローバルな視点を活かした授業・活動で育む思いやり・夢・志 共育

総合

【キーワード】 探究活動 意志決定 社会貢献  
7つの「能力・態度」を踏まえたESDカレンダー

## ▶ Goal ねらい



具体的な課題の発見・探究・解決・提案の過程で、生徒自らが持続可能な社会づくりへの価値観を身につけ、自らの意志決定を促し、行動の変革を促す。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 探究活動の初歩から学ぶ

教職員はESDの視点によるカリキュラムの再構築を行う。学年ごとの評価規準表を作成し、つきたい力を明確にしたESDカレンダーの図式化を行う。また、教科を横断した単元学習プログラムを作成し、W型問題解決モデル<sup>\*</sup>を参考に探究活動のカリキュラムを実践し、持続可能な京山の教育の実現に向けて本校版の学習指導要領解説を作成する。

1年生は、地域フィールドワークで探究活動の基礎を学び、2年生にかけて広島研修を核とした平和学習への取り組みを行う。2年生は、人権・国際理解・環境の学習に取り組む。また、多摩市立多摩永山中学校及び多摩市立東愛宕中学校と「世界の人々と共に生きる」をテーマに、テレビ会議システムを使って意見交換をし、その意見を3校でまとめ、平和宣言を東京から世界へ発信する。

3年生は、水俣フィールドワークを中心に環境問題等の個人テーマを設け探究活動を行い、地域や未来への提案として発信する。3年間で自ら考え、行動し、発信しようとする資質の育成を目指す。

<sup>\*</sup>…実社会や実生活における問題解決のための科学的能力を培う方法論。





## ▶ Outcome 成果と課題



全校的な取り組みを通じて、生徒及び教員、保護者の意識変革につながっている。ESDの視点でプログラムを再編したことやESDカレンダーの作成で、教科授業の充実・改善や教職員間の授業改善が深まった。

生徒自身が、地域に誇りをもち、自尊感情を高めながら、地域の一員として課題意識をもてるようさらに改善を図りたい。

単なる調べ学習に終わらないように、探究的な取り組み、実際の体験や交流、コミュニケーション活動を充実させたい。地域や他校との連携をさらに深めていきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 地域の人びとから承認

学校の活動が地域の人々に、これまで以上に、認識・承認されるようになり、「かかわり」「つながり」が深まった。

生徒の社会貢献意識が高まり、地域の一員としてボランティア活動に、多くの生徒が積極的に取り組むようになった。

学校名：岡山市立京山中学校（きょうやまちゅうがっこう）  
 校長名：徳山 順子（とくやま じゅんこ）  
 生徒数：821名  
 住 所：〒700-0087 岡山県岡山市北区津島京町1-7-1  
 電 話：086-254-2797  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間 各教科等  
 連携校・団体：京山学区の小学校・幼稚園  
 岡山市京山地区ESD推進協議会  
 岡山市立京山公民館 万成病院ひまわり寮  
 環境学習センターアスエコ JICA  
 県内農業経営者 国立教育政策研究所  
 一般社団法人出水民泊プランニング  
 NPO法人環不知火プランニング  
 多摩市教育委員会 気仙沼市立瀨中学校  
 岡山大学の留学生等



ESDは、共に生きるためのよりよい社会を目指す原動力を、生徒・教員に与えてくれるものであり、教員全員に、教育の原点に立ち返る機会を与えてくれた。

## 教師が「つながる」・教育活動を「つなげる」

ユネスコスクールとして取り組んだ「ESDの10年」

平和

【キーワード】 つながる・つなげる 希望の未来 新しい平和の文化

### ▶ Goal ねらい



1953(昭和28)年にわが国初のユネスコスクールに指定された本校は「ESDの10年」にあたり校務分掌にユネスコ協同学校推進室を設置、教育活動全般を見直し、教科教育のみならず、特別活動やクラブ活動など全ての教育活動にESDの視点を取入れ、生徒が「希望の未来」を抱き「新しい平和の文化」の担い手となれることを目標に実践を重ねてきた。

### ▶ Activity 実践内容



#### ■ ESDの10年の歴史

推進態勢としてユネスコ協同学校推進室を設置。「ESDの10年」の初年度2005年には、第61回全国高校ユネスコ研究大会(広島大会)の主管担当校として大会運営にあたった。2006年からの3年間はESDを毎年開催の中等教育研究大会のテーマにし、普及に努めた。教科・科目・分野ではESD的視点から実践可能な教育内容や教材を抽出し、それらを体系化したESDカレンダーを作成した。2009年度には地歴・公民科教師8人が総合学習としてのESDを展開、2013年度からは、歴史・地理・生物・化学・数学・国語・家庭科の教師による総合科目「ESD」を創設し、授業とフィールドワークを一体化したESDの実践を展開している。2007年度には、スーパー・サイエンス・ハイスクール(SSH)の2度目の指定を受け、ESDを紐帯とした、ユネスコスクール活動とSSHの一体運営を開始した。さらに2012年度には、「『科学的な知の体系』の習得と、国際的視野や高度な倫理観の涵養を通して、『持続可能な社会』を先導する人材の育成を図る教育課程の研究開発」をテーマに3度目のSSH指定を受け研究継続中である。



### ■ 生徒の活動

生徒会組織を改組してユネスコ委員会を設置し、運動靴を集めてアフリカに送るレインボープロジェクトを実践している。ユネスコ班（高校のクラブ活動）は校内の省エネルギー対策について実践発表を行った。本校の多くの生徒・教員が海外に派遣され、日本のESDの先進事例として報告を行っている。



持続可能性という考え方が、今日なぜ重要なのかという認知的な目標はほぼ達成された。地域の問題・国内の問題・地球社会の問題はバラバラに存在するのではなく一つに繋がっているものであり、広い視野にたつて長期的な展望を持ちながら、解決の道筋を持続的に考えていくことの必要性は認識された。今後さらに、持続可能な地球社会の担い手として、さまざまな場面でいかに行動すべきかを考えさせていきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

生徒のなかに、「持続可能性」という考え方が今日なぜ重要であるかという観念は認知レベルでは定着した。日本初のユネスコスクールであるという認知度が校内にも対外的にも高まり、学校の使命として自覚され、保護者や他の諸機関からも、ESD実践の牽引者として期待されるようになった。教科・科目間に壁があった教員集団が教科を超えて同じテーマで授業づくりを行い、チーム・ティーチングがなされるなど、教員間のつながりが形成された。

学校名：広島大学附属中学校・高等学校  
(ひろしまだいがくふぞくちゅうがっこう・こうとうがっこう)  
 校長名：古賀 一博 (こが かずひろ)  
 生徒数：742名  
 住所：〒734-0005 広島県広島市南区翠1丁目1番1号  
 電話：082-251-0192  
 対象学年：中学1年生～高校3年生  
 教科・領域：教科教育 特別活動 部活動  
 連携校・団体：広島大学 広島県内のユネスコスクール  
 岩国市内のユネスコスクール 広島ユネスコ協会  
 広島県ユネスコ連絡協議会 岩国ユネスコ協会  
 ハイゼンベルク・ギムナジウム (ドイツのASPnet)



日本で最初にユネスコ協同学校の指定を受けた学校として、ESDの研究・実践を通して、学校の使命と存在意義が再認識された。

# 教科とつながるESD

大自然の神秘に触れ、命の息吹を感得する理科学習

総合

【キーワード】

生物多様性 生命の有限性 かかわり合い  
ESDカレンダー

## ▶ Goal ねらい



①地域に生息する身近な昆虫に自らがかわり、諸感覚を使って観察を続け、その生態の中に疑問を抱いて新たな発見をしていく面白さを体感できる学びの場をつくる。

②実物の観察を通して昆虫の生態に触れることで生物多様性に気づき、体のつくりや活動が環境とかかわりが深いことについて実感をともなった理解を深める。そして、生命の有限性を知り、生命がかげがえのないものであることから、地球環境の生態系を支える必要があることを実感する。



## ▶ Activity 実践内容



①チョウの育ち方(完全変態)について実感をともなった理解を図る実践(5・6月)

孵化の瞬間をとらえた。羽化の瞬間も見せた。蛹が第4腹節まで空洞化した瞬間に冷蔵保存し、授業中の見せたい時間に計画的に羽化をさせた。

②昆虫の体のつくりについて実感をともなった理解を図る実践(6・7月)

昆虫標本製作の作業を行った。ピン刺しの次に羽を展ばした。展翅、展足の後、2週間ほど暗所で乾燥させ「ふるさと男川の昆虫標本」を完成させた。

③専門的な知識に触れる実践(7・9月)

カブトムシ研究で有名な名古屋大学大学院助教の新美輝幸先生による「カブトムシの角や羽がなぜ今のような形になったのか」、「水のない砂漠で生き抜くための特別な機能を持った体をしているユスリカについて」等のお話を聞いた。

④ものづくりや書く活動による学びの定着を図る実践(10・2月)

調べた昆虫の体のつくりを模型で表した。3色の紙粘土で「頭、胸、腹」を作り、モールで足と触覚を付けた。羽は色画用紙作った。まとめとして、各自で「ふるさと男川昆虫図鑑」を作った。



## ▶ Outcome 成果と課題



学習前のアンケートで「虫が嫌い」が13人であったが、学習後は全員が「虫が好き」に変わった。

蝶の羽への知的好奇心は、後ろ羽に引っ張りがある訳や鱗粉の役目についてまで発展した。

専門家から得た知識は、子どもたちの学びを大きく伸ばした。チョウの口の仕組みがストローでないという事実は、子どもたちには衝撃的であり、昆虫の生態の深い部分に足を踏み入れることができた。

カマキリがバッタやゴキブリを平らげていく様子を目の当たりにし、どちらの立場もわかって、モラルジレンマにぶつかった。道徳の学習とも関連づけて命を考えさせていきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

ESDは、地域に根ざして展開されるため、学校を中心として、保護者や地域との新たな関係や参加を生み出す環境をつくり、参観から参画へ、そして人と人のつながりへと拡がりをみせている。

① ESDの実践を進める中で、子どもたちが、他者意識を持って互いの意見を聞き合い、尊重し合い、学び合う温かな関係が育ってきた。かかわり合いの中から、子どもたちの学習の基礎基本が定着したり、思考力・判断力・表現力が身についたりしてきている。

② 各学年の教育課程を踏まえ、担任の専門性や独創性を生かした「ESDカレンダー」や「指導計画」を作成したことで、ESDを意識した授業を行うことができた。ESDを推進する中で、暗記・再生型で一斉画一的な授業から、探求的で協同的な授業へと、教師の指導観を変化させてきた。教師が学習の進行役として変容・成長し、授業力が向上してきた。

学校名：岡崎市立男川小学校（おとがわしょうがっこう）  
 校長名：蜂須賀 渉（はちすか わたる）  
 児童数：598名  
 住所：〒444-0007 愛知県岡崎市大平町中道17番地  
 電話：0564-22-1159  
 対象学年：3年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間 理科（3年生）  
 連携校・団体：奈良女子大学附属小学校



次のことを大切にして、子どもの視点に即したESDの教育実践を進めている。

- ① 「子どもから出発すること」にこだわろう。
- ② 教師の個性や持ち味を発揮しよう。
- ③ 知識や教科を大切にしよう。
- ④ 子どもに任せよう。
- ⑤ 子どもに学ぼう。

# 地域の持続可能性を高める アウトプットを重視したESDの推進

環境

【キーワード】 人との交流 自然との交流 未来社会との交流  
地域の持続可能性の向上

## ▶ Goal ねらい



ユネスコスクールとして、知識や思考力、問題解決学習にとどまらず、グローバルな視点で、地域の大人や国内外の同世代に向けたインパクトやアウトプットを重視し、生徒自らが学び実践することでESDの学習を進め展開していく教育活動を推進する。

## ▶ Activity 実践内容



- ① Web会議による国内外の中学生とESDを通じた平和希求の交流
- ② 自助と共助の力を高める防災教育の推進と防災・減災キャンプの実施
- ③ グリーンカーテンを活用したCO<sub>2</sub>の削減や省エネルギーの取り組み
- ④ 秋そば祭りや地域伝統行事等への参画と活性化
- ⑤ 芝生の校庭を活用した地域の活性化や子育てへの支援活動
- ⑥ ESDの視点に立ったキャリア教育の推進と職場体験の充実





## ▶ Outcome 成果と課題



- ① 生徒自らの持続可能な社会への参画意識と実践力の向上
- ② 中学生による地域の活性化と学校を核としたコミュニティの醸成
- ③ 教員の活性化と地域のソーシャルキャピタルの高揚による学校力の向上
- ④ 学校・学区統合を控えたESDカリキュラムの発展と整合性の確立

## ▶ Transformation

実践による変化

- ① 葛藤と選択の時代である2050年を生きる自覚とそこに挑む生徒の登場
- ② 生徒自らによる集団として社会やコミュニティに働きかけて変化を生む活動の充実
- ③ ユネスコスクールとしてアウトプットやグローバルイメージを重視した教育実践の充実
- ④ 地域と協働した学習材料や学習過程の創造的な開発の推進
- ⑤ 産学官相互の連携による学校への支援の充実と教育の質の向上

学校名：多摩市立東愛宕中学校（ひがしあたごちゅうがっこう）

校長名：千葉 正法（ちば まさのり）

生徒数：155名

住 所：〒206-0041 東京都多摩市愛宕1-52

電 話：042-374-9781

対象学年：全学年

教科・領域：各教科・領域 等

連携校・団体：日本ユネスコ国内委員会 環境省 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 特定NPO法人「持続可能な開発のための教育10年」推進会議（ESD-J）玉川大学 立教大学 東京ガス株式会社 株式会社ユニクロ 株式会社ベネッセコーポレーション 東京消防庁 多摩市役所 楽農倶楽部多摩 他地域団体等

キルギス公立学校 アゼルバイジャン公立学校 リトアニア公立学校 豊田市立藤岡南中学校 気仙沼市立大谷中学校 岡山市立京山中学校



ESDとは、過去と未来をつなぐ学校経営・学校改善の中核を成す理念であるとともに、具体的な実践活動の総称。

# 総合学科高校の特性と 海外交流校ネットワークを生かしたESDの実践

国際

【キーワード】 総合学科 海外連携 協働 多角的アプローチ



## ■ ESDと総合学科の親和性

総合学科高校は、将来の職業選択や社会とのつながりを考えながら、農業科・工業科・福祉科・商業科などの多様な専門教科の中から、自ら時間割を作成し学ぶところが特徴である。生徒それぞれが社会の持続的発展を阻害する要因と向き合い、それとの関係を見だし、自ら問題解決に積極的にかかわる人材の育成を目指すESDの目標と、総合学科高校における教育目標は非常に親和性が高い。多様なESD実践が行われている中で、ESD Riceプロジェクトなど特に海外の交流校との協働型プロジェクトを中心とする国際教育に注力して取り組んでいる。



## ■ 自発的なアイデアから活動

インドネシアの高校とは、「ゴミ問題」をキーワードにその解決に向けた活動を、両校で行っている。また、森林伐採によらないアグロフォレストリーによる生計方法を創出するために、地域の特産品を利用した商品開発などにも取り組んでいる。これら、特定の分野に偏ることなく、生徒の自発的なアイデアと活動に基づき、地域レベルから国際レベルの活動までを実施しているのが、本校のESD実践の特徴である。

また、全校での取り組みとして、アジア5か国（インドネシア・タイ・フィリピン・台湾・日本）の高校生による国際ESDシンポジウムを開催し、それぞれの国の環境問題や持続可能な社会づくりについてのアイデアを共有した。2年次の海外校外学習（修学旅行）を分散実施（インドネシア、台湾、豪州）にして、それぞれ交流校との協働学習に取り組んだ。他方、留学生という形で双方の学校を往来している。





## ▶ Outcome 成果と課題



実際に海外を訪問したり、海外の高校生との協働学習に取り組む意義と効果は非常に大きい。こうした取り組み自体を持続可能なものにするためにNPOとの連携や海外校外学習の改変など様々な工夫を行ってきた。しかし、海外校との継続的な活動における恒常的な活動資金の確保は未だ大きな課題である。本校は、平成26年度から「スーパーグローバルハイスクール」に指定された。アセアン諸国の高校を中心に海外の各機関と連携したESD活動を通して、広い視野と柔軟な専門性と積極的な行動力を備えた総合学科ならではのグローバル人材育成に寄与していきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 専門教科を学ぶ学生の国際教育

2011年にユネスコスクールに認定されてから、ESDという名のもとに、同じアジアの高校生同士で学びあうという協働型のプロジェクトをいくつか立ち上げることができた。これらの活動には英語や国際系に関心の強い生徒だけでなく、むしろ農業や環境、福祉や商業を専門とする生徒が中心となって組み込まれてきた。専門教科を中心に学んでいる生徒が英語を駆使して自分たちの学びを伝えようとしているという、総合学科高校として理想の国際教育が実践できた。特定の生徒や教員だけに偏ることなく、多くの生徒や教員が国際教育や国際的行事に主体的にかかわるようになったことがESDによる大きな変容であり成果である。

学校名：筑波大学附属坂戸高等学校（つくばだいがくふぞくさかどうがっこう）

校長名：加藤 衛 拡（かとう もりひろ） 生徒数：480名

住 所：〒350-0214 埼玉県坂戸市千代田1-24-1 電話：049-281-1541

対象学年：全学年 教科・領域：学校行事 複数教科による協働

連携校・団体：ポゴール農科大学附属コルニタ高等学校 インドネシア林業省附属高校（以上インドネシア）

ワタナー・ウィタヤー・アカデミー カセサート大学附属高校（以上タイ）

フィリピン大学附属高校 新民高級中学（台湾）公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

大阪ASPnet 日本財団 NPO法人共存の森ネットワーク ESD Rice プロジェクト参加校（日本、韓国、インドネシア、フィリピン、タイ、インド）筑波大学附属学校教育局



ESDは本来の総合学科高校のあるべき姿そのものである。

## 僕たち私たちの世界自然遺産小笠原

環境

【キーワード】 小笠原 世界自然遺産 固有種と外来種



小笠原の自然について、環境教育の視点から系統的な指導計画を立案し、課題解決的な学習を行い、探究活動に主体的・創造的に取り組む態度と郷土小笠原への誇りや愛着を育むことをねらいとする学習を展開する。



### ■ 生きた校外学習

【3年生】小笠原の固有の昆虫について学習する。絶滅したとされていた固有種オガサワラヒメカタゾウムシの生息地への校外学習も盛り込んだ総合的な学習を展開。また、絶滅したとされていた固有種オガサワラオオコウモリの生態を詳しく学ぶ。フィールドサイン\*に気づく児童の発見の目を育てるとともに、生き物への愛情を育む。

【4年生】海岸と山との植生の違いや季節による変化を観察する。小笠原の固有の植物について学習する。

【5年生】アオウミガメの生態について学習する。海洋センターのアオウミガメ保護・調査活動「産卵調査」「卵の移植」「飼育」「放流」など体験的に学ぶ総合的な学習を展開。学習の成果をビクターセンターにて島民・観光客に向け発表している。

【6年生】絶滅危惧種であるアホウドリについて学習する。またタコノ葉細工を作成し伐採から飾り付けまで一連の工程を体験的に学び、タコノ木の植林を行った。小型船舶を使用した校外学習を盛り込み、最終的な総まとめとして、小笠原の人々の自然保護活動を改めて学習する。

\*…生息する動物種の痕跡（食痕、糞、巣、爪痕など）



## ▶ Outcome 成果と課題



自分たちの郷土である小笠原を誇り、小笠原を守っていこうとする児童を育む学習を、関係各所や研究者たちの協力を得て、実施できていることが成果である。教職員の異動、関係各所の職員や研究者の異動も激しい離島という条件下で、このプログラムを維持継続していくためには、地元関係者の協力を得ながら引き継いでいくということが大きな課題である。



## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 生き物と仲良くする

本校のESDは「環境学習」「世界遺産や地域の文化等に関する教育」である。児童は外来種を駆除するのではなく、固有種と外来種の共生の道はないかと新たな「価値観」を創出しようとし、すべての生き物と仲よくする「行動」に出ている。外来種も固有種も関係なくすべての小笠原の自然を愛してやまない児童である。教員も地域の関係者と連携することにより、世界自然遺産小笠原への愛情をより豊かにしている。

学校名：小笠原村立小笠原小学校（おがさわらしょうがっこう）

校長名：西沢 盛和（にしざわ もりかず） 児童数：138名

住所：〒100-2101 東京都小笠原村父島字宮之浜道

電話：04998-2-2012 対象学年：3～6年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：小笠原自然文化研究所 小笠原海洋センター

自然環境研究センター小笠原事務所

山階鳥類研究所 自然ガイドマルベリー

小笠原クラブ タコノ葉細工研究会 南洋踊り保存会

ボニン囃子 他



我が校にとってESDとは、郷土小笠原への誇りと愛着を育むこと。その郷土は世界自然遺産であり、その豊かな自然の持続可能性を担う児童の育成には、大きな期待とともに重い責任がある。



---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

## 第1節

# 幼稚園

---

# 「からくわ いちばん」

唐桑の素敵なところを探そう・遊ぼう

伝 統

【キーワード】 自然 伝承芸能 地域

## ▶ Goal ねらい



唐桑地域のよさを生かした体験を積み重ねる中で、たくさんの人たちとかかわり、地域や人や環境を大切にしようとする態度や意欲を育む。

地域の豊かな自然や伝承芸能を学ぶ活動とおして、幼児のコミュニケーション能力を育む。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ からくわのいいところみ〜つけた

地域の自然散策から、「いいものみつけマップ」を作成し、園内の友だちに伝える。

唐桑の豊かな海の生きもの探しをしたり、漁協や養殖場に行きカキやウニの生態を観察させてもらったりする。その経験を生かし、園内でウニやカキの模型をつくったり、絵を描いたりして、参観日で保護者等に披露する。他のユネスコスクール加盟幼稚園と作品交換したりする。



### ■ からくわのたいこおもしろいね

地区に伝わる伝承芸能「宿うちばやし」の皆さんを園に招き、打ち方を教えていただき、園児たちが実演したりする。さらに、唐桑の伝承芸能を継承する方がたと交流する中で、「からくわの人たちっていいね」という気持ちを感じ取らせる。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ からくわのいいところみ〜つけた

園児たちが水生生物を探したり、浜の石を集めたりしながら、唐桑の自然にかかわる中で、「ここにこんなものがあったよね」という地域を大事にする気持ちが育ってきた。

漁協の見学で、大きなカキに心を動かされ、そこで働く人たちから「唐桑の海は栄養がたくさんあるから、こんなに大きくなるんだよ」と教えていただいた。園に帰ってカキやウニの模型を実際につくってみて、環境意識が深まった。

### ■ からくわのたいこおもしろいね

園児がプラスチック容器を使用して自分の太鼓をつくり、音色を再現するなど自分たちの生活に積極的に取り入れている。

## ▶ Transformation

実践による変化

園児の感性が少しずつ豊かになり、日常生活や保育活動の中で、人や物にやさしく接したり、大事にする場面が多くなった。さらに、初めての経験や感動や驚きが、園生活全体でもよい影響を与えている。例えば「水は汚さないようにしよう」「弁当は残さず食べよう」などの意識が芽生えてきた。

毎年、継続して活動する中で、年長児などが年下の友だちに活動を伝えるなど、異年齢児同士の交流が豊かになり、互いを思いやる気持ちや憧れの気持ちが育ってきている。

唐桑の人たちとの交流をとおし、園児の顔や名前を覚えてもらって、日常生活でも安心してかかわる姿が見られるようになった。

学校名：気仙沼市立唐桑幼稚園（からくわようちえん）  
 校長名：小野寺 有一（おのでら ゆういち） 園児数：12名  
 住 所：〒988-0535 宮城県気仙沼市唐桑町馬場183-1  
 電 話：0226-32-2299  
 対象学年：年少児～年長児  
 教科・領域：環境・地域  
 連携校・団体：お茶の水女子大学附属幼稚園



子どもを取り巻く人や物や環境はとてかけがえないもので、大事に継続・発展させると同時に、時代に合ったものに変革していく勇気を与えてくれるものと考えます。





---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

## 第2節

# 小学校

---

# 持続可能な学校田活動

## 米の生産と消費

農業・食育

【キーワード】 学校田 農業体験 ふるさと 食

### ▶ Goal ねらい



かつては農業の中心であった稲作だが、近年の厳しい状況を反映して、校区の農家の多くは近郊型の蔬菜栽培に移行している状況がある。本校では、23年間の学校田活動で、一定の成果を積み上げてきた。ESDがめざす次世代の担い手づくりのために、必要な価値観や能力を育むことが本校の教育実践においては重要であると考え

る。「つくる」「育てる」「食べる」という一連の体験を通して、環境の保全や省エネ、郷土を愛する心および食に関する適切な思考力・判断力を育てたいと考える。

### ▶ Activity 実践内容



#### ■ 「つくる」「育てる」「食べる」

- ① 農業体験(栽培活動)を通した豊かな心の育成
- ② 「ふるさと 生振の稲作」について学ぶことによる地域理解の深化
- ③ 地域の特色を生かした体験活動の重視
  - a. 野菜や果物、観察用植物の栽培をする学級農園活動
  - b. 地域周辺の河川の環境保全のための植樹体験
- ④ 栽培した野菜や米等を調理して食べることと関係者との交流(食育)
- ⑤ 農業関連の地域環境の保全、省エネのあり方、国際交流の必要性の理解

上記のような教育活動を通して、地球温暖化と省エネ学習で子どもが主体的に行う節電・節水と、考え方の啓発を行った。





## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

- ① 農業（稲作）への意識が深まり、さらに食を含め農業を一体的に学ぶことで生きる力が養われている。
- ② 地域の特徴を生かした体験活動を通じた学習の深化が図られている。
- ③ 地球環境の保全や省エネの取組の必要性が理解されている。

### ■ 課題

- ① 子ども自身の生活習慣の見直しと、心身の健康の醸成。食に対する適切な思考力・判断力、食べものや命の大切さを考える態度を育成する。
- ② 自然や郷土を理解し愛する心の育成と地域のために活動できる態度を醸成する。
- ③ 子ども相互（異年齢含む）の人間関係の形成を促進し地域内外の新たな事象を知ること、視野の拡大を図る。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 子どもはESDの主体者

ESDの実践を通して、教師はファシリテーターとしての役割を果たすようになってきた。子ども同士が意見交換することを重視したり、子ども自身に学習の判断をゆだねたり、どうすれば自分たちの考えを他者に理解してもらえるか考えたりするような学習者の行動を引き出す役目である。また、コーディネーターとして、ESDに関わる地域の人材を講師として招いたり、地域の団体などの働きかけを子どもに行わせたりすることで、よりESDを実践する主体者としての意識と行動力が培われている。

学校名：石狩市立生振小学校（おやふるしょうがっこう）

校長名：設楽 正敏（したら まさとし）

児童数：54名

住 所：〒061-3245 北海道石狩市生振375-1

電 話：0133-64-2018

対象学年：全学年

教科・領域：総合的な学習の時間 生活科 特別活動 学校行事

連携校・団体：石狩ユネスコ協会 北海道ユネスコ連絡協議会



我が校にとってESDとは、現代的、社会的な課題に対して地球的な視野で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる子どもを育成する教育と考える。

# 大貫の生態系と文化のつながりを基礎にした 未来の担い手育みプロジェクト

環境

【キーワード】 環境教育 生物多様性 国際交流

## ▶ Goal ねらい



ふるさと大貫が豊かな自然環境に恵まれていることに気付かせ、環境と自分たちの生活のかかわりについて理解を深めさせる。自然にかかわる体験を通して自然環境・生態系保全の心を育成する。児童を発信源に、地域の人びとに環境保全の大切さを啓発する。持続可能な社会づくりに貢献する人材の育成を図る。



## ▶ Activity 実践内容



総合的な学習の時間で、3年生「大貫の自然を楽しもう」「蕪栗（かぶくり）沼の生き物たちを紹介しよう」、4年生「自然の宝を知ろう」、5年生「米作りを体験しよう」、6年生「自然環境を見つめよう」「未来を見つめよう」といった「ふるさと大貫」の学習を進めている。これは、「生き物調査」→「米作り」→「環境を考える」→「未来へ」という4年間を通した大単元となっている。活動の中で、ESD Riceプロジェクトに参加し、タイやフィリピンの小学校との交流を深め、異文化理解や「ふるさと大貫」への理解とふるさとを愛する心情を高めていくようにしている。さらに、この国際協働学習の一環として「田んぼと自分たちの街」を計画しており、50年後の理想の街を模型で作り交流する予定である。この協働学習では、大貫の過去・現在にわたる環境、経済、社会、文化を調査し、大貫の調和的な開発を目指す。また、未来の担い手としての児童の可能性発揮の場として活動を発表する機会を設け、保護者や地域の方にも知ってもらおう。この機会は、保護者や地域の方が持続可能な社会づくりのための生活について再考する場としていきたい。



## ▶ Outcome 成果と課題



4年間を通した「ふるさと大貫」の学習を進めることで、豊かな自然環境の中で生活していることや生物多様性についての理解が深まっている。さらに、環境保全の必要性や自分たちでできることを考え実行するなど、持続可能な社会づくりの担い手としての態度が少しずつではあるが見られるようになってきている。

課題としては、言語の問題でサポート体制が整わないと国際交流ができない点が挙げられる。今後は模型作りなどの五感に訴える非言語的な活動を介しての交流の深まりを目指している。

## ▶ Transformation

実践による変化

昨年、蕪栗沼周辺の清掃をした後、ゴミを少なくしたいという児童の思いから看板を作り設置した。環境省と大崎市の許可を得ることができ、児童の自己有用感を高められた。また、「おおさき子どもサミット」では、自然豊かな大貫の環境を残したいという考えを発表した。このように環境教育に長年取り組んできた結果、未来の担い手としての意識や態度が児童に芽生えつつある。さらに、国際交流から異文化理解や「ふるさと大貫」のよさの再発見など児童の視野が広がりつつある。

また、教員がESDに関する研修会を実施して教授法を検討したり、地域素材の掘り起こしを行ったりしている。

学校名：大崎市立大貫小学校（おおぬきしょうがっこう）

校長名：菊地 正美（きくち まさみ）

児童数：119名

住所：〒989-4302 宮城県大崎市田尻大貫字境37-1

電話：0229-39-0309

対象学年：3～6年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：NPO「蕪栗ぬまっこくらぶ」 NPO「田んぼ」

大崎市教育委員会 宮城教育大学

ESD Riceプロジェクト参加校：ジラサート・ウイタヤ

学校（タイ） カレ小学校（フィリピン）

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 山形大学



我が校にとってESDとは、自分たちの生活している地域を知り、そのよさを認識して自然との共生を目指す態度の育成。そして、ESDの活動を通して、自己有用感や自己肯定感をもたせ、未来の担い手としての育みを目指している。

# 人と自然とふるさと気仙沼の未来へと つなげる環境学習を体系化

環境

【キーワード】 生物多様性 森・川・海のつながり 水産都市気仙沼  
震災からの復興 海と共に生きる 地球にやさしいスマートシティ



## ■ 「書く活動」の実践を通じた能力育成

地域の人とかかわり、自然とふれあいながら、「ふるさと気仙沼」への思いや考えを深め、表現できる児童の育成を目指す。「書く活動」に重点を置いた実践を通して、主体的に学ぶ意欲、自ら考え、表現する力、実践する力を育成する。



## ■ 視点を定めてねらいに迫る

東日本大震災からの復興の願いやESDの指針を踏まえ、児童の育てたい資質・能力を精選し、「主体的に学ぶ意欲」「自ら考え、表現する力」「実践する力」をとらえ直し、以下の視点からねらいに迫る工夫をした。

▶視点1：人とかかわり、自然とのふれあいを重視した体験活動の充実 湧き水が流れ込む校庭の堰(せき)に、宮城教育大学の支援を受けてビオトープを造成し、水生生物のすみかづくりに取り組んだ。

▶視点2：地域・大学・専門機関との連携と地域人材活用の推進 カキやワカメの養殖の復活に取り組む方から、森と海のつながりを大切にした養殖業の経緯や復興にかける思いなどについて学んだ。

▶視点3：「書く活動」に重点を置いた指導の工夫

「指標生物の採集と観察による水質調査」の結果や面瀬川支流の浄化に関する話などをもとに、面瀬川の豊かさ、保護・保全をテーマに探究し「環境新聞」にまとめた。

▶視点4：伝える喜びを味わわせる発信の工夫

これまでの取り組みと、市の復興計画「スローでスマートなまちとくらし」とを関連づけ、再生可能エネルギーについて、「気仙沼ESD/RCE 円卓会議公開授業」や校内エネルギーフォーラムにおいて発信・提案した。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 学びの意欲と、考えを構築し実践する態度

体験活動の充実や専門機関との連携および地域人材の活用により、児童に課題意識をもたせ、主体的に学ぶ意欲の喚起と持続を引き出すことができた。

「書く活動」に重点を置いた指導により、自分の考えを構築でき、日常生活での実践に向かう態度を育むことができた。

### ■ 国語科との一層の関連づけ

「書く活動」を思考力・表現力育成の手立てとするため、国語科の指導の中に計画的に位置づける工夫が必要である。

## ▶ Transformation

実践による変化

学習のまとめの様子から、児童は地域の豊かさを再認識するとともに、自然環境の保護・保全に対する関心・意欲を一層高めた。また、校外学習への参画等により、保護者の理解が深まり、学校や地域とつながろうとする思いの高まりを感じる。さらに、復興にかける人びとや諸機関の取り組みを知るとともに、主体的に学ぶ児童の様子から、教職員は、ESDの意義や価値を一層深く理解し、地域に根差した環境教育プログラムの工夫・改善に取り組もうとしている。

学校名：気仙沼市立面瀬小学校（おもせしょうがっこう）  
 校長名：西城 敏幸（さいじょう としゆき）  
 児童数：362名  
 住 所：〒988-0133 宮城県気仙沼市松崎下赤田58番地  
 電 話：0226-22-7800  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：生活科 総合的な学習の時間  
 連携校・団体：宮城教育大学 宮城県環境政策課  
 宮城県北部鯉鮪漁業協同組合



我が校にとってESDとは、学校・保護者・地域の一体化を支え、一人ひとりが互いに面瀬地区の一員として、謙虚に、積極的に、充実した日常生活が送れるようにするための実践的なキーワード。

# 海に親しみ、人とのかかわり、海と共に生きる 環境教育の推進

牡蠣養殖体験活動を通して

環境

【キーワード】

海の豊かさ 人とのかかわり

ふるさと唐桑を愛する心 持続可能 海洋教育

## ▶ Goal ねらい



牡蠣養殖を中心とした体験活動を通して、「本地域の海の豊かさ（自然環境）」と「人とのかかわりやつながり（社会環境）」を実感し、「ふるさと唐桑」が水産業や観光を中心に今後も持続可能な地域社会として発展していくことができるよう、自らの生き方を見つめ、実践する力を養う。



## ▶ Activity 実践内容



### ■1・2年生

野菜栽培の活動をする。特に2年生は、鮭の稚魚放流体験をし、6年生時の「定置網おこし体験」につなげる。

### ■3年生

おいしい野菜を育てるために「良い土」とは何かを追究し、土壌生物の存在を理解し、豊かな土の世界を体感する。

### ■4年生

種はさみ体験<sup>\*1</sup>を行う。牡蠣の解剖を行い生態について追究する。また干潟や磯の生物調査を行い海の豊かさを知る。

### ■5年生

牡蠣の耳つり作業<sup>\*2</sup>、プランクトン調査、森海植樹祭等を通じて、牡蠣の成長には栄養分を作り出す森が必要なことや成長に適した養殖方法を理解する。

### ■6年生

牡蠣の温湯処理見学、水揚げ・殻剥き・販売体験を行う。牡蠣を大きく、良質にする工夫や努力を知り、牡蠣を生きものから商品として見つめ、安全でおいしい牡蠣に育てる生産者の思いを実感する。また、「定置網おこし」を体験して、地域





が恵まれた自然の中にあり、その恩恵を受けて生活していることを実感する。人間の手では創れない「唐桑の海」の豊かさに改めて気づき、自分たちがしなければならないことは何かを考えていく。

\*1…牡蠣の種が付着したホタテの貝殻をよったロープの間に挟み込む作業。

\*2…種はさみから1年を経過した牡蠣の貝殻(上下)の根元の部分に穴を開け、その穴を開けたところにテグスを通し、牡蠣を吊るす作業。

## ▶ Outcome 成果と課題



海への興味・関心は高まり、将来も豊かな海が持続できるよう、児童なりの考えをもつようになった。また外部の方がたから多くの支援をいただき、感謝の気持ちが育っている。震災後の植樹体験を通して、地域や世界の人とのかかわりを肌で感じる事ができた。子どもたちの活動を通して保護者や地域の方の学校教育に対する意識がさらに高まっている。

より効果的・効率的なプログラムへと改善を図るために精選化や焦点化、あるいは他教科との関連性を高め、発展的な交流計画を視野に入れる必要があり、専門機関との連携を充実させなければならない。

## ▶ Transformation

実践による変化

地域のことを理解し、積極的にかかわろうとする姿が、児童や教員に見られるようになった。震災後、日本中そして世界中から支援を受けたことは、牡蠣養殖活動を進めていく上でのモチベーションを高めている。また児童は牡蠣等の水生生物への興味・関心だけでなく、周りの環境と関連づけて考えたり、水産業の視点から「流通や食の安全」を考える意識の高まりや深まりが感じられるようになった。保護者の教育に対する意識も高まり、児童の視点で物事を考え、さらに質の高い支援をいただけるようになった。地域が「海と共に生きる」をテーマに復興に取り組んでいることから、安全面へ配慮し、児童を豊かな海に戻しながら、海の怖さと豊かさの両面をとらえさせることで、持続可能な地域を担う人材を育成できると考えるようになった。

学校名：気仙沼市立唐桑小学校(からくわしょうがっこう)  
 校長名：熊谷 正子(くまがい まさこ) 児童数：96名  
 住所：〒988-0533 宮城県気仙沼市唐桑町明戸208-6  
 電話：0226-32-3142 対象学年：4～6年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：気仙沼市内のユネスコスクール  
 宮城県漁協唐桑支所 唐桑公民館  
 NPO法人森は海の恋人



我が校にとってESDとは、児童、教員、保護者、地域の方々が、ともに手を携え歩むべき未来への道。

## 食を通して地域を見つめ 持続可能な郷土の未来を描く児童の育成 階上小スローフードボランティア協会との連携を通して

農業・食育

【キーワード】

震災復興に果たす食文化の伝承 スローフード・食育  
地域との連携



未来に残したい気仙沼の食材を中核に「理想とする未来社会」の実現に向け、一人ひとりが方法を考え具体的に提言する。



### ■ 故郷の食を探求

気仙沼市のスローフード都市宣言をもとに、2002年に「階上小スローフード」宣言をした。それ以来、1～6年生までが「食」について課題を見つけ、地域とかかわりながら系統的に学習している。地域の「食」について学んでいくなかで、自分自身や地域の将来のあるべき姿を提言する力を育てたい。（※各学年の内容は下段参照）

【1・2年生】特産物である茶豆の栽培、観察、収穫を行う。

【3年生】「名人発見!ぼくらの階上」の単元で、いちご栽培やそば栽培等、農業者から「地域」と「食」のかかわりを学ぶ。

【4年生】「一粒の米から」というテーマで水田での体験・観察学習を行う。児童が課題を設定し、稲の生長や流通、地域や暮らしとのかかわりなどについて追究活動を行う。

【5年生】「豊かな海・気仙沼-見つめよう、考えよう、気仙沼の水産業」のテーマで地域の基幹産業である

水産業に注目し、産業と暮らしや地元食材と環境のつながり等を課題にして追究活動を行う。

【6年生】「スローフードを知ろう」をテーマに、気仙沼のスローフードを学び、修学旅行地の岩手県盛岡地方のそれと比較体験学習する。また、「味の箱舟」では6年間の「食」に関する学習から、気仙沼の食の魅力を未来に伝える取り組みを考え、具体的な実践として提言する。

以上のような活動を階上小スローフードボランティア協会の協力を得て実践している。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

郷土の自然・環境・暮らしを題材とした学習により、地域への興味・関心が高まり、課題を設定し追究する力がついた。

震災に負けずに地域の食材や食文化を守っていかようとしている地域の方がたとの交流を重視し、実践に生かすことができた。

### ■ 課題

今後も地域に根ざした食育を継続させていくために、地域との持続可能な連携の在り方を探っていききたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

児童は故郷の地域の食材、食文化の素晴らしさを知り、それらに誇りを持つことができた。身近な食材や料理を故郷の自然や風土、歴史や産業が色濃く反映された価値ある物として捉え直すようになった。さらに、児童は食材や自然環境等も大切に伝えていこうという意識を持つことができた。

多様な学習活動を通して、児童の協力性や協調性が明らかに向上していった。

学校名：気仙沼市立階上小学校（はしかみしょうがっこう）

校長名：小野寺 正司（おのでら まさし）

児童数：215名

住 所：〒988-0223 宮城県気仙沼市長磯鳥子沢23番地

電 話：0226-27-2303

対象学年：全学年

教科・領域：生活科 総合的な学習の時間

連携校・団体：階上小スローフードボランティア協会



我が校にとってESDとは、「食」を通して地域の良さを知り、これからも地域とよりよく関わっていかようとする前向きな人を育てる営み。

# 震災後「共に生きていく社会」について 考える学習

## 3.11を経験した子供たちに未来への希望を与える防災教育の在り方

**防 災** 【キーワード】 3.11以降の防災教育 「伝え合い」学習  
「教材、人とのつながり」



①防災意識の高揚(多面的・総合的、批判的思考力) ②震災後の地域環境を生かした復興の取組への理解(他者と協力、つながり、コミュニケーション) ③他者と関わり、共に生きていく社会の形成者としての思い(未来予測、主体的な参加)の育成の3点とする。



### ①「3.11以降の気仙沼を生きる」ESDプログラムの作成

全学年で「防災教育」の探求型学習プログラムを行っている。復興の観点からワカメ養殖の体験学習も取り入れ、地域づくりへの思いを育む復興教育としてのESDプログラムも試行している。6年生は地域環境の特性、産業、地域福祉の観点をもちながら、お互いの意見を交換、検討し、未来予想図「お互いの命を大切にし、共に生きていく気仙沼」のリーフレットを作成する。それを地域に向けて発表し、仲間と共に未来に向かって主体的な態度を高めさせたいと計画している。

### ②「教材や人とのつながり」のある体験活動

6年生の「防災を考えよう」の単元では、自助および共助の意識を高めるために以下の体験活動を行った。

#### a. 家族と共に考える3.11(教材との出会い・つながり)

震災当時の様子を家族から聞き、各家庭で話題となった内容をテーマ別に分けて参観日に発表したりし、家族を巻き込みながら、自助への関心を高める学習の導入を図った。

#### b. 人材活用による体験活動(人とのつながり)

サバ飯作り、救急救命講習会等の関係機関と連携した体験を通して、災害時に役立つスキルを学び実践化につなげた。

キー・コンピテンシー\*…OECDによって定義された主要能力。日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、①人生の成功や社会の発展にとって有益、②さまざまな文脈の中でも重要な要求(課題)に対応するために必要、③特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたもの。個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略。



### ③「伝え合い」(コミュニケーション)の能力を育てる授業づくり

友だちや他者とコミュニケーションを図りながら、自主的に行動する能力を高められるようなキー・コンピテンシー\*を意識した学習展開の創造を行っている。地域の人々に、児童の考えを発信していく活動を行うことで、地域づくりの担い手としての意志を高めている。



保護者と共に考えた「我が家の防災」学習

担い手として将来の地域づくりに参画できるようなプログラムに改善していく必要がある。

## ▶ Transformation

実践による変化

- ・地域への興味・関心が高まり、課題を身近なものとしてとらえ係わろうとする態度が育成され、その解決に向けて主体的に実践・行動しようとする児童が増えてきた。
- ・地域人材を活用したり、学校から児童の考えを地域に向けて発信したりする活動が多くなった。このことによって「地域と共に進む学校」という経営理念が実現できた。また、児童のメッセージに耳を傾ける地域の方も多く、児童の活動が地域の大人の意識を変革するきっかけとなっている。

## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

3.11を経た気仙沼で防災教育を行うことは、児童の自助の心を育て、家族、そして地域全体の防災意識を高めた。復興の担い手としての自覚を高めることができた。

### ■ 課題

今後の復興状況の変化に伴い、児童が社会の

学校名：気仙沼市立松岩小学校(まついわしょうがっこう)

校長名：菅原 輝夫(すがわら てるお)

児童数：385名

住所：〒988-0122 宮城県気仙沼市松崎五駄鱈5

電話：0226-22-7153

対象学年：全学年

教科・領域：生活科 総合的な学習の時間

連携校・団体：フィリピン・カワヤン小学校

宮城県立気仙沼支援学校および気仙沼市社会福祉協議会  
松峰園や恵風荘等老人福祉施設



我が校にとってESDとは、気仙沼の復興を照らす希望の光である。

# ふるさと「みくり」再発見！

「高山社学」の推進を通して

伝統・地域

【キーワード】 世界遺産 富岡製糸場と絹産業遺産群（高山社跡） 伝統文化



## ■ 「高山社」の学習

校区の自然や生活について、地域の人、ものとかかわりながら調べ、まとめ、発信する活動を通して、郷土「みくり」のよさを再発見させ、ふるさとを大切にすることを育てる。

「高山社」(世界遺産)を核とした学習を通して、課題を見だし、解決するために必要な思考力・判断力・表現力や態度を養う。



## ■ 養蚕とそれを支えた人びとを学ぶ

『ふるさと「みくり」再発見!』をテーマに、郷土学習「高山社学」を教育活動に位置付け〔「高山社学」教育構想・教育推進計画（ESDカレンダー）〕、児童の発達段階に応じて、6か年を通して、活動している。

3～5年生の総合的な学習の時間では、地域の地理的特徴、歴史・伝統、生活の様子等に目を向けた学習を行い、ふるさとのよさを再発見している。

4年生では、3年生の地域学習を基に、学校で蚕を飼育して繭を作ったり、「高山社」を訪問して養蚕方法や養蚕に取り組んだ先人の工夫や苦勞を学んだりしている。

5年生では、4年生から継続して6月まで蚕を飼育し、その後4年生への蚕の引き渡し式を行い、蚕の飼育方法、桑の栽培方法等について伝達している。また、「高山社」と関連する日本の近代化を支えた絹産業にかかわる富岡製糸場の見学を通して「高山社」の歴史的価値を理解し、郷土を誇り、愛する態度を育てている。

6年生の図画工作では、「高山社」を題材に絵を描いたり、卒業式で飾るコサージュを4年生か



ら贈られた繭でつくる等している。また、社会の授業では、「富岡製糸場と高山社」の歴史学習を行っている。

学校で蚕を飼育する際には地域の養蚕農家の方の指導を受けたり、「高山社」訪問の際に藤岡市教育委員会文化財保護課の解説員から説明を聞いたり、座繰り体験（繭から絹糸をとる体験）では「まゆ花の会」の方に、繭を使ったコサージュづくりでは「更生保護女性会」の方に講師を依頼するなど、様々な人との交流の中で学習を進めている。

## ▶ Outcome 成果と課題



地域に対する関心が高まり、ふるさとを大切にしようとする心が育ってきた。

今後は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録されたことを機に、資産に視点を当てた授業づくりに努める。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 生きた題材で育てる

地域の地理的特徴、歴史・伝統（高山社）、生活の様子等に目を向けた学習を行うことで、地域に対する関心が高まり、ふるさとを大切にしようとする心が育ってきた。

地域の生きた題材を扱い、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現をスパイラルに継続する中で、よりよく問題を解決する資質や能力が育ってきた。

学校名：藤岡市立美九里西小学校（みくりにししょうがっこう）

校長名：茂木 隆幸（もぎ たかゆき）

児童数：99名

住 所：〒375-0037 群馬県藤岡市三本木769番地

電 話：0274-22-1945

対象学年：全学年

教科・領域：総合的な学習の時間 他

連携校・団体：まゆ花の会 更生保護女性会



「高山社学」の推進にあたっては、ESDで育む資質である、「体系的な思考力」「持続可能な発展に関する価値観」「情報収集・分析能力」「批判力」「コミュニケーション能力」との関連を図り、その育成に努める。

# 地域と紡ぐ坂浜里山プロジェクト

未来を創る人材づくり

農業・食育

【キーワード】

里山 地域学習 探究学習 協同学習  
人材づくり ESD Riceプロジェクト



地域の特性を活かして教材を開発し、地域の良さを捉え、愛着をもち、誇りに思い、より持続発展させていこうと行動する児童を育成する。

「知る・考える・行動する」の各々の段階において、「学びの術<sup>\*</sup>」を取り入れた授業を様々な教科で展開することを通して、児童の論理的な思考力を高め、客観的・自律的に判断し行動できる児童を育成する。

\*…本校で開発した、思考を広げたり深めたりするための手立て。



## ■ 未来の地域像を描くため

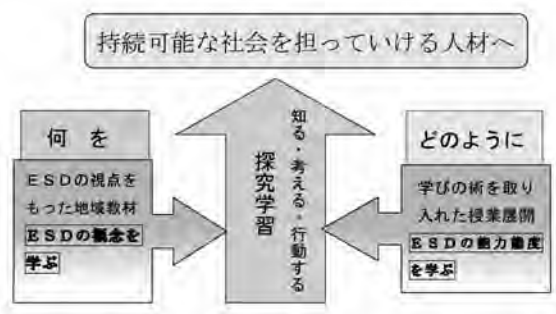
高学年のうち4年生は「再発見!こんなにすごいぞ、上谷戸親水公園!」という調査を通して、公園を造った地域の人々の思いや願いを知り、それを伝え広めるために行動していく。このプロジェクト学習を通して相互性と連携性を学ぶ。

5年生は「田んぼ調査隊」として、地域の里山に残る谷戸田の調査・観察を通して、生物の多様性や歴史的価値、田んぼと森と人のつながりを学び、谷戸田を未来に残したいという願いを膨らませ、その価値を伝えるための行動をしていく。

「動き出そう!坂浜プロジェクト」は6年生によるまとめ。児童が地域の開発計画について知り、6年間で学んだ地域の良さや課題と向き合いながら未来の地域像を描き、自分たちにできることを考え、行動していくプロジェクト学習である。

「全校稲作活動」は全学年による活動で、体験的に相互性と連携性を学ぶ。

ほかにも国際交流による新しい学習が展開されている。







## ▶ Outcome 成果と課題



児童及び教師も今まで以上に、地域に誇りと愛情をもち、地域の行事へも多く参加するようになった。

探究的・協同的な学習を取り入れていったことで、コミュニケーションの力や言葉で伝える力が向上した。



学校名：稲城市立稲城第二小学校（いなぎだいにしょうがっこう）  
 校長名：植松 辰夫（うえまつ たつお）  
 児童数：100名  
 住所：〒206-0822 東京都稲城市坂浜590  
 電話：042-331-5709  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間 生活科等  
 連携校・団体：長野県野沢温泉村野沢温泉小学校  
 ウランバートル市モンゲンニ統合学校（モンゴル）  
 [「Joining Hands Project」(日米協同プロジェクト)校]  
 川棚町立川棚小学校  
 Windsor Hills Elementary School,  
 Falmouth School in Falmouth Maine,  
 Neil Cummins Elementary School（以上、米国）

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 教科間の連携

ESDが市の教育方針及び学校経営に位置付けられ、ホールスクールとして学校全体で取り組み、教科間連携、学校行事の活用が行われるようになった。

地域にもESDの考えが浸透してきている。サマースクールを旧学校名にちなんだ「立志学校」として立ち上げた。地域の方が主催し、講師となり展開するなど、地域教育力が向上した。



我が校にとってESDとは、「未来につながる学び」への鍵。21世紀型学力・これから求められる人材に必要な概念・資質・能力を育てるために、どのような視点で現在の学習の中にかくに取り入れ、ステップアップさせていくかを明示したもの。学校と地域が共に手を携え、効果的に、グローバル人材を育成するための共通土台となる重要な考え方。

## 母島ならではの校外学習を通じた ESDの実施

**環境** 【キーワード】 本校にしかできない校外学習  
6年間で小笠原の自然を学ぶ 「興味・関心」から実践へ



### ■ 自然環境の校外学習

2011年に小笠原諸島が世界自然遺産に登録されたこと、本校がユネスコスクールに認定されていることを受け、母島固有の豊かな自然環境と、地域の人材を活用した校外学習を各学年で実践し、ESDの学びの方法である「多様な立場・世代の人びとと学び」「人や地域の可能性を最大限に活かす」ことを大切にしている。

「生き物と人とのかかわり」を深く考えることにより、ESDの目指す「問題の本質を見抜く・批判する思考」や「多様な価値観をみとめ、尊重する」能力の育成を目指している。



### ■ 発達段階にあわせた校外学習

発達段階にあわせて6年間で小笠原の陸海の自然環境がくまなく学習できるように校外学習の指導計画を作成・実施している。低学年は「体

験」を通して「興味・関心」につなげること、中学年では「知る・理解する」、高学年では「実践する」といった段階に配置している。

1・2年生の「南崎校外学習」では、母島の自然環境を体験する導入として、島最南部の「南崎」へ行き、母島周囲を見渡せる「小富士」への登山やシュロの葉を使った遊びなどの体験を通して、自然への興味・関心を高める。

3・4年生の「知る・理解する」段階をへて、6年生では「父島移動教室」で二泊三日の学習を行う。本年度は、地域のNPOの協力でオガサワラオオコウモリの学習を実施し、オオコウモリの生態だけでなく、農業とのかかわりについても学習することができた。

また次年度は、母島で保護されたノネコの保護施設での学習等、より系統的な学習を企画している。

### ■ 地域人材を活かしたゲストティーチャー

校外学習では、事前学習の時点から、地域で活動する東京都アクティブレジャー、自然ガイドやダイビングインストラクターの協力を得ている。また、地域の高齢者や保護者の学校教育への積極的な参加により、その時々にあわせた教育活動への協力が円滑に図られている。

### ■ 発表・発信の場の創造

各学年が10名未満で少人数のため、様々な形態で多くの人の前で発表する機会を創ることを重視している。

7月と1月の年2回の「母島タイム」（全校発表）では、3～6年生が校外学習の学習成果を一



人ずつ発表する。発表会には保護者や協力をいただいたゲストティーチャー、中学校の教員も見学を訪れる。発表会后に、学習の成果として作成した掲示物を、島民や観光客が利用する「ははじま丸船客待合所」に展示することで、より多くの人への発信の場としている。夏休みの1か月間展示され、見学者用の感想カードを用意し、2学期にカードの内容を伝えることで、児童にさらなる学習の意欲をもたせている。

との連携を探り、他校での実践を知ると同時に、本校ならではの校外学習とその成果を、島外に発信していきたい。



### ■ 成果

島の環境・社会条件を使い、本校にしかできない校外学習が実践できている。また、児童の自然環境に対する知識、環境に配慮した生活から、一定の変化と成果が得られている。

さらに、多くの校外学習では登山や、徒歩での長距離の移動、海での活動をとまなうため、心身面での成長が表われている。

また、系統だてた校外学習により、小学校の6年間を通して、小笠原の自然の様子、人とのかわりを児童が無理なく知ることができている。

### ■ 課題

島という閉ざされた環境にあっても、インターネットや島外施設の利用、他のユネスコスクール

## ▶ Transformation

実践による変化

児童は自然環境に大いに興味・関心を持ち、経験と知識を増やしている。児童が大人になったとき、どのような形で小笠原の自然とかわっていくのが楽しみである。

児童が学習したことを、保護者をはじめとした島民に知らせることは地域にとっても、母島の自然の新たな発見につながっている。

学校名：小笠原村立母島小学校（ははじましょうがっこう）

校長名：佐藤 優（さとう まさる）

児童数：32名

住 所：〒100-2211 東京都小笠原村母島字元地

電 話：04998-3-2181

対象学年：全学年

教科・領域：生活科 総合的な学習の時間

連携校・団体：なし



我が校にとってESDとは、「気持ちや考えを表現する力」「みずから実践する力」の育成である。

## ESD 実践を通じたグローバル学力の育成

江戸・深川の歴史を調べ、この町を語ろう

**総合** 【キーワード】 ESDカレンダー グローバル人材 地域の文化  
日本人としてのアイデンティティ 問題解決能力

▶ **Goal** ねらい

ESDカレンダーに基づいた全学年の教育活動を基盤に、グローバル人材の育成を進める。6年生の前期においては、地域の豊かな文化に気づき、調べ、語る学習を通じ地域の文化を学び、その一員としての誇り、日本人としてのアイデンティティを育む。

教科領域	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	学習計画表作り	伝えたいこと	自分を見つめよう	手紙に込めてみる	調べよう							
算数	資料の調べ方・平均											
理科	身のまわりの変化	生物と人間の関係	人間のつくりと変化	生物と地球の関係								
社会	日本の文化を学ぶ	東洋の文化と人々の暮らし	日本とつながりの歴史	世界の文化と日本の歴史								
総合	未来への探検	江戸・深川の歴史を調べ、町を語ろう	世界のつながり	世界のつながり								
英語	英語の基礎	英語の基礎	英語の基礎	英語の基礎								
音楽	音楽の基礎	音楽の基礎	音楽の基礎	音楽の基礎								
美術	美術の基礎	美術の基礎	美術の基礎	美術の基礎								
道徳	道徳の基礎	道徳の基礎	道徳の基礎	道徳の基礎								
体育	体育の基礎	体育の基礎	体育の基礎	体育の基礎								
家庭科	家庭科の基礎	家庭科の基礎	家庭科の基礎	家庭科の基礎								

▶ **Activity** 実践内容

この町が400年前の江戸初期に深川八郎衛門を中心に開発された場所であるということや、小名木川の水運により関東一円の物流の中心となり、そこに文化が生まれたこと等を学ぶ。世界に誇る「Sushi・寿司」を初めとする多様な食文化もここで生まれ、葛飾北斎の浮世絵、松尾芭蕉の俳句、相撲の発展、伊能忠敬の測量地図などにも深く関わった地域である。

運河を利用した輸送網やそこで活躍した舟や船番所など、江戸庶民の暮らしを中心に地域の人々とともに学び、見学した。

これらをまとめ、保護者や5年生にわかりやすく伝えるという学習である。

この学習は、毎年工夫を重ねながら今年で5年目を迎え、定着し発展している。





## ▶ Outcome 成果と課題



毎年5年生に向けて発表しているため、年を追うごとに前年の6年生を超える学び方や発表の方法が工夫され、内容も進化している。6年生の成長は「八名川まつり」等の行事を通じて全校に広がり、1年生から6年生まで、全校のコミュニケーションやプレゼンテーションの各能力が飛躍的に向上している。

また、「子どもの学びに火をつける」指導を心掛け、児童自身が問題意識を持って学び評価されることで自信もつき、問題解決能力としても成長がみられる。

## ▶ Transformation

実践による変化

地域の方の授業協力によるふれあいや体験を通じて、児童は地域の一員としての自覚が高まり、地域行事への参加率が向上している。また、教員も地域に根ざした教育の重要性に気づき、地域での体験的な学習を工夫するだけでなく、児童に地域行事への参加を促し、自らも地域行事に対し自然に参加協力するようになっている。

また、学習の開始と同期して地域に「八名川の昔を語る会」が生まれ、この3年間の成果が本にまとめられた。今年の6年生はこの本『八名川の歴史を学ぼう』も参考資料として活用し、保護者をも巻き込みながら学習を進めている。



学校名：江東区立八名川小学校（やながわしょうがっこう）  
 校長名：手島 利夫（てじま としお）  
 児童数：372名  
 住 所：〒135-0007 東京都江東区新大橋3-1-15  
 電 話：03-3633-5428  
 対象学年：6年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：世界13か国の小学校から大学52校、約330名の  
 教員、研究者、及び政府関係者等  
 「ESD パワーアップ交流会」主催（後援：公益財団法人  
 ユネスコ・アジア文化センター、日本ユネスコ協会連盟）

「基礎的・基本的な知識の獲得」と「問題解決能力・コミュニケーション能力」の育成は、どちらが欠けても、厳しい世界で持続可能な社会を創り続けるグローバルな人材とは言えない。本校の教育においては、この双方をハイブリッド化した指導を心がけている。また同時に、多様な人とともに実践し続ける力までを含めてESDの指導と考えている。

# ESDで育てる学力

児童の問題解決能力と協力する態度と活動意欲について

総合

【キーワード】 主体性 問題解決能力 自己評価力



ESDは、持続可能な社会づくりへの価値や行動を求めている。しかし、小学校の発達段階では、実践に向けた能力・態度の育成を図る必要がある。そこで本校では、

- ①よりよく問題解決を図る能力
  - ②協力する態度
  - ③活動の意欲
- の3点を育成のねらいとした。



発達段階に応じて地域、国内、世界へと視点を広げるよう計画している。校内や周辺の自然環境を活かした環境教育や地域学習、環境について学んだことをきっかけにした国際理解教育を指導している。一連の学びによって、生命や循環、多様性等について主体的な学びを深めるよう指導した。指導方法は、課題発見・予想と計画・調査・まとめ・発表や発信のサイクル(多摩一型問題解決学習の流れ<sup>\*1</sup>)を毎年くりかえし、問題解決能力が高まるよう指導している。

発信については、小学生にできる行動の一つと捉え重視した。ポスターセッションやグループ発表のスキルは低学年および3年生までに経験させ、4年生からはWeb会議による他校との交流やE-mailによる交流を行った。

\*1…多摩市立多摩第一小学校において実践されている問題解決学習。「問題把握」「体験」「課題設定」「仮説」「計画・立案」「検証」「結果・結論」「発信・実践」をする活動を児童が6年間を通して繰り返し経験することで、問題解決力が身についていく学習の一連の流れ。

\*2…認知心理学の用語。自分の行動・考え方・性格などを別の立場から見て認識する活動をいう。

\*3…OECDによって定義された主要能力。日常生活のあらゆる場面で必要なコンピテンシーをすべて列挙するのではなく、コンピテンシーの中で、特に、①人生の成功や社会の発展にとって有益、②さまざまな文脈の中でも重要な要求(課題)に対応するために必要、③特定の専門家ではなくすべての個人にとって重要、といった性質を持つとして選択されたもの。個人の能力開発に十分な投資を行うことが社会経済の持続可能な発展と世界的な生活水準の向上にとって唯一の戦略。



## ▶ Outcome 成果と課題



身近な問題を、総合的な学習の時間に問題解決のプロセスで取り組むことで、自ら問題を設定し、グループで工夫して解決を図り、思考力や表現力、活動意欲や協力する態度が向上した。このことから、総合的な学習の時間を問題解決のプロセスで取り組ませることが、ESDとして効果的であることが明らかとなった。また、教科の授業でも問題解決学習の流れを一部取り入れた活用型学習が有効であること、さらに、児童の自己評価がメタ認知<sup>\*2</sup>力の向上に有効であることがわかり、日常の指導に活かしている。

活動の評価方法を明確にすることや、導入されたタブレットPCの活用など、学年ごとに育成するスキルの明確化は今後の課題である。

## ▶ Transformation

実践による変化

指導の方針やねらいが教員に定着した。児童が見通しをもって活動したり、高学年では意見を重ねて思考を深めたりすることが見られる。発信については特に活動意欲が高かったが、他の教科でも考えることや発表すること、意見を言い合うことに成長を見せている。児童自ら、地域の方や専門家にインタビューを実施することも定着し、地域への理解も深まっている。海外の学校との交流でも臆することなく、自分たちの考えを述べている。学校全体として問題解決を図る力が毎年向上している。

学校名：多摩市立多摩第一小学校（たまだいいちしょうがっこう）  
 校長名：棚橋 乾（たなはし かん）  
 児童数：755名（5月1日現在）  
 住 所：〒206-0011 東京都多摩市関戸3-2-23  
 電 話：042-375-7020  
 対象学年：3～6年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：横浜市立永田台小学校  
 青梅市立第五小学校 大田区立嶺町小学校  
 Allerum Elementary School（スウェーデン）



ESDのEは教育。成果として学力が高まることが求められる。この学力とは、生きる力の確かな学力やOECDのキー・コンピテンシー<sup>\*3</sup>と同義の能力・態度（学力）である。ESDには問題解決能力をはじめとする21世紀型学力の育成を図る力がある。

# 海外の同世代と壁画共同制作（アートマイル）を通じた交流でグローバル意識を育む

国際

【キーワード】 異文化理解 海外の同世代との協働の体験  
外国語活動の活用

## ▶ Goal ねらい



アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクトを活用し、文化背景・価値観が違う同世代と交流して相互理解を深めながら共通のテーマで学び合い、協働学習の成果として一枚の壁画（ビニール製キャンバス1.5m×3.6m）を共同制作する。

### 【育てたい力】

- ・情報発信能力（収集・発信）
- ・コミュニケーション力（説明・共感・国語力・英語力）
- ・自文化理解力（自分を見つめる）
- ・異文化理解力（相手を知る）
- ・人間関係をつくる力（学級内・交流相手）
- ・協働作業をする力
- ・学習を追求する意欲
- ・表現力（伝えたいことを絵で表す）
- ・鑑賞力

## ▶ Activity 実践内容



学習の主な流れは、①交流先の決定②相互理解③壁画の共同制作④活動の振り返りである。

交流先は、児童が世界のいろいろな国について調べ、海外赴任者の話を聞くなど幅広く主体的に学び、最終的にパキスタンの学校との交流を決定した。交流が始まると、共同でテーマを決定したり、日本から自己紹介ビデオを送ったりした。さらに、英語活動の成果を生かすため、テレビ会議を実施して自己紹介やけん玉などの遊びの実演を行った。このような相互理解のもと、壁画の構図について意見を交換し合い、構図を決定した。壁画は、日本が半分を完成した後パキスタンへ郵送し、相手校が残り半分を作成した後日本へ返送された。完成した壁画を鑑賞するとともに、活動の振り返りを行った。







## ▶ Outcome 成果と課題



国を越えて文化や価値観の違いを知り、互いを認め合い、尊敬・尊重する気持ちや態度が育った。同時に、日本の文化や歴史、日本人の特性を紹介することで日本のよさを再認識し、自国に誇りを持つことにつながった。こうした学びから、自国・他国に限らず、相手を先入観やイメージで決めつけず、実際にかかわることを大切にし、自分の目と耳と心で確かめようとする態度が育った。

なお、相手国の学校にも行事や休業期間などがあるので、頻繁に連絡を取り、調整することが大切である。英語力もある程度は必要である。

今後、さまざまな国との交流を続けるとともに日本国内のユネスコスクールとも交流を深めたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

最初は相手の国について何も知らなかった子どもたちが、交流を始めて互いの国の違いを感じ、日本を意識する様子が見られた。さらに、テレビ会議を通じて直接相手と話すという経験をする中で、自分たちと同じ部分を感じ取り、親しみを深めていった。完成後送られてきた荷物から壁画を取り出した時、拍手と大きな歓声があがった。一つの作品を共同制作した実感に溢れており、良質な体験を伴う活動の重要性を感じた。パキスタンとの交流時に「紛争のイメージがあり、怖いと思っていたが、勝手なイメージで決めつけずにその国のことを良く知ろうと思った」と書いた子どもが多数いて、意識の変化があったことがわかった。

学校名：多摩市立南鶴牧小学校 (みなみつるまきしょうがっこう)  
 校長名：吉田 正行 (よしだ まさゆき) 児童数：551名  
 住所：〒206-0034 東京都多摩市鶴牧5-43  
 電話：042-372-1860 対象学年：5年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：藍住町立藍住西小学校  
 Rixin Elementary School (台湾)  
 (アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト/2014)



我が校にとってESDとは、これからの社会を担っていく「2050年の大人づくり」である。

# 連光寺 SATOYAMA・SATOOGAWA プロジェクト

総合

【キーワード】 つながり 感動体験と問題解決 発信 自分ができること

## ▶ Goal ねらい



本校は多摩ニュータウンの雑木林や里山での営みを意図的に保護している公園や研究所などと隣接し、開発を免れた地域にある。生活科と総合的な学習の時間では、地域の方や研究機関にご協力いただき、10年以上地域と連携した体験活動を続けている。この学習活動をESDの視点から見直し、豊かな心とともに未来社会に必要な能力・態度を育むことをねらいとし、研究を進めている。

## ▶ Activity 実践内容



1・2年生は「わんぱくタイム」としてミニたてわり活動と学年毎の活動を年間で実施する。

3年生は、地域の商店や施設から「すてき」な場所を選び、仕事体験を行う。地域と人びとの仕事の様子から「自分にできる事」を見つける。

「川は自然の宝箱」のテーマで多摩川の学習に入る4年生は、自然の豊かさを実感しながら課題を見出す。後半、中流域の水の8割が生活排水の処理水であることを学び、自分の行動や今後すべきことを考え、結果をまとめて発表する。

5年生は「里山プロジェクト」で筍掘りや谷戸田での稲づくり、炭焼き等、里山での営みを体験する。ユネスコスクールとの交流も進める。

6年生では自然と人のかかわりを基に地域の歴史に目を向け、各自が問題解決学習を行う。結果を韓国のユネスコスクールと情報交換し、地球で生きる仲間として自分たちができる事について考える。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

- ① 体験に基づいた問題解決学習を通して身につける能力・態度が明確になった。
- ② 問題解決の方法が身についた。

### ■ 課題

- ① 評価の客観的方法が明確になっていない。
- ② 学習時間や準備の時間の確保。

## ▶ Transformation

実践による変化

10年間の体験活動の中で、研究機関の方や教職員は、連光寺小の子どもたちの心が豊かになっていることを漠然と感じていた。今回、体験活動をESDの視点で捉えなおすことにより、未来社会の構築者として必要な心を支えるための能力・態度が明確になった。それにより、ねらいや評価の観点も明確になった。

また、他校との交流や地域への発信の大切さが、教職員間で共通理解できた。児童は、交流や発信を相手に分かりやすいようにまとめるなど、聞き手を意識した発表について工夫することができた。

国内外の他のユネスコスクールとの交流を通して、児童は互いに、これからの社会を生きる仲間であることを感じとっていた。

学校名：多摩市立連光寺小学校(れんこうじしょうがっこう)  
 校長名：阿閉 暢子(あとじ のぶこ)  
 児童数：400名  
 住 所：〒206-0021 東京都多摩市連光寺3-64-1  
 電 話：042-373-1920  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：生活科 総合的な学習の時間  
 連携校・団体：韓国月山(ウォルサン)小学校  
 玄海町立値賀小学校  
 寒河江市立高松小学校  
 森林総合研究所多摩森林科学園  
 多摩市水辺の楽校 等



ESDは、本校で10年以上にわたって継続してきた豊かな体験を、体験だけに終わらせないための重要な教育観である。ESDにより、体験活動の意義が明確になり、教育活動としての価値づけをすることができた。

# 持続可能な教育を実現する学校づくり

サステイナブルスクールを志向する環境デザイン

環境

【キーワード】

ケアリング(気にかけている) レジリエンス(気に病まない)  
マインドフルネス(気が付いている)



持続不可能な様相を呈している地域社会を持続可能な方向へ子どもたちが導く。持続可能性に向けた価値観・行動・ライフスタイルの変容を具現化する。ホールスクール手法\*を実践し、児童も教師もエンパワーされる。

## ■めざす子どもの姿

- 自分の命
- みんなの命
- 地球の命を大切に
- 子どもたちが行動し
- 持続可能な社会を創り上げる
- 永田台の子

\*…学校全体として取り組み、それを継続的に深めていく手法。



身近な環境、自然事象に目を向け、「影響・変容・変革」を求める子どもの育成を図る。(グローバルな活動の全校的取り組みと世界への発信)

## ■ESDにかかわる主な学習内容

- 1年生：「永田台小学校のいいところいっぱい見つけたいな」
- 2年生：「まちたんけんで見つけよう！わたしたちを見守る永田台のまちの人」
- 3年生：「未来へつなごうハーモニーレンジャー」  
～知りたい 見たい 伝えたい 永田台の今と昔～
- 4年生：「JUMP! 永田台エコキッズ」  
～ゴミ・水・電気～
- 5年生：「人と自然とつながる永田台」
- 6年生：真っ白ステップ「私たちに今できること」
- 特別支援学級：「生ごみワーストワン脱出大作戦」  
「グリーン・クリーン・アースレンジャー」

## ■これまでの評価のまとめ

教職員・PTAが、これまでの実践で実現した「学校のいいところ」「さらに改善したいところ」を書き出し、まとめたものをサステイナブルマップとしてデザインしている。これは、これまでの評価であり、今後の取り組みを進める上での指針となるものである。学校ESD指標を基にホールスクールアプローチで進めてきたESDチャレンジをデザインマップとして表していく。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

学校全体の試みとしてESDを実践し、授業のみならず、課外活動や学校運営、地域での活動までサステナビリティの波紋（和・輪）が広がっている。どの公立校でも学べるような普遍的な理論に裏打ちされた、持続発展的なストーリー性のある実践が行われるようになった。具体的なプロジェクトによって、様々な課題を抱える学校に対して有益な可能性や示唆を提示することができた。各学年の取り組み一つひとつが、児童の意識の変容に関わっている。

### ■ 課題

子どもたちがいかに自分ごと（我々事・地球事）と捉えて、この取り組みがどのような影響を及ぼすのか課題意識をもたせていきたい。これから示される優先課題において、これまでの実践をもとにして、内包している問題解決の萌芽が花開くよう、リーダー的な役割を果たしていく。

## ▶ Transformation

実践による変化

どの学年でもESDを実践している。その中で、教員は持続可能ということを念頭において年間計画をたてているため、児童にもその意識が芽生えてきている。特に、6年生は委員会活動に熱心で、自分たちが学校を変えたいという意識が高い。また、今取り組んでいることが未来への第一歩になるという思いをもつ児童もいる。

学校名：横浜市立永田台小学校（ながただいしょうがっこう）

校長名：住田 昌治（すみた まさはる）

児童数：498名

住 所：〒233-0075 神奈川県横浜市南区永田みなみ台6-1

電 話：045-714-4277

対象学年：全学年

教科・領域：全教科・領域のみならず、全教育活動及び地域活動

連携校・団体：シンヨンサン小学校（韓国）

気仙沼市立馬籠小学校 気仙沼市立津谷小学校

多摩市立多摩第一小学校



「未来を変える第一歩!」

1年生から6年生へと成長する過程で、教員がESDを意識して児童とかわることによって、児童の中の未来への第一歩!という意識がじんわりと育っていくように思う。

# 自分に自信をもち、地域に誇りをもつ 心豊かな子どもの育成

伝統・地域

【キーワード】

伝統芸能の継承 森と花 体験と体感 読書文化  
協働 自信と誇り



伝統芸能「獅子舞」を主体的に受け継ぎ、新たな学びを通して、自らの生き方や新しい価値に気づく。

学校の森や花栽培をはじめとする自然に親しんだりする活動を通して、環境保全に向けての実践的な態度を育てる。

生きる力の基礎となる心豊かな読書力を育成し、保護者、地域と連携した読書文化をつくる。



## ①地域の伝統芸能「獅子舞」の継承活動の推進

伝統芸能「獅子舞」を平成8年から地域の獅子舞保存会の方から指導を受け、4年生以上が主体となって、笛、太鼓、獅子舞、神楽舞の技を練習し、継承活動に取り組んでいる。その中で約350年前の伝統芸能の意味と継承の大切さに気づき、地域に伝えていく活動を行っている。今年度10月に、新潟文化祭で獅子舞を披露する予定である。

## ②学校の森や花栽培を中核とする自然体験活動の推進

平成17年から生活科や総合的な学習の時間を中心に、国語や理科、道徳などに関連づけながら学校の森「いこいの森」で自然体験活動を始めた。また、わかばスターズ班（全校縦割り班）で、花や野菜の栽培を行っている。「いこいの森」での自然学習や遊び、畑の収穫物の料理や落ち葉や木の実を利用した造形など、体験だけで終わらせずに、書いたり、話し合ったりすることを大切にしている。

## ③保護者・地域と連携した読書文化の創造

教師だけでなく、保護者、地域ボランティア、市立図書館職員、わかばスターズ班などが、様々な



読み聞かせを行っている。また、一人、読書で過ごすことを大切に、「本と対話」のできる子どもが育つように読書活動を推進している。これらの活動を保護者と連携し、「家読」（うちどく）を親子でも実践し、読書文化の創造を目指している。

## ▶ Outcome 成果と課題



伝統芸能や自然体験活動、読書活動において地域の人から学ぶ、先輩から学ぶなどしながら、継続することで自分に自信をもち、自分の考えを表現できるようになっている。

## ▶ Transformation

実践による変化

児童アンケートの結果、「学校や地域がすきである。」98%、保護者アンケートの結果、「学校は地域の特色を生かした取り組みを進めている。」100%、「学校ではエコ活動に進んで取り組んでいる。」98%であった。

学校・保護者・地域のかかわりを大切にしているESDを進めている成果である。地域の人とかかわり、学ぶことを通して「協働」することが充実してきている。

学校名：見附市立新潟小学校（いがたしょうがっこう）  
 校長名：太田 敬祐（おおた けいすけ） 児童数：93名  
 住所：〒954-0006 新潟県見附市新潟町2478番地  
 電話：0258-62-0685 対象学年：全学年  
 教科・領域：特別活動 生活科 総合的な学習の時間 等  
 連携校・団体：[獅子舞活動] 会津若松市立川南小学校  
 柏崎市 綾子舞クラブ  
 [自然体験活動] 伊達市立柱沢小学校  
 伊達市立粟野小学校 伊達市立堰本小学校



子どもたちは、ESDの取り組みを通して、自分一人ではなく、友達・保護者・地域の人と活動することの素晴らしさとともに心強さ、そしてともに「協働」することのパワーの大きさは十分に認識している。この力が一人ひとりの自信と誇りになり、「できる」という気持ちを強くもてるようになってきている。

# ESDの考えを生かした 教育活動・学習活動の推進

持続発展可能のための「知識能力」「批判的思考能力」「実践力」の習得

環境

【キーワード】 自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい中央っ子



子どもたちが「私たちと世界中の人々が生き続けていける未来をどうやってつくっていくのかを、みんなで調べたり、考えたり、意見を出し合ったりしながら行動していける子どもや大人になる」ことをねらいとして、ESD活動を実践している。



## ■ 生活科や総合的な学習の時間の取り組み

四季を通して同じ公園に足を運び、自然と触れ合ったり、農業体験から生き物の命を学習したりする低学年。校区を探検しながら、地域を知る3年生は、パンフレットを作り発信している。4年生になると、地球温暖化に対してエコ活動を取り入れ、5年生になると有機農法で米づくりに取り組み生産者や消費者の両立場から食を考えていく。また、6年生では地域の昔日を調べ地域特有の問題点を探る活動をしている。

## ■ 中央っ子フェスティバル

1年生から6年生まで、取り組んできたことを他の学年の人に見てもらおう活動報告会を行っている。

## ■ ESDの視点に立った学習指導

「持続可能な社会づくり」を捉える要素を明確にし、ESDで重視する力を七つ抽出してESDの視点に立った学習指導に取り組んでいる。





## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

自然の豊かさや生き物の命を大切にしようとする心、自然とのかかわりや人とのつながりを大切にしようとする心が育った。中央っ子フェスティバルでは、豊かな体験を通して感じたことや思ったことを分かりやすく伝えようと、子ども同士が力を合わせたり、交流したりして協同的に学ぶことができた。ESDの視点に立った学習指導では、各学年の発達段階に合わせて具体的にどのような姿を目指すのか教師側がゴールをイメージすることができた。

### ■ 課題

全教職員による共通理解の場の設定や新しく赴任してきた教職員に対する研修体制の構築や学年間のESDの学びのつながりを構築する手段や方法の形成などがある。



## ▶ Transformation

実践による変化

子どもたちが、自分たちの身近な生活の中に、問題点を見だし、自分にできることを考えて、活動していこうとする態度が見られるようになった。

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度を明確にして、授業を行うことで、子どもたちが多面的な見方ができるようになったり、話し合いで建設的に意見を出し合ったりする場面が見られるようになった。

教師がESDを意識することで、教科のねらいの中にどのようなESDの要素が含まれているのか考えながら授業を展開することができるようになった。

学校名：富山市立中央小学校（ちゅうおうしょうがっこう）

校長名：武島 浩（たけしま ひろし）

児童数：395名

住 所：〒930-0052 富山県富山市五番町4番35号

電 話：076-421-6490

対象学年：全学年

教科・領域：全教科・領域

連携校・団体：なし



我が校にとってESDとは、子どもたちが地域・国・世界の課題を自分事として捉え、考えたり、意見を出し合ったりする大人になるための生きる力を育む教育である。

# ESDで学校と地域の協働の絆を創る

赤とんぼの調査を通して

環境

【キーワード】 赤とんぼ 外来植物 研究者との連携 発信 環境教育

## ▶ Goal ねらい



生態学者と共に本格的な赤とんぼの研究を行い、子どもたちの活動に科学的根拠を持たせ、地域に自信を持って発信できるようにする。科学的なものの見方、調査方法、批判的思考、プレゼンテーション能力を育成する。地域の大人へ、様々な方法で地域の魅力と問題点を発信し、協働で地域らしさの保全を図る。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 赤とんぼの移動ルート調査、羽化数調査

研究者や他機関との連携により、身近だが謎の多い赤とんぼの羽化数調査と、マーキングによる移動ルートの調査を実施した。具体的には6月下旬から約1か月間に、水田の一定面積で羽化した赤とんぼ類の羽化殻を回収し、水田1枚当たりの赤とんぼの発生数を推測した。赤とんぼ類中のアキアカネは初夏に水田で羽化し、盛夏には高地で過ごし、秋に平地に降りてくるとされてきた。しかし、平地から高地への移動経路が直接確かめられたことがなかったので、石川県立大学の上田教授にご指導いただき、その調査を行った。

### ■ 外来植物の分布調査と駆除による地域固有植生の再生

植物外来種の研究者から特定外来種の特徴や種類について学び、小学校周辺の外来種の分布調査を実施した。そして、オオキンケイギク、セイタカアワダチソウの駆除作業を行い、地域固有植生の再生を図った。

### ■ 地域へ情報発信

学校内外での発表や各種メディアを通じて、大人に向けて地域の現状や問題点を伝え、今後の暮らし方について批判的に訴えた。



## ▶ Outcome 成果と課題



羽化数調査から、水田が稲作だけの場所ではなく、生物の生息場所でもあるという認識をもてた。農薬や農法により、赤とんぼの生存率が変わることを理解した。赤とんぼ類の成虫3,000個体以上にマーキングを実施し、夏に山頂で再捕獲し、「日本初」の成果が誕生した。

身近な環境にたくさんの外来種が生息しており、それが地域固有の自然に大きな影響を与えることを認識した。今回の活動を通じて、地域から国までの連携を構築できた。

## ▶ Transformation

実践による変化

子どもたちが科学的根拠をもとに、批判的に提言することで、地域の大人が環境を見直し、保全活動を実施し始めた。環境教育学者から日常的に学ぶことで、環境教育が確実に浸透し、子どもが使命感を持ち、自発的に動き、物事を深く考え始めた。教員はプロの研究者との協働により、学びの意欲が高まり、身近な物事を科学的にみたり、大学や行政との連携を深めたりする行動につながっている。

学校名：勝山市立鹿谷小学校（しかたにしょうがっこう）

校長名：吉川 憲男（よしかわ のりお）

児童数：89名

住 所：〒911-0843 福井県勝山市鹿谷町本郷34-1

電 話：0779-89-2539

対象学年：5年生

教科・領域：理科 国語 総合的な学習の時間

連携校・団体：勝山市役所 福井大学教職大学院

石川県立大学 ユネスコスクール（勝山市内9校）

鹿谷公民館 国土交通省 地元企業



我が校にとってESDとは、子どもと教師がともに学び、地域の中で学び続けることを楽しませてくれるもの。学校と地域をつなぎ、未来を創るもの。

# 豊かな関わりの中で 自立した個を育む学校の創造

持続可能な明日をつくる教育課程の実践

総合

【キーワード】

自分事としての学び（探究・主体性） 地域連携  
未来を創る学び（課題解決能力）



教育課程全体にESDの要素を取り入れて、全学年で実践を進める。



## ①教育課程構造図の改訂

オープン・スクールとして伝統的に取り組んできた個別化個性化教育の視点に、「自然との関わり」「社会との関わり」「人との関わり」や「持続可能な未来」といったESDの視点を加えた「持続可能な明日をつくる教育課程構造図」を作成した。

## ②「ESDで育てたい三つの力」の設定

児童に身につけさせたい力を「かかわる力」「問い続ける力」「行動に移す力」の三つにまとめ、学年に応じた目標を設定した。

さらに、四つの研究部会で学習や活動に応じた手だてを検討し、実践中。

## ③年間指導計画の作成

生活科と総合的な学習の時間を一体的な構造のものと捉え、総合学習「生きる」を編成している。そして教科等の学習内容との関連を整理したESDカレンダーを作成している。また、学習内容をESDの視点表で分析し、評価規準「ESDに基づいた学習計画」を作成した。

## ④豊かな体験活動

探究的な学習になるよう、単元構想や体験活動の計画、活動の振り返りと発表を通した学び



合いを大切にしている。ゲストティーチャーによる学習。「町たんけん」で地域との交流。「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」に参加。「おがわっ子フェスティバル」で学習の成果を発表する。

#### ⑤教師の学び合い

ESDの実践を共有し、学び合いを大切にしている。職員室の掲示板を利用し、通信の発行や毎月行う研究部会で情報交換をする。

## ▶ Outcome 成果と課題



ESDで育てたい力をまとめ、学年に応じた目標を設定したことで、学習や活動の具体的な手だてが講じやすくなった。今後、手だての有効性を検証する方法を定め、実践を進める必要がある。



## ▶ Transformation

実践による変化

ESDにより今まで取り組んできた学習を、「自分事としての学び」「未来を創る学び」をキーワードに、探究的な学びになるよう見直してきた。そのことが教師間で共通理解できており、教師の思いや児童の実態に応じた実践が多くなってきた。また、教科の学習や道徳にもESDによる実践が多く見られるようになってきた。

ESDの実践を通して児童が成果を発信する場面では、発表する力が育ってきた。

学校名：東浦町立緒川小学校（おがわしょうがっこう）

校長名：伴 浩人（ばん ひろひと）

児童数：498名

住所：〒470-2102 愛知県知多郡東浦町大字緒川字八幡7番地

電話：0562-83-2034

対象学年：全学年

教科・領域：生活化 総合的な学習の時間

連携校・団体：

・アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト

・金華市賓虹小学（中国浙江省金華市）

・ESDあいち・なごや子ども会議（ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会）



今までの学習や活動を本に例えると、ESDは本棚。ESDの視点を取り入れることで、学習内容を整理整頓することができ、子どもたちにとって学習や活動が探究的な遊びとなった。

# ESDでつながり・のびる、 子どもたち

環境 【キーワード】 つながり いのち 「みとめあい、共に生きる」  
行動する グローバル市民



- ①自尊感情を高め、互いに認め合う仲間づくりを行う。
- ②進んで本で調べ、活発に意見を交流し合う児童を育てる。
- ③地域の人々や自然とのつながりを学び、豊かに感じる児童を育てる。
- ④身の回りにある問題に気づき、持続可能な社会をつくるために解決しようとし、伝え、行動する児童を育てる。



ESDを「運営の計画」の中心に据え、学年ごとにテーマや目指す子ども像を決めて、低学年から高学年につれて「人格の発達」、「身近な自然」、「身の回りの諸問題」に取り組んでいる。また、ゲストティーチャーによる出前授業や多くの国際交流を積極的に行ってきた。

2年生「そだてる・つむぐ・つながる わた」では、本校とインドの綿栽培の村の児童が「わた」を通じて出会い、交流することで自尊感情を高め合うことをめあてに、全35時間の取り組みを行った。頂いた種から綿をつぐむまでを体験。観察記録と収穫した綿から作ったお面や、日本のことを英語で紹介するビデオレターをつくり送った。また、本校児童の保護者等からインドヨガや舞踊を習い、国立民族学博物館からサリーを借りて試着体験し、インド文化に触れた。

3年生では「どんぐりはかせになろう」で、卒業生や環境保全団体の協力を得て、鶴見緑地でフィールドワークを行い、どんぐりと遊び、観察し、調べ、話し合う中で環境問題への気づきも生まれた。自然が大好きになれば自ずと環境問題に関心を持つ子どもが育つという仮説に自信が持てる実践となった。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

ESDの活動の中で考えたことを発信できた。ESDに関わる校内研修会を行い、実践的な指導力を高めることができた。地域や大学、NPOなどと連携して教材開発や活動ができた。

### ■ 課題

「人権・命の教育」の指導内容をさらに工夫する必要がある。ESDと育みたい学力を明確にして取り組む。

## ▶ Transformation

実践による変化

教職員のESDについての理解が深まり、自分の言葉で表現できるようになった。また、TV、新聞等を見て、ESDに関連することから教材化できるようになってきた。

児童は正解のない課題に向かう行動の楽しさや大切さを知った。

ESDの実践を広く地域に公開してきた。そのため、PTAの成人教育講演会で国際看護師を講師に招くなど、地域や保護者の間でも、持続可能な社会に対する意識が高まってきた。

学校名：大阪市立関目東小学校  
(せきめひがししょうがっこう)

校長名：筒井 博美 (つつい ひろみ)

児童数：486名

住所：〒536-0008 大阪府大阪市関目4-12-15

電話：06-6934-4499

対象学年：全学年

教科・領域：全教育活動

連携校・団体：奈良県立法隆寺国際高等学校

ASPnet 加盟を認定された大阪市内の  
公立小中学校5校と申請準備中の1校の計6校  
ASPnet 大阪



我が校にとってESDとは、国や人種・民族を超えた、世界のどこでも通用する価値観を持つグローバル市民を育てること。そして、身の回りの問題を解決する行動力を育むこと。小学校段階では自然や人とのつながりをたくさんの体験を通して持つことが大切。違いのある人とも、共に生きることが当たり前の児童を育てることも大切にしている。

# 国際教育を基盤にした教育活動の充実

ESDカリキュラムの作成と実践を通して

国際

【キーワード】 広い視野 主体性 多様性 地域・保護者との連携



持続可能な社会の担い手を育成するという目標に向けて、全学校教育活動を通して国際教育を推進する。

- ①全学年の教育課程の中に教科横断的、総合的にESDの視点を組み入れることにより、児童に多面的なものの見方・考え方を身につけさせるとともに、主体的に実践する力や行動力を養う。
- ②帰国児童が自らの異文化体験を生かし、地球的視野に立って様々な物事や事象を見つめ、考えることができるようにするとともに日本語の定着と自国文化の定着を支援する。
- ③国際交流を通して多様な文化的背景をもつ人びとと主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。



国際教育を推進することと、帰国児童の実態を把握、分析し、円滑に日本の学校教育に適應することができるように指導・支援を行う。また国際・国内の交流を以下の通り積極的に図った。

- ①フレンドシップ提携にはアメリカと韓国の小学校の2校と結んでいる。(次頁、学校資料参照)特に韓国とは教職員の合同研修、相互訪問、交流授業を行った。
- ②訪問団受入れ交流では、ACCUによる韓国教職員招へいプログラム(2010)、日米教育委員会によるESD日米教員交流プログラム(2011)、タイ王国訪日視察団(2011)、ニュージーランド大学生教育実習(2012・2013)などを実施した。
- ③国内児童間交流として沖縄市立比屋根小学校(豊中市と沖縄市は兄弟都市)とWebを活用した平和学習交流の取り組み(交流学習)を行った。
- ④帰国保護者会と連携し、ワールドミュージアムを実施している。

(次頁写真参照)





## ▶ Outcome 成果と課題



広い視野と主体的な行動力を育成するために、日本および世界の子ども達と交流し、その国や地域の文化を知るとともに日本文化を発信したり、ESDの学習課題を学年ごとに実践するなど、積極的な取り組みを進めており、少しずつではあるが定着してきている。

今後は、さらにESDの視点を児童の教育課程に体系的・系統的に位置づけ、毎年の実践をおして整理・充実を図っていく必要がある。

教職員のESDについての理解がまだ浅いため、実践するだけに終わっている面がある。今後ESDについての研修をさらに進めていく必要がある。



Webを活用した交流学習

## ▶ Transformation

実践による変化

様々な国の人たちや世界中から帰国してきた児童とのかかわりにおいて、その多様性を受容し、理解し、共に生活することが自然な形で児童に身につけてきていると考えている。

教員が今まで実践してきた環境・福祉・平和・人権・国際理解・食育などの実践をESDの視点で見つめ直すことによって、より広い視野で総合的に考えるようになってきている。教員が指導計画を立てる上で、実際に社会に対して児童が主体的に働きかけたり、活動したりすることを学習計画に組み入れることの大切さに気づくことができた。

学校名：豊中市立上野小学校（うへのしょうがっこう）

校長名：奥井 泰伸（おくい やすのぶ）

児童数：1,092名

住 所：〒560-0013 大阪府豊中市上野東2-8-8

電 話：06-6848-4021

対象学年：全学年

教科・領域：全教科・領域

連携校・団体：

<フレンドシップ提携校> Parkside Elementary School (米国)  
菊山初等学校 (韓国)

<連携校> ビートゥヌー小学校 (カンボジア)

<国内交流校> 沖縄市立比屋根小学校



我が校にとってESDとは、広い視野と主体的な行動力を育成するために必要不可欠な学習。

# 未来に残したい「美しい奈良」の風景

総合

【キーワード】 南都八景 世界遺産学習 ICT(iPad)  
当事者意識の育成 地域に誇りと愛着を



新たな奈良の魅力に気付き、地域に誇りと愛着をもち、積極的に地域と関わりながらよりよく生きようとする児童の意欲と態度を育むため、『未来に残したい「美しい奈良」の風景』の学習を行った。ねらいは以下の通りである。

- 南都八景を調べることを契機として、奈良の様々なことを調べたり、未来に残したい「美しい奈良」の風景についてアンケート調査をしたり考えたりする活動を通して、新たな奈良の財産に気付く。
- 調べたことを効果的な方法でまとめたり、友だちと意見を交流したりすることを通して、地域に対する自分の考えを練り上げ、それらを分かりやすく伝えることができる。
- 身近な地域に誇りをもち、今後自分が積極的に地域と関わりながらよりよく生きようとする意欲と態度をもつ。
- ICTを活用し、工夫して情報を収集したり編集したりし、自分の考えを発信することができる。



江戸時代中期、東大寺大仏殿が復元され、奈良は一大観光地となっていく。その中でガイドブック的な役割を果たしたのが「南都八景」である。その八景とは、春日野の鹿・猿沢池の月・佐保川の蛍・南円堂の藤・東大寺の鐘・三笠山の雪・雲井坂の雨・轟橋の旅人である。この中には、現在においても当時のままで見られるものもあるが、様々な要因で見られなくなっているものもある。

そこで、まず「南都八景」への関心を高めるために現地へ行った。現地見学後、身近な地域にうもれている「地域のたからもの」を再発見することを、夏休みの自由研究として取り組んだ。2学期、自由研究の発表会を開き、済美のまち・奈良のまちについて考えたことなどを伝え合った。

次に、未来に残したい「美しい奈良」の風景を家族や親戚の人などへのアンケート調査から明らかにし、現代の「新南都八景」を選定する活動を行った。さらにアンケート上位の風景を一人一つ選び、それを残していきたいと考える理由を様々なメディアを活用し、プレゼンテーションをした。

そして、地域の方や保護者の方にも投票していただき、「新南都八景」を選定した。最後に、「新南都八景」を様々な方がたへ発信した。



## ▶ Outcome 成果と課題



この学習活動を通して、多くの児童が済美や奈良のことを大好きになり、地域に誇りと愛着をもつことができたと考える。自分たちがこの地域の中でどのようにして奈良と関わっていくのか、いかに町を発展させ、今後、自分もよりよく生きていこうとするのかを考えることができた。

今後は、世界遺産学習を積み重ねてきた過程をふり振り返り、奈良を深く見つめるとともに未来の奈良をつくっていかうという意識の向上を促したい。



## ▶ Transformation

実践による変化

自分たちの世代で今の美しい風景を終わりにしてはいけないという気持ちが芽生え、積極的に地域と関わりながらよりよく生きようとする意欲を高めることができた。地域の方がたや保護者の方がたに、アンケート調査や投票作業に協力していただいたことで、一緒に「奈良の美しい風景」について見つめなおすことができた。様々な方がたと共に関わりながら学習を展開したことで、自分たちの地域に誇りと愛着をもつことができた。

学校名：奈良市立済美小学校（せいびしょうがっこう）

校長名：粕谷 正文（かすたに まさふみ）

児童数：486名

住 所：〒630-8325 奈良県奈良市西木辻町5-2

電 話：0742-26-0312

対象学年：6年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：「第4回世界遺産学習全国サミット in なら」

「ESD日米教員交流プログラム」

奈良教育大学



我が校にとってESDとは、児童一人ひとりが地域社会とかかわりながら、「生きる力」を育むことができるツールである。さらに、未来社会の担い手であるという意識を育て、次世代に受け継いでいこうとする態度を育てるために、なくてはならない学習活動である。

# レッツゴー！まちたんけん

となりの済南国宝さん

伝統・地域

【キーワード】 食文化の変容 多様性の劣化 少子化

## ▶ Goal ねらい



地域の人びとやさまざまな場所に親しみや愛着をもってかかわり、自分たちの生活にかかわりがあることに気づく。また、地域を知り地域への親しみをもって、地域づくりの当事者意識を高める。



## ▶ Activity 実践内容



自校の地域の良さは「人」と考え、児童と人がふれあう場面を重要視した。大まかな流れは、以下の通りである。

- ・町探検① 地図を見て済南を歩こう
- ・町探検② 済南国宝さんに出会おう  
(地域の方々を以下、済南国宝さんと呼称)
- ・済南国宝さんを紹介し合おう
- ・お礼のお手紙を書こう

導入では、某テレビ番組の内容を取り入れ、地図を見ながら探検計画を立てた。町探検①では場所(公民館、公園、有名な墨工場)、町探検②では済南国宝さん(50年以上前から続いているお弁当屋さんと駄菓子屋さん、公民館でバードウォッチングについてのお話)に出会った。お弁当さんは昔と今とではメニューが違うお話を。駄菓子屋さんには子どもが減っているお話を。公民館では鳥の数が減って、ある種の鳥が多くなったお話をしていただいた。



## ▶ Outcome 成果と課題



成果は、済南国宝さんとのかわりを通して、持続可能性に関する課題をもつことができたことである。お弁当屋さんでは「魚が中心であったが、今は揚げ物が多くなった（食文化の変化）」という話、駄菓子屋さんでは「昔は一学年3クラスだったが、今の2年生は1クラス（少子化）」という話を聞いた。また、公民館では「雀やヒヨドリが減りカラスが多くなった（多様性の劣化）」を聞き、まとめて紹介し合うことができた。児童の感想では「3クラスあったなんてびっくりした。どうして1クラスに」と次の疑問を考えるものもあった。済美南小学校ができたときと今では生活が大きく変わっていることを実感することができた。

## ▶ Transformation

実践による変化

ESD実践による変化として特に実感したことは、地域の方がたの教育活動への参加である。地域は済南ボランティアを組織するなど、元々教育活動への興味・関心は高い。一方で、具体的に教育活動の参加の仕方が分からない方や今のままでいいのかなと思っている方も少なくなかった。今回では、発表のための文房具を寄付していただいたり、ゲストティーチャーとしてお話していただいたりした。

教員の変化としては、教育活動の広がりである。この取り組みでできたつながりが、今後の教育活動をしやすくする実感を得た。例えば、地域の方がたから「校外学習があれば引率するよ」という声をいただいたことなどである。

学校名：奈良市立済美南小学校  
(せいびみなみしょうがっこう)

校長名：福田 芳高 (ふくだ よしたか)

児童数：219名

住 所：〒630-8141 奈良県奈良市南京終町676

電 話：0742-62-7872

対象学年：2年生 教科・領域：生活科

連携校・団体：数校のユネスコスクール

韓国慶州市金丈小学校



持続可能な社会に関する児童の生活や考え方は、ひとつの授業や単元だけではなかなか変革しないように思う。日々の授業や学校生活の中でその素地を育む必要がある。児童の生活と持続可能な社会に関する授業を結びつける活動を教師が意識し、日々の生活の中で問いかけ続けることが大切。

# 子どもとともに親も教員も地域も 育ちあう「動く」学校

環境 【キーワード】 次世代を担う 社会に貢献する実践 学びあい支えあい



変化の激しいこれからの社会を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の知・徳・体のバランスがとれた児童を育てる。

児童が、国際的な視野に立ち、地球規模で環境や福祉について考え、社会に貢献する。自校の取り組みを発信し、他の地域の人々と交流する中で、相互の理解を深めながら繋がりを強め視野を広げていく。



全学年にわたり環境、福祉、防災の分野で各プログラムを実行している。環境では、公園遊びから始まりEM団子\*作りに挑戦する1年生から3年までは、徐々にビオトープの世界を認識していく。高学年からは、ゴミ、下水、住まい、電気など身近な環境から地球規模の問題まで取り組んでいく。一方、EMの世界に注目し、その神秘性、利用の可能性、生命の重要性を学んでいく。

福祉では、園児、老人、障害者など世代の違った弱者とどう向き合い付き合っていくかを考え、助け合う心を命の大切さと共に育てていく学習を行った。

防災では、災害から自らを守る方法を具体的に考え行動していくプログラムを実行していった。高学年は特に、災害の歴史、それを先祖がどのように克服してきたか、また地震のメカニズムを科学的に学んだ。

この3分野のこれらを、PTAや地域の人びととともに推進してきたことが、今後、大きな成果となると期待している。

\*…EM菌 (Effective Microorganisms) と呼ばれる土壌改良を目的に開発された有用微生物群の技術を応用したもので、その微生物群を米のとぎ汁や糖蜜に混ぜて発酵させたEM活性液などを泥に練り込んで団子にし、乾燥・発酵させたもの。



## ▶ Outcome 成果と課題



環境・福祉・防災を柱に進めている学校の活動にPTA・地域が結びつき、コミュニティとしての活発な動きにつながってきている。

体験的な学習を地域人材が支える場が多くなり、児童の学びに深まりや広がりが見られ、道徳性(市民性)の向上や態度教育にもつながっている。

他地域との交流(国内・国外)が徐々に始まるが、児童の伝え合う能力の向上が追いついていない状況である。活動を通して、徐々に表現力・コミュニケーション能力を充実させる必要がある。

## ▶ Transformation

実践による変化

ESDを意識しながら実践し、テーマを共有してきたため、個々の教員が各々で求めていた児童の学びに、系統的な展開ができつつある。6年間で児童を育てていく枠組みができてきている。

授業や活動の中で、学び合う場面を取り入れ、児童相互に影響し合いながら高まっていくように学習活動を意識している。

学校発信による環境・福祉・防災にかかわる社会に貢献する活動により、地域社会が学校を理解し、協力的な姿勢が多く見られるようになってきている。

学校評価等で、学校の基本方針に対する支持が高まり、ユネスコスクールに加盟したことで期待値も高くなってきていると考えている。

学校名：橋本市立紀見小学校(きみしょうがっこう)  
校長名：森本 敏夫(もりもと としお)  
児童数：383名  
住所：〒648-0097 和歌山県橋本市柿の木坂25-1  
電話：0736-32-1522  
対象学年：全学年  
教科・領域：特別活動 総合的な学習の時間  
連携校・団体：熊野町立熊野東中学校 金沢市立泉中学校  
ウエストウッドハイスクール  
アスペンハイスクール(以上米国)



人は支えあって地域社会を作り出している。子どもと大人が、現在をより良く生き、地域コミュニティに生きる存在として、支え合い助け合うことで、生きがいを見つけていくことができる。このことが、未来社会を創造していくために必要な人間力形成の大きな部分であり、皆が育つ中で持続可能な社会が育まれる。

# いしま あったかハートプロジェクト

国際

【キーワード】 地域とのつながり 共生社会 生活と環境とのつながり  
人としての生き方

## ▶ Goal ねらい



「いしま あったかハートプロジェクト」は、ふるさと伊島を見つめ、考え、行動することで、ふるさとを誇りに思い、地域に根をはり未来を切り開くたくましい児童を育成する取組である。本校の教育目標「未来を拓く心豊かな子どもを育成する」と合わせ、「地域とのつながり」「共生社会」「生活と環境とのつながり」「人としての生き方」をテーマに、地域の課題を自らの課題として調べ、まとめる活動を行う。自分にできる実践活動へ発展させ社会に参画することで、持続可能な社会の担い手となる人材育成をめざすものである。

## ▶ Activity 実践内容



生活科や総合的な学習の時間では、各学年が本校のESDグランドデザインに沿って実践している。本校のESDには、自己をふりかえり、よりよい生き方を追求する「夢」プロジェクトと、地域の人々や取り巻く環境に関わり、今後の社会の在り方を考える「絆」プロジェクトの二つがある。3年生の地域学習、4年生の福祉学習、5年生の環境学習、6年生の国際理解学習と自分の生き方を考える学習では、ふるさとを学習の舞台とする。そこで自ら取り組んだ学習の成果が、小学校卒業後もどこかで生かされ、ふるさとをよりよく変化させていく原動力となると考えている。





## ▶ Outcome 成果と課題



生活科や総合的な学習の時間で、育ててほしい資質や能力を明確にしてきたことで、児童が地域の自然や人々とのつながりを大切にする場面が多くなっている。また指導者はESDグランドデザインの実践による小学校の6か年を見通した年間の指導計画を精査し、伊島の子どもたちに適した学習内容を構築してきている。本校の課題は、児童が学習の成果を地域や社会にいかにも還元していくのかにある。学んだことを行動に移し、社会に参加する学習活動が求められるところである。

また、ユネスコスクールのネットワークを生かした他地域との連携や、地域の保幼小中とのなめらかな連携を取り入れ、夢プロジェクトと絆プロジェクトの二つの軸の往還が活性化するような教育活動を進めることも望まれる。

## ▶ Transformation

実践による変化

平成25年度の学校評価中に「生活科、総合的な学習の時間が好き」という児童の意見が多くあった。校外の人材を活用し、楽しく学べる体験型の授業づくりに努めた成果と考えられる。外部講師による具体的で専門的な指導は、学習への関心や意欲を高める。また、社会の人々のはたらきや生き方に触れ、自分の将来に目を向けることにもつながっている。前述の学校評価で、保護者や地域の人々が本校のESDの実践を肯定的に捉えていることも明らかになった。協力いただいた校外の個人や企業の方も、本校との連携を好意的に受け止めており、今後の授業にも協力しようと考えている。

学校名：岡山市立伊島小学校（いしましょうがっこう）

校長名：青山 順子（あおやま じゅんこ）

児童数：780名

住 所：〒700-0016 岡山県岡山市北区伊島町一丁目6番6号

電 話：086-252-2251

対象学年：全学年

教科・領域：生活科 総合的な学習の時間

連携校・団体：岡山市立京山中学校区の小学校2校、中学校1校（ユネスコスクール）

岡山県立岡山工業高等学校 岡山大学農学部

環太平洋大学 岡山県生涯学習センター（サイビア）

岡山市立京山公民館 その他地元企業・NPO など



「よりよい社会、よりよいふるさと、よりよい自分」をめざす姿勢を育むことに尽きる。本校のESDグランドデザインがめざす児童が、現代の困難な課題を解決していく原動力になることを期待する。

# 見つめ直そう私たちの小串

環境 【キーワード】 環境 地域 実践 誇り

## ▶ Goal ねらい



つぼ網体験（伝統的な定置網漁）を通して小串の海の豊かさを再認識するとともに、持続していくために自分たちでできることは何かを見つける。

また、地域の人とともに活動したり、地域の恵みを味わったりすることを通して、地域の人とのつながり、環境の豊かさを知り、環境を守る活動を実践していく。

さらに、実践した成果をまとめ、学校に残したり後輩に伝えたりする。

## ▶ Activity 実践内容



小串のよさを出し合いながら、1年間の方向性を話し合い、つぼ網漁の体験学習が決まった。漁協が用意した小型漁船に乗り、漁から戻ると、事前学習した体験を生かし自分たちで魚をさばいた。その体験を作文に書き全体で振り返り、環境を守る活動への取り組みにつなげた。

海のクリーンアップでは、小型船で近海の湾に浮遊しているごみを拾ったり、地域の人々の参加を呼びかけるポスターを掲示し、中学生と合同で3か所の海岸の清掃活動を行ったりした。

さらに、アマモを育て海へ戻す「海のゆりかご」学習を行った。陸に上がったアマモから種が付いているものを注意深く選別し、砂と海水を入れたビン内にアマモの種をまいた。作文に書き全体で体験を振り返り、アマモを育て観察する活動につなげた。育てたアマモは、ダイバーに託し、海に植え付けてもらうのを見学し、1年間の振り返りを行った。最後に、成果をまとめて発信し、ふるさとのよさを再確認した。



## ▶ Outcome 成果と課題



目的意識をもって主体的に取り組む力や、振り返りを大切にするにより、自分で考えて次の活動や学習につなげる力がついてきた。さらに、1年間の成果をまとめ3・4年生へ発信し、達成感を味わい自信をつけた。今後、地域への効果的な発信の仕方を考えていきたい。



## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 子どもたちのふるさと意識の向上

実践をつなげ積み重ねることを通して、「自分たちの力でふるさと小串を大切にしていこう」という意識が確実に向上した。

### ■ 教員のESD理解の深化

校内での実践を積み重ねると同時に、ESDの先進校の授業を参観したり、ユネスコスクール全国大会に参加したりし、それを校内研修の場で伝え、ESDに関する理解を深めることができた。また、まとめ発信する3学期の授業にも重きを置き、次の学年へつなげるようにした。

### ■ 地域の協力が積極的に

地域のニーズともかみ合って、地域全体の支援を受けながら活動が実施できている。学校のニーズに応じて、地域の人が授業などでも積極的に協力するようになっている。

学校名：岡山市立小串小学校（こくししょうがっこう）  
 校長名：難波 祝子（なんば のりこ）  
 児童数：38名  
 住 所：〒702-8016 岡山県岡山市南区小串3379  
 電 話：086-269-2014  
 対象学年：5～6年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：西粟倉村立西粟倉小学校



我が校にとってESDとは、子どもも、教師も夢をもって楽しんで実践する学習。ふるさと小串で地域の人に見守られながら暮らす自分の生き方とも照らし合わせ、広い視点で考える学習。

# 人・社会・自然など自分とのつながりに関心を持ち、主体的に関わろうとする子どもの育成

農業・食育

【キーワード】 社会や自然などとのつながり 単元構想でのつながり  
人とのつながり 学年のつながり 各教科とのつながり



様々なつながりの中から自分を見つめ直し、自分の生き方を考えていくことができる子どもを育成する。



各学年の生活科・総合的な学習の時間の単元を、「宝物プロジェクト」と「幸せプロジェクト」の二つと捉え、それを通して様々なつながりの中から自分を見つめ直し、自分の生き方を考えていく「いのちの学習」を構築する。  
(※プロジェクトの実践例は下段に掲載)

## ※「宝物プロジェクト」(5年生)の実践例

『プロジェクト八十八～藤田に農業は必要か?～』

- ① 藤田に農業は必要か話し合う。
- ② 農家の話を聞き、農業のよい点や問題点から課題をもつ。
- ③ 20年後の藤田の米作りについて考え、持続・発展するための提案書を書く。
- ④ 農業後継者と安心・安全な米作りなどについて意見交換をする。
- ⑤ 自分たちにできることを考えて実践する。「農家の人、ありがとう!」

## 「幸せプロジェクト」(6年生)の実践例

『幸せって何?』

- ① 「幸せ」について話し合う。私たちの幸せは他国の人も同じかな?
- ② 世界の諸問題について調べる。
- ③ NPO法人ハート・オブ・ゴールドの方にカンボジアの現状について聞く。
- ④ ニューチャイルドケアセンター(ハート・オブ・ゴールドがカンボジアで運営)の子どもたちとスカイプで交流する。
- ⑤ 1回目の物資支援活動をする。
- ⑥ カンボジア教育省の先生と相談し、2回目の物資支援活動をする。
- ⑦ ハート・オブ・ゴールドの方から報告を聞く。
- ⑧ 「幸せ」について考える。
- ⑨ 自分の生活を振り返る。



## ▶ Outcome 成果と課題



本テーマでの研究は4年目になり、系統立てて行ってきた指導が、子どもたちに根付いてきている。引き続き縦の系統を意識し進めたい。

中学校区で共通の児童像を設定し、理解しながら研究を進めているので、同じ視点で授業を参観したり、単元の進め方の話し合いができ、互いに刺激し合って研究を進められた。

ESDカレンダーを作成し、他教科との関連を意識して進めているが、各教科で培うべき力が十分についていないため、活用するまでには至っていない。各教科指導についても研究をしていく必要がある。

## ▶ Transformation

実践による変化

中学校区でESDに取り組み、小学校では各学年共通のテーマを決め、めざす子どもを育てている。教員が同じ方向を向いて研究を進めているため、縦の系統を意識した学習ができています。

どの学校も地域に学び、その成果を年度末に実践発表会で地域の方に発表している。そのため地域が学校の取り組みを理解し協力してくださり、共に子どもを育てる気持ちが高まりつつある。また、このような子どもを育てたいという地域の思いも聞かれるようになった。

本校ではESDに取り組み始めて4年目になるので、系統立てて行ってきた指導が根付いてきている。これまで身近でありながら、興味が少なかった地域を見直したり、遠い存在だった外国を身近に感じたりする中で、自分の生活を振り返り、自分にできることを考えられるようになってきた。

学校名：岡山市立第三藤田小学校（だいさんふじたしょうがっこう）  
 校長名：矢吹 憲策（やぶき けんさく）  
 児童数：135名  
 住 所：〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田1757  
 電 話：086-296-2479  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：生活科 総合的な学習の時間  
 連携校・団体：中学校区の小・中学校（ユネスコスクール）  
 岡山県立興陽高等学校 岡山大学  
 NPO法人ハート・オブ・ゴールド 藤田地区農業後継者クラブ



我が校にとってESDとは、世の中のすべてのことは、今の自分とつながっていることに気づき、今の自分にできることを考え実践していく中で、自分の生き方について考えることのできる子どもを育てること。

# 豊かな自然と愛あふれる人のまち 津島未来計画

地球的視野 地域連携 思いやりの心 問題解決能力

総合

【キーワード】地球温暖化防止 伝統文化 異文化理解  
共生 地産地消 障がい者理解 高齢者

## ▶ Goal ねらい



環境・国際理解・食・人権・まちづくりという現実社会のリアルな課題を地球的視野で考え身近なところから行動を起こすことで、思いやりの心・課題解決能力を伸ばし、社会の変化にシなやかに対応できるたくましい子どもを育てる。



## ▶ Activity 実践内容



1年生から5年生まで積み上げてきた五つの領域の学びから、6年生は各自がテーマを選び探究し、未来の津島のために、活動を広め地域に発信した。

### 「環境教育」5・6年生

### 「国際理解教育」1・4・6年生

1年生は、地域の高齢者と日本の昔遊び体験をした。4年生は外国との直接交流により、共生の気持ちをもった。そして、タイに向け、できることの活動を展開した。6年生は地域に住む外国の人を調査し、企業や行政・市長・地域の方々に働きかけ、外国の人が過ごしやすいまちにしようと活動した。

### 「まちづくり」2・6年生

### 「食育」3・6年生

3年生は大豆食品について調べ、自らの食生活を改善した。6年生は地域の方がたから伝統料理を教わり、各家庭でも地産地消を実践した。

### 「人権学習」4・6年生

地域の老人会と毎月交流し、世代を越えた人の繋がりを深めた。



## ▶ Outcome 成果と課題



公共交通機関に英語表示をつけることを市長に訴え実現の見通しを得たりしたことにより、児童は社会を変える自信をもった。

様々な団体や地域との連携により、課題解決方法を考え実践する力が育った。今後は、適切な地域人材の確保を継続していくことが課題である。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 児童の変化

身近な生活を変えて地球環境を守ろうとする使命感や、高齢者・障がいのある人・幼児を大切に思う心や、外国の人と共存しようという意識が育ってきた。また、地域の方々への感謝や地域の一員としての自覚が育ってきた。

### ■ 教員の変化

地域の歴史を教員が地域の方から学ぶことで、学習を構築していこうという機運が生まれた。

地域からは手厚い支援を受けることができたようになった。

学校名：岡山市立津島小学校（つしましょうがっこう）  
 校長名：菅野 和良（すがの かずよし） 児童数：811名  
 住 所：〒700-0089 岡山県岡山市北区津島本町19-1  
 電 話：086-253-3250 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：日本醤油協会 津島生活学校 岡山県立岡山盲学校  
 UDほっとステーションおかやま 社会福祉法人淳風福祉会淳風  
 ライフケアポート 国立吉備青少年自然の家 岡山県環境保全  
 事業団アスエコ 岡山市京山地区ESD推進協議会 岡山大学  
 津島市場町内会いきいきひばりサロン 社会福祉法人報恩積善  
 会 NPO法人虹の郷 妙善寺 天津神社 つしま幼稚園 岡山  
 市立京山公民館 岡山県社会福祉協議会 バンコク日本人学校



将来、児童の生きる社会には、現在は存在しない課題があると考え。その時に、役立つものは、思いやりの心を基本においた、未知なる技術を開発しようとする関心や意欲であり、新しく出会うであろう課題を解決していく能力である。

# 未来につなぐESDの授業

総合

【キーワード】 自分と学びとのつながり 内容のつながり  
自分と他者のつながり

## ▶ Goal ねらい



ESDの視点を入れたカリキュラムの工夫や授業づくりを通して、「自立と共生をめざし豊かな感性を身に付ける子どもの育成」をめざす。



## ▶ Activity 実践内容



### ① ESD関連カレンダーを生かしたカリキュラムの工夫

ESDの授業を進めるにあたって、教科・領域を関連付け、多面的・総合的に学習を展開することが効果的である。

### ② つけたい力の明確化と評価規準の作成、見取り表を活用した評価

未来の社会を担うために必要な力を「自律心」「責任意識」「思考力・判断力・表現力」の三つに整理し、「環境」「多文化・国際理解」「人権・平和」の3領域での評価規準表や各学年の中心テーマや単元でつけたい力の一覧表を作成している。

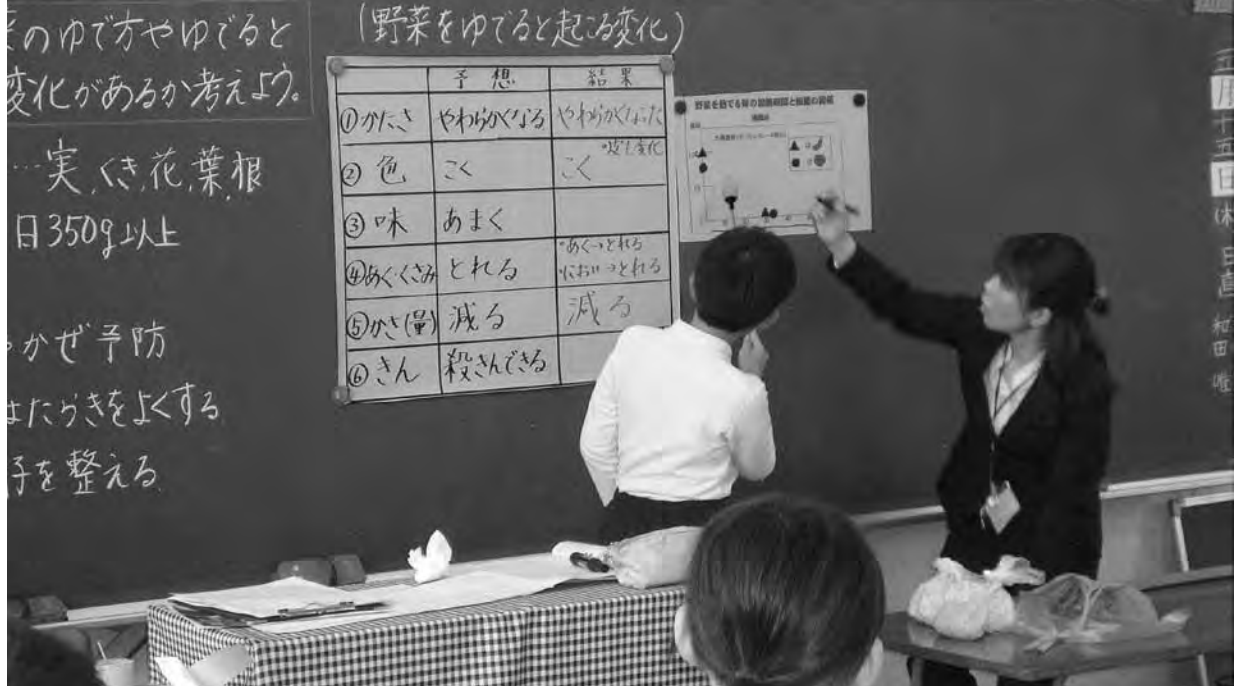
### ③ ESDの視点を入れた学習指導案の改善

「関連する持続可能な社会づくりの構成概念」「重視する能力・態度」「自分と学びとのつながり」「自分と他者とのつながり」「内容のつながり」を明記している。

### ④ 全職員で取り組むESDの授業研究

事後の協議会では、ワークショップ型で全員参加の研修を行っている。授業後は、各自必ず実践記録を残し年度末には冊子にしている。





## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

学校体制として全員でESDに取り組むことが共通理解できている。

授業実践を中心とした取り組みの積み上げが形としてできている。次年度にもつながっている。

総合的な学習の時間や生活科、算数科から家庭科へとESDの視点での研究教科が広がっている。

### ■ 課題

ユネスコスクール間の連携が弱い。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 実践的態度の高まり

「節電・節水・ゴミの分別など地球にやさしいことをしています」H25年：88.7%

トレイや牛乳パックの回収、古着の回収や再利用等、児童自らが呼びかけ意欲的に取り組んできている。

### ■ 問題解決的な学習に対する意欲の高まり

「総合的な学習で問題解決する学習は好きです」H25年7月：78.8% ⇒ H26年2月：85.3%

児童から出た問題意識を調べたり話し合ったりしながら解決していく過程を大事にしてきたことや実際に行動化することで成果が表れる喜びを味わえたことが意欲の高まりの要因と考える。

### ■ 自己肯定感の高まり

「自分には良いところがあると思う」

H24年：65.3% ⇒ H25年：85.3%

「自分のよさは周りの人から認められている」

H24年：64.1% ⇒ H25年：76.6%

自己肯定感や自己有用感が高まったと考える。

学校名：福山市立駅家西小学校（えきやにししょうがっこう）  
 校長名：松岡 誠治（まつおか せいじ）  
 児童数：339名  
 住 所：〒720-1133 広島県福山市駅家町大字近田205番地1  
 電 話：084-976-2778  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：全教科  
 連携校・団体：なし



ESDとは、私たち職員にとっては、「教育研究の柱」となっている。

昨年度開校30周年のテーマとしたのが「つなげ未来へ」であり、合言葉になっている。学習したことや起こした行動が正に未来につながる一歩になるはずである。

# 実践型防災学習プログラム

避難所生活体験シミュレーション訓練・実践的合合同総合防災訓練・児童引き渡し訓練

ボランティア

【キーワード】

かけがえのない命を守る 助け合い セルフ・リーダーシップ  
絆を深める 地域防災力・学校防災力の向上

## ▶ Goal ねらい



大規模な地震等の災害が発生したと想定し、安全な避難経路を実際に家族で確認しながら学校に避難し、避難所生活体験シミュレーション訓練を行う。ライフラインがストップした中での体育館での避難所生活シミュレーションにおいて、人と人との結びつきや思いやり、助け合いなどの心の豊かさを学ぶ。また、地域住民、関係機関と一緒に、迅速かつ機動的な初期の避難所設営のあり方を学びながら、自分にもできる主体的な行動、ボランティア活動、防災スキルを学ぶ。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 避難所生活体験シミュレーション訓練

夜間避難訓練、避難所設営班編成、避難所設営活動（非常用電源及び照明設備班、飲料水確保班、公民館トイレ・台所応急井戸水使用設置班、寝所設営班、サバイバル防災グッズ作成班、けが人応急処置班）、避難所見回り（安全確認・疾病者確認）、避難所撤去、炊き出しを実施する。

### ■ 実践的合合同総合防災訓練・引き渡し訓練

安否確認、避難、消防分団放水訓練、粉末消火器・水消火器訓練、起震車体験、煙体験、簡易担架作成訓練、土嚢作成訓練、簡易トイレ組立訓練（通常型・マンホール型）、心肺蘇生・AED使用訓練、三角巾応急処置訓練、非常食試食体験、児童引き渡し訓練を実施する。

### ■ 助け合い

子どもも大人もボランティアな姿勢で共に助け合い活動する中で、実践的防災スキルを身に付け、人と人とのふれ合い、心の絆を深めていく。



## ▶ Outcome 成果と課題



家庭・地域・関係機関との連携を図った合同総合防災訓練を実施したことにより、「人の命を救えるなら、たとえどんなことがあっても、あきらめずに頑張りたい」「自分も何かの役に立つことができるんだという思いを強くした」「近所や地域の人たちと協力し合えるよう日頃からの交流、声かけ、連携が大切だと感じた」など、一人ひとりが自ら主体的に意思決定・行動し、つながり合い、絆を深め、学校防災力、地域防災力の向上につながった。

## ▶ Transformation

実践による変化

将来、子どもたちが大人になった時に笑顔で夢を語れるような社会、明るい幸せな未来であってほしいと「地域総ぐるみで、子どもたちを育てよう」という地域住民の方がたの温かい思いや願い、声が、いろいろな行事の度に、聞くことができるようになった。防災訓練においても、まず、子どもたちがしっかり防災について体験し、学習できるようにと、公民館・消防団・婦人会・連合自治会・自主防災組織・消防署など、様々な立場の人たちが連携して、進んでサポートして下さった。子どもを中心に保護者を巻き込んでいくことで、地域全体も活性化していったと考えられる。

学校名：新居浜市立垣生小学校（はぶしょうがっこう）  
 校長名：日野 優子（ひの ゆうこ） 児童数：283名  
 住所：〒792-0872 愛媛県新居浜市垣生1丁目5番38号  
 電話：0897-45-0186 対象学年：全学年  
 教科・領域：特別活動 総合的な学習の時間

連携校・団体：新居浜市立垣生公民館 垣生連合自治会  
 新居浜市消防団垣生分団 愛媛県新居浜市垣生じょうさ節保存会  
 垣生山よもだ会（垣生山を守る会） 垣生校区婦人会  
 新居浜市社会福祉協議会垣生支部  
 は〜ぶんこ（垣生校区読み聞かせボランティア）  
 垣生校区社会体育振興会 垣生連合老人会



我が校にとってESDとは、公正で豊かな未来を創造していくための教育の基盤・土壌である。

# NPOと協働で創る国際理解・平和・環境学習

モザンビーク共和国との交流を核にして

国際

【キーワード】 モザンビーク共和国 交流支援 NPO



モザンビークへの交流や支援を行うことを通して、平和を築くためのこれからの行動や生き方を考えさせ、平和の担い手としての力、未来をつくる力を育てる。



6年生は、モザンビークと交流活動を行っている。NPO法人えひめグローバルネットワーク（以下 EGN）の協力で、放置自転車をモザンビークに送った。絵や本校の紹介ビデオを現地の小学校にも送り、現地からの反応も知ることができた。さらにモザンビーク大使であるマラテ大使や「銃から鋤（くわ）へ」平和構築プロジェクトの創始者であるディニス・セングラーネ司教、武器アートアーティスト等、様々な方がたと出会い、平和の大切さについて考えた。

モザンビークの支援活動として、5年生は地域の洋菓子店の協力のもと、平和をテーマとしたクッキーの企画・販売活動を行い、クッキー販売の売り上げの一部はモザンビーク支援のための募金となった。6年生も、EGNからの情報で必要とする支援物資集めや募金活動を学校や地域で行った。

3・4年生はモザンビークの生活・文化を体験し、食・衣・音楽などを楽しむことができた。

1・2年生には、モザンビークも含め、各国の絵本の読み聞かせを行った。



## ▶ Outcome 成果と課題



モザンビークと関連のある内容を取り入れながら、系統的に取り組めるよう、各学年に位置付け、実践することで、学校全体で、モザンビークとの交流・支援活動に取り組めるようになった。

近隣の小・中学校へ本校の活動を知らせることにより、地域で連携・協力できる可能性が膨らんだ。近隣の小・中学校や地域、ユネスコスクールとの交流の仕方について、可能性を探っていきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

EGNとの協働による交流や支援を行うことを通して、子どもたちは、自分の生き方・考え方について見つめ直すことができた。知識だけでは得られない今後に生かせる真の学びができるようになった。

人や地域とのつながりは、子どもたちに多様な教育機会・内容を提供できる大きな要因となり、活動が豊かなものとなっている。実践を重ねる中で、教員の意識も変化し、保護者や地域の方がたにも以前よりも活動への協力が得やすくなってきた。

学校名：松山市立新玉小学校（あらたましょうがっこう）  
 校長名：間部 量吉（まなべ かずよし）  
 児童数：559名  
 住 所：〒790-0011 愛媛県松山市千舟町八丁目89番地  
 電 話：089-941-1449  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：国語（1～2年生） 総合（3～6年生）  
 連携校・団体：NPO法人えひめグローバルネットワーク



我が校にとってESDとは、児童の生活の場である地域での様々な人とのつながりや社会とのつながりの中で、今日より明日がよりよいものとなるように、自分ができることを考えて行動し、未来をつくる力を育てる教育である。

# 白川の緑を守ろう

環境

【キーワード】

樹木への親しみ 調べて広げる 学校の自慢  
自分たちができること

## ▶ Goal ねらい



身近な樹木に親しみ、紹介する活動を通して木の持つ役割や人間との関係を知り、未来の環境を考えることができる。

樹木を大切にできる心情を養い、自然とともにある自分たちの生活を見通して、緑を守っていくために、自分たちができることを実行する意欲を持つ。

## ▶ Activity 実践内容



校内には子どもたちが名前を知らない木が多くあったが、国語教材「森林のおくりもの」の学習をきっかけに、学校にある木に関心を持つようになった。子どもたちで意見を出し合い、学校にある木を調べ、大切に守りつないでいく活動をしていくことになった。話し合いでは、校内の木について、調べる内容や方法を子どもたちに具体的に考えさせ、次のような活動を行った。

### ① ネームプレートの作成

紙粘土で樹木の特徴を形にした立体のプレートは親しみがあり、好評である。

### ② マイツリーガイドブックの作成

自分の好きな木を2本「マイツリー」として選び、木の名前や特徴などを調べて122本分の木のガイドブックを作った。

### ③ 白川グリーンマップの作成

小学校の敷地図に、どこにどんな樹木がある





のか分かるようにした。

#### ④グリーンカレンダーの作成

校内の樹木の中から毎月1本を写真に撮り、12か月分をカレンダーとして作成している。

#### ⑤グリーン新聞の作成

校内の木のこと、森林の働きなど調べてきたことや活動などを掲載し、校内や地域の人に配布した。

その他、表現発表会でこの活動のことを地域の人たちや保護者、児童に知らせた。また、ユネスコスクール子どもサミットや子ども環境会議2014に参加、発表した。

## ▶ Outcome 成果と課題



木への親しみから樹木そのものや人の生活とのかかわりを自発的に調べるようになり、森林が環境の中で果たす重要性を認識するようになった。森林を守り未来につないでいく必要性に気づくことができた。

課題は、活動を今回の学年で終わらせず、下の学年にいかにつないでいくかである。

## ▶ Transformation

実践による変化

児童は校内や地域の人に発信したことで、たくさんの木は学校の自慢だと考えるようになった。もっと木のすばらしいところを紹介したいと意欲を持って続きの活動に取り組んでいる。

地域の方も関心を持ちGT(ゲストティーチャー)に名乗り出てくださいようになり、活動に広がり期待できる。

学校名：大牟田市立白川小学校(しらかわしょうがっこう)  
 校長名：吉光 哲也(よしみつ てつや)  
 児童数：337名  
 住所：〒837-0927 福岡県大牟田市白川町1丁目183  
 電話：0944-53-6018  
 対象学年：5年生  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：なし



我が校にとってESDとは、学校や地域を愛し、郷土の未来を考える子どもの育成。

# 自分たちで育てた大豆から 味噌を作ろう

農業・食育 【キーワード】 栽培活動 調理活動 食生活の見直し

## ▶ Goal ねらい



追求活動や体験活動を通して、食品の中に生かされている先人の知恵や技術のすばらしさに気づき、自分自身の将来へ向けての食生活を見直すことができるようにする。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 味噌作り

- ① GT(ゲストティーチャー)と一緒に畑を耕し、大豆の種を植える。
- ② お世話をしながら、大豆の育つ様子を観察する。
- ③ 枝豆を試食して、他学年に学習内容を発信・紹介する。
- ④ 多様な大豆加工品について調べる。
- ⑤ 大豆を収穫し、味噌作りへの見通しを持つ(6.2kg)。
- ⑥ 味噌作り専門のGTを招き、大豆から味噌を作る。
- ⑦ できた味噌を試食したり、地域の方へ配布したりする。







## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

農業体験活動や調理体験活動を通して、子どもの食べ物や食事に関する意識が高まり、給食時のマナーがよくなり楽しい雰囲気で行い、食べ残しを少なくしようと子ども同士の声かけがよく見られるようになった。

### ■ 課題

栽培活動においてはGTや教師が手厚く支援を行ってきたので、できるだけ子どもに任せ、子どもの主体性を引き出す支援をおこない、年間を通して栽培活動の意欲を継続させる工夫が必要である。

## ▶ Transformation

実践による変化

本実践を通して、食べ物を育てる大変さや大切さ、食べ物には様々な活用方法や昔からの知恵が含まれていることを再認識でき、子どもも教師も食に関する指導の大切さを実感することができた。

また、大豆栽培農家の方やマルナガ醤油の方をGTとしてお招きし、本物を体験するなかで、子どもたちは先人や人生の先輩への尊敬や感謝の念をいだき、「自分たちにもできることをやっていきたい。」という成長の跡もうかがえた。

学校名：大牟田市立三池小学校（みいけしょうがっこう）

校長名：松尾 悦男（まつお えつお）

児童数：399名

住所：〒837-0923 福岡県大牟田市大字新町289-1

電話：0944-53-6021

対象学年：3年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：マルナガ醤油株式会社 他



本校では、ESDを「未来志向の学習」と解釈し、自分たちの子どもや孫たちが心身共に豊かな生活を送ることができるように、地球上の人、もの、ことを大切にするための学習ととらえている。

# 吉野小 桜プロジェクト

環境

【キーワード】 ふるさとへの誇りを持つ 桜を通した美しいまちをつくる  
地域の一員としての自覚ある考え・行動

## ▶ Goal ねらい



吉野小学校の桜に込められた思いについて知り、誇りに思うとともに、その良さを未来につなぐため、広報活動や植樹活動など自分たちにできることに取り組もうとする。



## ▶ Activity 実践内容



吉野小学校は、桜の美しい学校である。しかし桜を誇りに思っている児童は少なかった。そこで、桜に込められた人びとの思いについて調べ、母校の誇りと、自分も地域の一員だという自覚をもち行動できるようにしたいと考え、本単元を設定した。

まず、校章をデザインした方と、開校当時在校生だった方（いずれも地域住民）を招聘し、桜の校章に込められた思いや、開校に向けた当時の在校生や地域の方がたの願いについて触れさせ、吉野の桜が地域住民の思いが込められた大切な桜であり、自分たちがその思いを受け継ぐ一員であることを実感させた。

次に、桜がどんな植物か調べてみると、吉野小の桜の寿命が近いことがわかり、その大切さを多くの人に広めた。桜で美しい学校・美しいまちを守るための方策として子どもたちが考えたのは、夏祭りで御輿を作ったり、公民館でポスター掲示をしたりする広報活動であった。

また、市内の製菓工場で校章の入りの煎餅を作ってもらい、子どもたちの思いを込めた手紙を添えて販売し、桜の植樹費用にしようということになった。昨年度は3本の桜の植樹を行うことができた。



## ▶ Outcome 成果と課題



活動を通して吉野の桜や校章に込められた思いを知ったり、PR活動を応援して下さる地域の方々と触れ合ったりすることによって、自分たちが地域の方々から大切にされていることに気づき、地域の一員としての自覚を高めることができた。

今後どのようにプロジェクトを進めていくのか、年々確実に引き継ぎながら活動を行っていく必要がある。

## ▶ Transformation

実践による変化

子どもたちは、吉野の桜や校章に込められた思いを知ったり、PR活動を応援して下さる地域の方々と触れ合ったりすることによって、自分たちが地域の方々から大切にされ、支えられていることに喜びを感じ、地域の一員としての自覚を高めることができた。挨拶が明るくできるようになり、地域の見守り隊の方のお休みを知って心配したりするなど、子どもたちと地域とのかかわり方、接し方が以前よりも明るくあたたかいものに変化してきている。

学校名：大牟田市立吉野小学校（よしのしょうがっこう）

校長名：橋本 一郎（はしもと いちろう）

児童数：421名

住所：〒837-0912 福岡県大牟田市大字白銀967番地17

電話：0944-58-1037

対象学年：5年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：トルコの小学生との交流

気仙沼市立鹿折小学校 奈良市立佐保小学校



我が校にとってESDとは、身近な課題について、友だちと協力しながらみんながよくなるためにどうすれば良いかを考え、行動することによって、地域の一員、日本の一員、地球の一員としての資質を身につける学習。



---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

## 第3節

# 中学校

---

# ふるさとを知り、ふるさとを愛し、 ふるさとを創る心を育てる

大谷ハチドリ計画（環境保全）をとおして

環境

【キーワード】 自然 環境保全 交流 防災

## ▶ Goal ねらい



ふるさとの自然環境にふれる体験活動の中から課題を設定する。その課題解決をとおして地域の自然や暮らしを守り伝える持続可能な地域づくりを考える。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 再生した田んぼで環境保全教育

2004年から大谷ハチドリ計画を継続して進めている。松枯れ対策、磯焼け調査、ふゆみずたんぼをとおして環境保全教育に取り組んでいる。震災後はふゆみずたんぼを中心に地域に根ざした環境学習を展開している。

1年生では、震災で唯一生き残った松の下草刈りや学校林の見学を実施した。2年生は、震災後、回復した海でウニの生態調査や海岸調査、東北大学教授の出前授業、漁協の聞き取りなど、大谷の海の現状を知る活動を展開している。

3年生のテーマはふゆみずたんぼである。ボランティアの協力で震災後すぐに再生した田んぼで田植えや稲刈りなど行った。

震災後、毎年来校する兵庫県立舞子高等学校と環境と防災についてワークショップや田んぼの除草作業を行ってきた。今年度は、修学旅行の機会に多摩市立東愛宕中学校を訪問し、交流を深めた。東愛宕中学校とは環境教育のキャラクター「マンベイ」を協働で創作した。





## ▶ Outcome 成果と課題



地域の自然をみつめる機会をとおして復興を考えることにもつながった。先輩たちが植樹した松の下草刈りや69年前に植えた学校林を見学できたことは、今後の活動にとって大きな進展になっていくと考える。

今年度は市の区画整備に伴いふゆみずたんぼの代替地で米づくりを継続している。幼、小・中学校、地域を結ぶ大切な連携の場として活用の幅をさらに広げたい。また、ユネスコスクール間の交流や防災と環境のかかわりについてもさらに考えていきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 再生した田んぼで環境保全教育

#### 1. 生徒の変容 (生徒感想からの抜粋)

- ・日常のご飯をあたりまえに食べていることがどれだけ大切なものなのか分かりました。
- ・環境に対する興味が増し、プレゼンテーション力や発表する力がつき何事にも率先してできるようになったと思います。
- ・地球温暖化など、現代の環境問題と向き合うことができた。
- ・つながりのある生き物の生態を知り、田んぼの仕事をまたやってみたいと思いました。

#### 2. 教師や保護者、地域住民

校庭にある仮設住宅の住人からは「生徒の明るい声が聞こえると元気がわく」というお話もいただく。今後も保護者や地域住民の声を大切にしてさらに地域の連携を深めていきたい。

学校名：気仙沼市立大谷中学校 (おおやちゅうがっこう)  
 校長名：外田 育久 (ますだ いくひさ) 生徒数：94名  
 住 所：〒988-0273 宮城県気仙沼市本吉町三島60-4  
 電 話：0226-44-2004  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：東北大学 多摩市立東愛宕中学校  
 兵庫県立舞子高等学校 等



我が校にとってESDとは、地域に根ざした環境保全教育をとおして地域の活性化をめざすもの。

# 海拔表示プロジェクト

防災

【キーワード】 海と生きるために 忘れないために そのとき!どうする?

## ▶ Goal ねらい



学区内の電柱に海拔表示板を取りつけ、日常的に海拔を意識した生活を送ることができる環境を作り出すことで、海拔に関する感覚を育成し、生徒、そして、地域の防災対応能力を向上させる。地域と協働してプロジェクトを行うことで、地域とのつながりを強化し、生徒一人ひとりが地域の一員であることの意識や地域復興の担い手であることの自覚を高める。

定期的にメンテナンスなどを行うことで、東日本大震災の体験を忘れないようにし、災害の教訓を風化させることなく後世に伝承する。

## ▶ Activity 実践内容



学区内の電柱の設置位置や番号の調査を行った。電柱の決定および許可申請については市の危機管理課や東北電力にヒアリングを行った。国土地理院の「標高がわかる Web 地図」で海拔表示について調べた。それをもとに、海拔による色分け(赤・オレンジ・黄緑・緑・青)をして表示板を作成し、取り付け作業をした。

代表生徒が保育所と小学校へ出向いて、本プロジェクトの広報活動を行った。今後は、汚れや取り付けバンドの点検などのメンテナンス活動が必要となる。







## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

昨年度行ったアンケートの結果からは、100%の生徒が「海抜表示プロジェクト」への取り組みを肯定的に捉え、この活動が防災意識の高まりにつながっていることが分かった。

### ■ 課題

本校は来年度に控えた気仙沼市立唐桑中学校との統合に伴い、今年度をもって閉校する。そのため、「持続可能」という観点で考えたとき、海抜表示プロジェクトの継続の是非や、取りつけ済みの表示板のメンテナンスをどのように行っていくかなどが課題として挙げられる。

## ▶ Transformation

実践による変化

海抜表示プロジェクトを通じて本校の生徒が感じたこと、考えたことをもとに少年の主張全国大会で発表し内閣総理大臣賞を受賞したことで、生徒及び教職員がESDを更に身近で重要なものと感じるようになった。

各種会議や他校との交流において実践事例を発表するなど、校外への情報発信を積極的に行う中で、取り組みに対する高い評価が得られ、このことが生徒の自己肯定感や自己効力感を高めた。

学校名：気仙沼市立小原木中学校（こはらぎちゅうがっこう）

校長名：高野 勝則（たかの かつのり）

生徒数：29名

住 所：〒988-1511 宮城県気仙沼市唐桑町館68番地

電 話：0226-34-3614

対象学年：全学年

教科・領域：防災

連携校・団体：学区内の青少年育成協議会 防犯協会



我が校にとってESDとは、東日本大震災で学区を構成する3地区のうち2地区が甚大な被害を受けた小原木地区が復興に向かうために必要な人材を育成するとともに、地域との連携を深めるための重要な取り組みである。

# 2050年の唐桑のエネルギーについて 考え、提言する

環境

【キーワード】 エネルギー 地域 環境 防災

## ▶ Goal ねらい



持続的・発展的な社会をつくるために、ふるさとを思いながら、夢や志、プラスの気づきをもってエネルギーについて学習し、地域の将来のあり方を提言していく。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 1年生

唐桑・気仙沼地域の「地域を知ることと物質の循環」をテーマに、自分たちのふるさと、唐桑を深く知ることが契機に、海における物質の循環、生活における物質の循環について、課題を見つけ講話と体験活動から学ぶ。

### ■ 2年生

気仙沼地域・宮城県での「リサイクルとエネルギー問題の実際」をテーマに、ダムと水力発電所の見学、炭焼きと野外炊飯を通して、エネルギーと環境の問題への理解を深める。さらに、職場体験を通して、事業所等のリサイクル意識やエネルギー問題を調査する。

### ■ 3年生

国内のエネルギーに関する課題を学んだ上で、再度地域に目を向け「2050年、私たち唐桑のエネルギー」を考える。最後は提言をまとめ、発表し討論を行う。

震災の経験を生かし「防災又は復興とエネルギーに関連させた学習活動ができるのではないか」と考え、震災がれきの処分場見学や、震災直後の唐桑の海的环境調査など、防災・復興も視野に入れた課題追究を行ってきた。活動内容や体験活動・見学場所は見直しをし、毎年調整を行ってきた。



## ▶ Outcome 成果と課題



生徒の環境やエネルギーに対する意識や態度は高まってきている。また、昨年度は、エネルギー教育賞の中学生の部で最優秀賞を受賞したことで、多くの方に本校の取り組みを知っていただくことができた。今後は、この学習を通して生徒が学び、体験したことを自分の生活や生き方に活用できるようにしたい。そのために、講師や専門家と生徒が直接対話・交流しつつ学習活動を行うような工夫をしたい。

平成27年度には学校統合を控えており、両校の取り組みのよさを生かしたESDの展開ができるような、新たな学習プログラムの作成に努めた。

学校名：気仙沼市立唐桑中学校（からくわちゅうがっこう）  
 校長名：小野寺 正一（おのでら しょういち）  
 生徒数：135名  
 住 所：〒988-0541 宮城県気仙沼市唐桑町北中130番地  
 電 話：0226-32-3144  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間 理科  
 連携校・団体：産業技術総合研究所 浅沼宏先生（元：東北大学）  
 NPO法人森は海の恋人 舞根森里海研究所  
 東北電力株式会社（石巻営業所）

## ▶ Transformation

実践による変化

震災を経験し、エネルギーに対する危機意識はますます高まってきた。見学・体験場所の決定段階から、当初の予定通りではなく「今できることをやる」ということで模索・検討をし、より良い取り組みができるようにしてきた。

このプログラムで3年間学習した3年生の提言に、「唐桑での林業によるエネルギーと雇用の確保」「エネルギーに関するベンチャー企業誘致による雇用とエネルギーの確保」などがあった。生徒に問題意識や課題解決能力の高まりが見られた。全校発表会を参観した保護者から、「生徒の学びの内容がよくわかる」「学年を超えて活発に質疑応答が飛び交う様子から生徒の意識の高まりが感じられる」「この取り組みを今後も継続してほしい」「大人もエネルギーに対して真剣に取り組まなければならない」といった感想が寄せられた。



「理想の未来へのかけ橋の設計」

橋を造って渡って未来へ行くのが子どもたちであれば、ESDとはそのかけ橋（道程）のようなものだと思う。よりよい設計を工夫していきたい。

# 『私たちは未来の防災戦士』

「自助・共助・公助」の学びと「つながり」の大切さを通して

防 災

【キーワード】 自助 共助 公助

## ▶ Goal ねらい



災害発生時および発生後に、自分の身を守るために自分でできることや、地域の一員として地域住民と協力してできることは何か、中学生の視点から考え、防災意識を家庭から地域へと波及できる防災リーダーを育成する。

年度ごとに活動の視点を「自助・共助・公助」とサイクルしていたが、東日本大震災の経験を踏まえ、「自分の身を守る力」を一層伸ばしていくために、「自助、自助を基盤とした共助、自助を基盤とした公助」という新たなサイクルで学習を行い、今年度は「自助」をテーマに活動に取り組んでいる。



## ▶ Activity 実践内容



- 6月 本校校庭仮設住宅入居者との合同避難訓練
- 9月 学年毎防災活動
  - 1年生：津波のメカニズムの講話
  - 2年生：応急手当・救命救急講習
  - 3年生：手作りカルタを使用した小学生への防災啓発活動
- 10月 少年消防クラブ体験活動  
規律訓練・ロープ訓練・放水訓練など
- 11月 総合防災訓練  
気仙沼市津波総合防災訓練の日に合わせ、市危機管理課、地区自治会、地元小学校と連携しながら実施
- 12月 防災学習発表会  
今年度の活動をまとめ、授業参観中に発表会を実施  
公民館長や自治会長などで構成される「階上地区防災推進委員」の方がたも招待  
ショート避難訓練を適宜実施  
授業中、休み時間などで緊急地震速報（訓練用）を放送し、その場で素早く身を守る訓練



## ▶ Outcome 成果と課題



6月に行った避難訓練は、悪天候のため一部計画を変更しながらの実施となった。今回の訓練では、地震速報を聞き、上級生ほど素早く避難行動に移ることができ、自分の身は自分で守る「自助」の力が身につけてきていることが確認できた。どのような時間・場所・状況においても、確かな知識のもと、落ち着いて状況を判断して、的確な行動をとる力を育むことが重要になる。今後のさまざまな活動を通して、さらなる向上を目指すことが大切である。また、「正常化の偏見」などのさまざまな思い込みを払拭させ、自助意識の向上を図ることが課題である。

## ▶ Transformation

実践による変化

生徒は、地震から身を守るために、物が「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」安全な場所を見つけながら避難したり、将来の気仙沼の生活を考えながら活動することで、未来を予測し行動する力や他者と協力する態度、進んで活動に参加する態度等が身につけてきた。さらに、学習した内容を発表したり、他団体と交流したりする経験を通して、自分の考えをより正確に相手に伝える力や物事を多方面から見る力が向上している。また、各種活動を小学校や地域、関係機関等と合同で取り組んできたことにより、現在、学校防災から地域防災へと移行し、「階上地区防災教育推進委員会」という組織が立ち上がり、地域連携型の充実した防災活動が行われている。

学校名：気仙沼市立階上中学校（はしかみちゅうがっこう）  
 校長名：今野 勝美（こんの かつみ）  
 生徒数：121名  
 住 所：〒988-0238 宮城県気仙沼市長磯中原125番地  
 電 話：0226-27-2304

対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：気仙沼市立階上小学 階上町立階上中学校  
 防災学習フォーラム（ユネスコ主催）  
 岐阜県・神戸市・鎌倉市・東京都



生徒が「いつ」でも「どこ」でも「どのような状況」でも『よりよく生きていくことができる力』を育てていくことが大切であると考えます。

# 多様な体験的活動を取り入れた 持続発展教育

総合

【キーワード】

防災教育  
地域貢献

キャリア教育  
言語活動

環境美化教育

復興支援

## ▶ Goal ねらい



持続可能な社会の担い手の育成を目指し、自律心や思考・判断・表現などの生きる道を育み、人・社会・自然とのかかわりやつなかりを認識・尊重できる人間性豊かな生徒を培う。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 中学生が主導する地域防災訓練

防災教育では津波被災農家での奉仕体験活動や校内炊き出し調理コンテストなどを行い、キャリア教育では職場体験実習はもとより、将来の夢や希望を追求するために東北大学オープンキャンパスで1日体験学習を行う。

環境美化教育では小学生と合同で年に2回地域清掃を行い、さらに仙台七夕や SENDAI 光のページェントにおいても生徒数の2割を超える希望者がゴミ回収等などの奉仕活動を行っている。

特に中学生が主導する地域防災訓練では、3年生が避難所開設・運営、集団避難誘導、炊き出し調理、救急救護などを分担し、1、2年生や住民・保護者が避難者役となって実施している。

昨年度は、中学3年生の主導により中学1、2年生約300人と209人の住民・保護者が参加し、地域防災訓練が行われた。その日の午後は、生徒会が司会・進行役を務め、防災教育シンポジウムを主催した。訓練の成果発表や大学等の先生による講演・講評を行った。

これらの教育においては、生徒にレポートやアンケート調査、保護者にコメントを求めて成果や効果を検証している。そして生徒の思考・判断・表現の力を育むだけでなく、積極的に発表の機会を設けて他に自らの考えや想いを伝える発進力の育成に努めている。



## ▶ Outcome 成果と課題



多様な体験的活動に基づく防災教育やキャリア教育、環境美化教育を推進することで、持続可能な地域と未来社会の担い手を育む可能性が高く、効果的教育方略であることがアンケート調査等の分析から伺える。

生徒たちは社会のために尽くし、貢献できる職業観を抱き、その職に就くために意欲的に努力することが期待できる教育実践に通じるものと考えられる。

## ▶ Transformation

実践による変化

自らの力で自らの未来を培うことばかりでなく、他人の未来のためにも自らの力を発揮したいという思いが徐々に高まりつつある。そして、未来を変える、という、より能動的な意識が少なからず育まれているものと考えられる。

学校名：仙台市立南吉成中学校（みなみよしなりちゅうがっこう）  
 校長名：高橋 教義（たかはし のりよし）  
 生徒数：292名  
 住 所：〒989-3204 宮城県仙台市青葉区南吉成5-18-2  
 電 話：022-277-4377  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：町内会 消防団 交通指導隊 老人会  
 防火婦人クラブ



質問：どんな苦難にも立ち向かう勇気と力を感じた（2年生 7月 63.2% → 11月 80.5%）

質問：自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う（2年生 7月 74.4% → 11月 82.8%）

自らの挑戦、人への影響力、苦難に立ち向かって乗り越える努力が本校のESD実践により高まりを見せている。

# 未来につなぐ地域連携教育

総合

【キーワード】

地域連携教育 生きる力 学力向上 命の尊厳教育  
ボランティア活動 自己有用感 自己肯定感

## ▶ Goal ねらい



ESDを「持続可能な社会の担い手づくり」と捉え、地域での活動を基本とし、幅広い連携のもとに、表現力、コミュニケーション能力を高め、自己有用感や自己肯定感の向上、人間性、社会性を育成している。この中に学びの本質がある。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ ESD 4本の柱

環境教育・国際交流教育・防災教育・平和教育を柱に、持続可能な社会の担い手の育成に励んでいる。また、本校から発信し、小・中・高・大学、教育委員会、企業、NPOをとりこむ大田区コンソーシアムの推進を図っている。

環境教育では、農業体験を行う修学旅行を実施し、またボランティア団体、農援隊を結成し、駅前の花壇の整備、培養土づくりから始めるゴーヤ栽培やホタル自生地の水質浄化、伝統野菜の育成など、有機農法を中心に地域の人とのふれあいのなかで環境を学習していき、子どもの自己肯定感を育む。

防災教育では、防災訓練を地域の人びとと行い、町の防災設備なども点検したりする。3年生は普通救命救急技能認定証を全員取得している。

中国、インドネシア、モンゴルの人びととの交流を図った国際交流教育では、教員、ユネスコ関係者たちとの意見交換が活発に行われた。

カンボジアの地雷撤去キャンペーンやラオス語絵本プロジェクトにも参加し、平和教育のため支え合っていくアジアの国々との交流を図った。難





民についての新聞記事を読むことにより難民問題を考えさせる機会も増やし、民間の難民支援プロジェクトにも参加した。校庭で発見された防空壕もまた、平和の砦として身近な学習教材とした。



## ▶ Outcome 成果と課題



「地域は屋根のない学校」を合言葉に、地域とのつながりを学びの場としている。生徒は、地域活動を通して郷土を愛し、人の役に立つことで自己有用感を育み、自己肯定感を高めることにつながった。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 地域の目が見守る

ESDを推進していくことが旗印となり、地域の方からも関心を持たれ、地域の目が本校の生徒を温かく見守ってくださるようになった。また、このような活動を通して、生徒は自己有用感、自己肯定感を生み、学力向上につながっている。

生徒は自分の意見を持ち、他者の意見を聞き理解するとともに、自信を持って自分の意見を主張することができるようになった。ESDは学力向上と共に豊かな心の育成につながっており、学びの本質が含まれている。

学校名：大田区立大森第六中学校（おおもりだいろうくちゅうがっこう）

校長名：税所 要章（さいしよ かなあき）

生徒数：361名

住 所：〒145-0063 東京都大田区南千束1-33-1

電 話：03-3726-7155

対象学年：全学年

教科・領域：全教科

連携校・団体：豊田市立藤岡南中学校 東京工業大学



ESDは未来へつながる明るく、輝く希望の星であり、生徒、保護者、教職員、地域に大きな勇気と生きる力を与えてくれている。生徒が自己を愛し、家族を愛し、地域を愛し、世界の平和を想うふるさと教育である。

# ともに生きる

「関わり」「つながり」を学ぶ3年間の取り組み

環境

【キーワード】

環境教育 国際理解教育  
地域の伝統文化・芸能に関する教育

## ▶ Goal ねらい



本校では、総合的な学習の時間（以下 IT）を中心に学習を進めている。ITは3年間で6期に分け、継続的・計画的に実施している。体験学習や探究活動を積極的に取り入れ、自然環境や社会との「かかわり」「つながり」を重視し、持続発展可能な社会の担い手の育成を目指している。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 6期からなる総合的な学習

学習のスタートとして1期は、「いしかわ動物園」を訪問し自然と親しみ、環境やエコ活動を考える機会とした。その後、分野（水、ゴミ、エネルギー、食ごとに探究活動を行った。2期では、1年生は金沢の伝統芸能・文化の5つ（加賀鳶、加賀萬歳、素囃子<sup>すばやし</sup>、茶道、能）を取り上げ、体験・探究活動を実施した。2年生はテーマに沿って見学地を選択し、金沢の伝統工芸や文化的景観のフィールドワークを行い、地元を深く知ることができた。また、伝統芸能・文化への関心を高め伝承の大切さに気づいた。キャリア体験を通して地域社会の営みを考える3期で、この体験を英語で表現し、個人発表とともに教室で掲示した。金沢から京都にフィールドを広げ、日本の伝統文化を学んだ4期、さらに金沢の姉妹都市について世界に目を向けて国際的な交流を考えた5期、最後の6期では、これらの成果をまとめる学習を行った。卒業研究的な色合いが濃く、これまでの学習成果が随所に活かされていた。



## ▶ Outcome 成果と課題



体験学習や探究活動を積極的に取り入れることで、課題解決型学習が充実するようになり、「ともに生きる力」を意識した指導ができるようになった。

今後、各テーマに対する課題づくりとその解決に向け、体験学習の時間確保が課題である。



## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 小中と連携したESDの取り組み

泉中学校では、校区の小学校すべてがユネスコスクールに加盟し、ESDを実践している。小中連携した取り組みも多い。

9年間の系統づけられた総合的な学習の時間を小学校段階から学習している。そのため、中学校入学段階で、すでに生徒の意識は高い。地域とのつながりや体験を重視したESDの取り組みがなされている。

さらに、生徒会活動でのボトルキャップ集めや、あいさつ運動、ユネスコ寺子屋運動等を小中合同でおこなっている。その取り組み内容も、小中の児童生徒が話し合って案を出し合い決めている。

このように、泉中学校ではESDによって変化がもたらされるというよりは、学校生活の中に浸透している。

学校名：金沢市立泉中学校（いずみちゅうがっこう）  
 校長名：寺本 弓子（てらもと ゆみこ）  
 生徒数：423名  
 住 所：〒921-8036 石川県金沢市弥生1丁目26番1号  
 電 話：076-242-2411  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間  
 連携校・団体：気仙沼市の中学校



人の力は小さいかもしれないが、多くの人と取り組むことで、未来をかえる力になる。いろいろな人との繋がりを大切にすることが未来につながる。

# 発信！北中まちづくりプロジェクト

勝山を美しく、元気に、有名に

環境

【キーワード】 発信 提言 環境教育 キャリア教育 地域活性化

## ▶ Goal ねらい



### ■ 思いを発信できる生徒の育成

本校のESDテーマは「勝山を美しく、元気に、有名に」。大人になっても住み続けたい勝山市を目指し、全校体制で取り組んでいる。その活動を地域に『発信』する活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を高め、つながりを大切にして思いを発信できる生徒の育成を目指す。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 勝山を美しく

全校で校区内の一級河川の清掃活動を保護者や地域の方と行い、ゴミの分析等から環境問題を提言している。そして「勝山の自然は本当に豊かなのか」を問い、外来種について学び始めた。本来の自然を取り戻すため河川に生息する外来植物のコカナダモから在来種のバイカモを守る駆除活動を行った。また、大人が関心を持ち、共に活動する必要性を昨年の「ふくいユネスコフォーラム」で提言した。

### ■ 勝山を元気に

1年生では市の魅力ある産業を学び、職場見学をして気づいた魅力の発表会を行った。2・3年生は地域の行事等に合唱等で参加し、地域活性化に努めている。

### ■ 勝山を有名に

2年生では市の補助事業を活用して恐竜ステッカー、クリアファイルを作成し、市の祭礼等で販売した。勝山の名勝や施設等の知名度調査を金沢市内で行った結果をもとに、市長に対しPRに関する提言を行った。また、地元の店と連携して開発した勝山土産も展開中である。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ できることを模索し、発信するスキルの向上

「勝山には何も無い」「勝山の自然は豊かだ」と考えていた生徒たちが、環境保全やまちの活性化を考え、できることを模索することが今後の生き方を考える上で大きな成果があった。また、清掃や駆除という小さな活動の継続が大きな成果を生むことも実感できた。活動は報道でも取り上げられ、「発信」の充実に繋がり、地域からの理解・協力も高まった。更に広い視野で探究できる目とスキルを身につけさせ、今後も活動を継続し、将来も勝山に住み、勝山を盛り上げていける生徒を育てていきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 生徒も教員もふるさと新発見、地域が元気に

自分のふるさとの知らなかった魅力を感じとり、「大人になっても住みたい」「自分たちの活動の成果を見届けたい」と思える生徒が増えたことが大きな変容である。教師自身もふるさとについて新しく発見することがあり、多くのことを学んでいる。さらに、生徒が自分の考えを発信したり、表現することへの抵抗が少なくなってきた。活動が新聞・テレビなどに取り上げられることで、家庭・地域・学校の協力体制が充実し、地域が元気になってきたと感じる。



学校名：勝山市立勝山北部中学校（かつやまほくぶちゅうがっこう）  
 校長名：水上 俊成（みずかみ としなり）  
 生徒数：129名  
 住 所：〒911-0045 福井県勝山市荒土町伊波21-2  
 電 話：0779-89-2016  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間 学級活動  
 連携校・団体：勝山市内の全小・中学校

「環境保全活動しているんだって聞いているよ。りっぱだね。がんばってね」という声を地域の方から生徒にかけてもらい、生徒は自分たちの活動が周囲に伝わっているを感じている。そして、もっと多くのことをもっと広く深く発信していきたいと思うようになってきている。

# 総合的な学習の時間「ふるさと敦賀塾」

中池見湿地を利用した持続発展的な生活の模索

環境

【キーワード】 生物多様性 環境教育 NPO との連携



課題解決能力の育成のために、総合学習で有意義な取り組みができないか模索する中で中池見湿地を利用した総合学習を考えるに至った。本校が中池見湿地に着目し学習を始めた頃、ちょうど若狭湾国定公園に中池見湿地が編入されるか、ということが話題になった。身近な場所であり、かつ希少な動植物が生存しているこの場所はとても魅力的な場所であった。言い換えれば、探求的な学習を行うのにうってつけの場所であった。体験的な学習では、その達成感を味わうのは難しい場合もあるが、ここは社会的に注目されており、活動途中にラムサール条約に登録されるなど、社会的な評価をいただけるので、達成感を味わうことができると考えた。



総合的な学習の時間は1～3年生の全校生徒80名を八つに分け、学年混合の縦割り班を作り、班別に研究テーマを決定し活動した。一つの班は9～10名で構成したが、縦割りの班での活動にしたのは、ESD教育で最も重要視されている「持続」を意識しているからである。上級生から下級生に向かってそれぞれの保全の方法などについて語り継いでいくことで、活動を続けていくことが可能だと考えたからである。

また機会を捉え、3年生が他校との交流を図ったり、2年生が平和について考える交流会を行ったりした。



## ▶ Outcome 成果と課題



ユネスコスクールとしてはじめて取り組んだ総合学習「ふるさと敦賀塾」であったが、12月末に行った学校評価アンケートによると、「この活動に積極的に取り組んだか?」の問に対して62%の生徒が「そう思う」または「ややそう思う」と答えており、まずは及第点としたい。しかし「この活動を通して持続発展的な社会を作ることの重要性について少しは気がついたか?」の問に対しては「そう思う」または「ややそう思う」と答えている生徒が63%にとどまっている。積極的に参加していなくても、生徒一人ひとりにいくらかの変化を期待していたが、同じような結果にとどまった。逆に言えば、積極的に参加した生徒は重要性にも気がつくことができたということなのではないか。教師側の働きかけを工夫し更なる飛躍を心がけたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

環境について考える体験活動を行うことで、自然とふれあうことに違和感を持つ生徒の数が少なくなってきた。縦割り活動による実践によって学年の異なる生徒とコミュニケーションをとる機会ができ、リーダーシップをとれる生徒が生まれてきた。教員はESD実践により教科指導では味わうことのできない生徒との関わりを楽しむことができています。

本校は私立学校であり、地域との交流は少なかったが、ESDを通してNPO法人「中池見ねっと」や「中池見会」という団体との交流を通して、地域の人と関わる機会を得ることができた。

学校名：敦賀気比高等学校付属中学校  
(つるがけひこうとうがっこうふぞくちゅうがっこう)

校長名：菊崎 俊一(きくざき としかず) 生徒数：80名

住所：〒914-8558 福井県敦賀市杵見164-1

電話：0770-24-2150

対象学年：全学年

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：大牟田市立米生中学校 北九州市立尾倉中学校  
JICA九州 金沢大学



生徒にとっても、教員にとっても、ESDとは、課題(問題点)に気づき、深く考え、自分たちなりに実行する態度を身につける最良の方法である。

# 附中発！松本の魅力発信プロジェクト

## 松本の魅力発信

伝統・地域

【キーワード】

地域とのつながり 文化の継承 地産地消 発信  
課題解決学習

### ▶ Goal ねらい



伝統文化の継承や、街の発展に力を注いでいる地域の方がたの熱意にふれることで、自分たちの街「松本」のよさや魅力を実感することができる。地域の方がたとの交流を通して、地域が抱える問題に気づき、主体的に関わっていく。地域の方がたの思いや願いを大切にしながら、多くの方がたに「松本」のよさを発信する。地域の方がたと協働して課題を解決することで、多面的・総合的に考える力やコミュニケーション力を身に付け、地域とのつながりを尊重できるようになる。



### ▶ Activity 実践内容



#### ■ 七夕人形

松本の伝統工芸の七夕人形を飾る文化が薄れてきていることを知り、七夕人形について調べたり、七夕人形知名度アンケートを松本駅前で行った。そして、松本の七夕文化を知ってもらえるように市民が多く利用する松本駅に巨大七夕人形を飾った。

#### ■ 井戸

北アルプスが水源の松本の井戸・湧水について調べ、井戸水を利用している造り酒屋の女将から話を聞き、井戸水の味の違いを知った。そこで大学の先生に水質調査の指導を受けて、味と成分の因果関係について調べた。また、水量が減少している事実を知り、市役所で地球温暖化や宅地造成、道路の舗装などとの因果関係についても調べた。そして、湧水を守るメッセージを映像にして、市民の方がたに向けて発信した。

#### ■ 地産地消

地元の農作物について調べ、農家の方の熱い思いに触れ、その作物の良さを広めていきたいと考えた。そこで、農業体験をして、加工者の話を聞き、地産作物を使ったレシピ開発を行った。地産地消に取り組むレストランのシェフや加工者のアドバイスをもとに商品開発に現在取り組んでいる。





## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

松本の伝統文化の継承に尽力している人びとのつながりを深め、その願いをくみ取り、自分たちなりの発信をし、その活動が地域の方から評価されてきている。生徒は、人、材（七夕人形・井戸・地産地消）、そして地域とのつながりの重要性を一層感じ始めている。地域が抱える課題に対して、自分たちで問題意識をもち解決しようとする能力や資質が向上し始めた。多くの人との出会いから社会の営みや人の生き方に関心が強くなった。

### ■ 課題

地域とつながる場を教師自身が教材研究として見つけ出していく必要がある。時間の確保が難しいため、カリキュラムの工夫が必要である。

## ▶ Transformation

実践による変化

生徒は、地域の人との出会いや関わりから、自分たちの活動が認められる経験をしたり、地域の取り組みに心動く経験をしたりした。それによって、地域が抱える課題に問題意識をもち、解決しようとする能力や資質が向上し始め、自分たちから働きかけ、動き出す姿が見られるようになった。街の方がたの思いに対して自分たちも貢献したいという思いが出てきたと思われる。

学校名：信州大学教育学部附属松本中学校

(しんしゅうだいがくきょういくがくぶふぞくまつもとちゅうがっこう)

校長名：村松 久和 (むらまつ ひさかず)

生徒数：474名

住 所：〒390-0871 長野県松本市桐1-3-1

電 話：0263-37-2212

対象学年：3年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：豊田市立藤岡南中学校 気仙沼市立面瀬中学校



本校の学校目標は「たくましく心豊かな地球市民」である。そのため、「真の地球市民」を目指し、一人ひとりができることを考え、実践しようとするのが大切である。

# 「天城学習」を通して持続可能な地域 (社会)を築く大人になろう

ESDで自尊感情を高め、21世紀を生きぬく学びを

総合

【キーワード】

体験とつながり Think Globally, Act Locally.  
地域を持続可能な社会に

## ▶ Goal ねらい



地球規模の課題を学ぶと同時に地域での様々な体験や地域で暮らす人々とのつながりを基に、地域に誇りをもち自尊感情を高め、自ら考え主体的に判断し行動できる生徒を育成する。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 体験活動と修学旅行

1年生の「福祉体験」2年生の「職場体験」などの体験活動は、住んでいる地域に限定した。3年生の京都・奈良への「修学旅行」は、天城の伝統や文化・観光と比較し、良さを地域に生かす視点の学習に切り替えた。また、新たに自然体験として、天城山の縦走を加え、地域の自然を、体験を通して学んだ。

総合的な学習の成果を3学期の「天城学習発表会」で保護者や地域の方・伊豆市職員・伊豆市長を招いて発表する場を設けた。特に、3年生は「提言」を行い、伊豆市長に届けた。

各教科・道徳では、新聞を使ったNIE<sup>\*1</sup>の授業を行ったりして主に地球規模のテーマや課題について学んだ。また、天城中の卒業生で現在心身障害児の医療に携わっている医者に「命の授業」を行ってもらった。

\*1…教育施設で新聞を教材にして学習すること。



## ▶ Outcome 成果と課題

「自尊感情」の変化を鳴門教育大学の院生による調査の結果、ESDに取り組むことで生徒の自尊感情に有意な変化が認められ、「自尊感情」へのプラス影響が確認され、「地域への誇りをもたせ、生徒の自尊感情を高める」という本校の仮説が支持される結果となった。

自分たちの手で天城のブナを山に植林したいという生徒の想いを受け、森林管理署の提案で「ツゲ峠鹿柵プロジェクト」が生まれた。当時の3年生が資材を山に運び、署の職員や自然保全団体・業者などと協働して2か所に柵を作った。後輩が柵の中の植生の変化をコドラート法<sup>\*2</sup>で記録し、次の後輩に引き継いでいる。3年後、柵内外では明らかに植生が異なり、ブナの実生が大きく育ち、枯れてなくなっていたスズタケも再生してきている。

\*2…一定の範囲の生物の数を調べる方法で、これを行うことで全体の生物個体数を推測できる仕組み。

## ▶ Transformation 実践による変化

生徒が自分たちの活動に自信をもち、「自尊感情」が高まることで将来に夢を抱きながら前向きに活動する生徒が増えてきた。特に、ESDをはじめる前は大人になったら東京や横浜に住みたいと言っていた生徒が圧倒的に多かったが、地域に住んで地域のために活躍したいと考える生徒が出てきた。地域の方がたも学校の活動を理解し、あらゆる面で協力的になった。

学校名：伊豆市立天城中学校（あまぎちゅうがっこう）  
 校長名：亀山 誠彦（かめやま まさひこ）  
 生徒数：138名  
 住 所：〒410-3215 静岡県伊豆市月ヶ瀬853  
 電 話：0558-85-0075  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：各教科 道徳 特活  
 連携校・団体：伊豆森林管理署



ESDは「つながり」を喪失している子どもたちの「つながり」の再生をめざす人間形成（生きる力）の学びと言える。価値観が多様化し、問題が複雑に絡み合って答えの見えない21世紀を生き抜く力は、ESDの学びを通してこそ育つと確信している。

# 環境を見つめ、考え、働きかける 生徒の育成

## 環境学習を基盤としたESDの展開

環境

【キーワード】

環境学習 共生社会 低炭素社会  
ESD新香山プラン 探究学習



岡崎市で2010年より導入している「岡崎環境学習プログラム」は、総合的な学習の時間を中心に運用し、各教科とも横断的に関わりながら進める独自の学習である。この環境プログラムで9年間学んだ子どもたちが、環境問題や環境保全に関する知識や実践力を身につけるとともに、環境保全に対する倫理観を身につけた「持続可能な社会の担い手」として育ててほしいと願いつくられている。この学びを通して、身近な環境と地球規模の環境を照らし合わせて考え、自分のできる活動を実行できる生徒の育成を進めている。

本校では、「岡崎環境学習プログラム」の理念・構想を遵守しつつも、地域や子どもたちの実態に合わせて、ESDと環境学習の①何を学ぶか②どのように学ぶか③どうやって進めるかとの関連を明らかにした「ESD新香山プランの確立」、MDT（ミニ・ディスカッション・タイム）やGWT（グループ・ワーク・トレーニング）を朝の会や特別活動、道徳、総合的な学習の時間を利用して繰り返し行うことにより、聞く姿勢、積極的に話し合いに参加する姿勢を鍛える「生徒主体の学びを確立する授業づくり」の視点で研究を進めている。



### ■ 獣害とエコをテーマ

1年生は「生態系で考える共生社会」と題し、獣害をテーマに、生き物と人間との共生を考える。サルやイノシシが、田畑を荒らしたり、学校で保護活動を進めているササユリの花や根を食べる害がある。この問題をバイオリージョンマップ<sup>\*1</sup>の製作活動を導入して焦点化し、共生社会を考える学習を実践した。

2年生は「エコで考える共生社会」と題し、地球温暖化防止をテーマにしてエネルギーと人間との共生を考える。

温暖化の原因としてCO<sub>2</sub>の排出量に着目し、環境家計簿をつける家庭でのエコ活動を行い、企業に出向いてのエネルギーや環境対策の調査学習を実践した。

3年生は「未来の地球を守るために私たちができること」と題し、低炭素社会実現に向けて発信できる取り組みを考える。「原発停止の中でこの夏を乗り切れるのか？」をテーマに討論会をし、節電や「CSR」（企業が社会に貢献するための活動）学習会等を行った。

\*1…地理的な特徴によって植物や動物、他の生物体が活動する生態系域。



## ▶ Outcome 成果と課題



「将来(50年後)地球の環境は今よりよくなっていると思うか」の問いには「思わない」と答える生徒が県平均の数値よりかなり高かった。このことから環境学習を通して、生徒たちは将来に対して危機感や切実感を抱きつつ、環境問題を自分事としてとらえ、自らの行動意欲を高めることができていると考えられる。

学区を愛する国際社会を考える生徒、エネルギーに対する考えが深まる生徒、新聞を読む生徒、文章が長く書ける生徒、息の長い発言ができる生徒が多くなった。

また、世代を超えた倫理観を高めるために道徳で生徒同士による立場を明確にした討論を取り入れた。さらに、特別活動・行事で生徒が「未来を意識する」「つながりを意識する」場面が増

え、学校の教育活動全体が整備された。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 未来に生き抜く力

- ・生徒が3年間の系統的な環境学習を通して、物事の本質に迫る「批判的思考力」や未来の人との公平性や平等性を意識した「世代を超えた倫理観」が身についた。
- ・「ESD新香山プラン」作成、授業改善により、探究学習を創造する教師集団が実現した。
- ・地域と一体となって取り組むササユリ保全活動や高齢世帯への訪問活動を通して、生徒が社会的責任を実感し、市民性を高めた。

このようにESDに積極的に取り組むことで、メタ認知<sup>\*2</sup>能力や自己有用感を高め、未来を生き抜く力(21世紀型スキル)育成を意識した学校づくりが実現した。

\*2…認知心理学の用語。自分の行動・考え方・性格などを別の立場から見て認識する活動をいう。

学校名：岡崎市立新香山中学校  
(しんかやまちゅうがっこう)

校長名：杉田 吉男 (すぎた よしお)

生徒数：326名 住所：〒444-2141

愛知県岡崎市桑原町大沢20番地86

電話：0564-45-2026

対象学年：全学年

教科・領域：総合的な学習の時間  
理科 道徳

連携校・団体：環境省中部環境パートナーシップオフィス

日本教材学会

NPO法人中部猟師会三州マタギ屋

気仙沼市立唐桑中学校

愛知県立豊田東高等学校

東浦町立緒川小学校

あま市立甚目寺小学校

新香山中の総代会 学校評議委員会



### 「未来志向の生き方学習」

- ・学校の「荒れ」から再生した生徒指導のスローガン
- ・21世紀を生きるための新しい能力・学力のスケール

# 人と地球と「ともに生きる」

総合

【キーワード】 ともに生きる 人とのつながり 体験のステージ  
多様な活動の展開

## ▶ Goal ねらい



### ■ 困っている誰かのために

地域貢献から国際貢献にいたる幅の広く多彩な活動ステージを用意することを通して、将来自分の成すべき事を見つめるとともに、「どんな相手とでも、困っている誰かのためになら力を合わせることができる人間性」を養ってほしいと考えている。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 地域・国内・世界・地球とともに生きる

環境、国際理解、防災、生物多様性や地域との協働といった多岐にわたり、個々の生徒の興味や特性に合わせて選択できる体制を整えた。

地域とのステージとして、「ふれあいフェスティバル」を共催・運営している。創作料理を競うコンテストなども企画し、地域の風物詩となっている。また、地域防災の拠点として、地域合同防災演習を共催したり、トヨタ自動車と共同でPHV\*の有効性を実験するなどの防災キャンプを企画したりした。

国内とのステージとして、本校の太陽光発電を利用し、グランパスエイトなどの諸団体とCO<sub>2</sub>ゼロキャンペーンを展開した。また、ESD関連イベントで出会った諸団体や修学旅行で訪問した国内のユネスコスクールと情報交換をしながら、一緒にできる貢献活動を探っている。

世界とのステージとして、毎年、姉妹校の韓国の中学校と短期留学をし、韓国では南北境界線を訪れて、平和についての意見交換をする。また、フェアトレードを広げる運動に参加している。

地球とのステージとして、日本で唯一海を渡る蝶「アサギマダラ」を飼育、その観察を続け、他地



域とのデータ交換を試みている。また、リオで伝説のスピーチをしたセバン・カリス・スズキさんと地球環境の保全をPRした。

\*…外部電源から充電できるタイプのハイブリッド自動車。

## ▶ Outcome 成果と課題



学校の行事に地域の方がただだけでなく、卒業生やその保護者まで積極的に参加するなど、地域での学校の存在価値の高まりを感じている。課題としては、意欲の向上に伴って細分化する生徒個々の関心に対応できる体験ステージを準備するための時間の確保があげられる。

## ▶ Transformation

実践による変化

卒業生が国際交流の盛んな高校や環境保全に取り組む高校を選択するなど、将来にわたってESDにかかわっていこうとする態度がみられるようになったことである。学校全体のESDへの関心の高まりも感じている。

学校名：豊田市立藤岡南中学校（ふじおかみなみちゅうがっこう）

校長名：天野 明典（あまの あきのり）

生徒数：415名

住 所：〒470-0431 愛知県豊田市西中山町蔵屋敷86-1

電 話：0565-76-2410

対象学年：全学年

教科・領域：特別活動 総合的な学習の時間

連携校・団体：信州大学教育学部附属松本中学校

大田区立大森第六中学校 多摩市立東愛宕中学校

愛知県立豊田東高等学校 豊田市立中山小学校

韓国光明市鉄山中学校 他多数



東北の震災直後に開校した本校にとって、ESDとは「ともに生きる」という校訓そのものであり、建学の理念そのものである。

# 「人権防災教育」による 子どもの生きる力の育成と学校の変革

防 災

【キーワード】 いのち 人権 防災 「普段のことから真剣に」

## ▶ Goal ねらい



### ■ 被災地訪問で持ち帰った

東日本大震災の被災地訪問で持ち帰った「普段のことから真剣に」を合い言葉として、「人権防災教育」という視点で子どもの心を育てる教育をさらに発展させる。また将来の社会の形成者となる取り組みの推進、いのちを大切にする教育・自己実現を図る教育の推進を図っている。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 一泊二日の避難所訓練合宿

被災地訪問で学びの発信と自ら実践する活動をするために、「子ども防災プロジェクトチーム(子防プロ)」を平成23年度から結成している。子防プロには全校生徒の約2割の生徒が参加し、子防プロを中心とし「いのち」と「防災」の取り組みを全校で行っている。なかでも子防プロが企画・運営をする全校地震津波避難訓練は、大地震によりライフラインがストップし学校が避難所になったと想定した一泊二日の避難所訓練合宿を行った。代表生徒による東北被災地訪問、各地へのフィールドワーク、校外消防防災施設の見学体験研修、企業の社会貢献事業を活用しながら「命の授業」など1年間を通して様々な取り組みをしている。また、それらの実践の報告や成果、学びから得たメッセージを子どもたちが様々な機会で開催・発信している。







## ▶ Outcome 成果と課題



「普段のことから真剣に」という合言葉のもと、あいさつ運動など様々な場面で日常生活を見直し、できることからやっつけようという意識が向上している。子どもたちは人の役に立つこと、人のために自分ができることをすることに喜びや達成感を見出し、自尊感情や自己肯定感が育まれエンパワメントされ、積極的な生活態度を示している。実際、家庭などに大きな課題を背負っている生徒がこの取り組みで活躍する傾向が出ている。

課題としては、地域や近隣の小学校などと一緒にできる取り組みをもっと増やすこと、教職員が入れ替わっても継続していけるシステムを構築することなどがある。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 人権防災文化

子どもたちの方から、取り組みについての提案が出るようになった。

この取り組みがはじまって3年になるが、教職員の間でも「人権防災教育」によって、防災意識が高まったと感じている。また、よりよく生きようとする態度の育成にも有効であると感じており、学校行事や学校生活の様々な場面で、いのち・つながり・防災を意識したテーマが盛り込まれ、「人権防災文化」が広がりを見せている。

学校名：大阪市立鶴見橋中学校（つるみばしちゅうがっこう）

校長名：藤井 徹（ふじい てつ）

生徒数：180名

住 所：〒557-0025 大阪府大阪市西成区長橋3-9-23

電 話：06-6562-0001

対象学年：全校生

教科・領域：人権防災教育

連携校・団体：西成区 大阪市消防局 西成消防署

大阪市立大学 大阪市立長橋小学校

大阪市立北津守小学校 等



子どもたちは人の役に立つこと、人のために自分ができることをすることに喜びや達成感を見出し、自尊感情や自己肯定感が育まれて、未来への希望を持つことができるようになっている。

## 3か国（日本・韓国・ニュージーランド） こども会議をとおした生徒の変容

フレンドシップ協働学習プログラムによる身近な環境問題へのアプローチ

国際

【キーワード】 グローバル社会を生きぬく力 共生の資質 探求型協働学習  
学びの共同体 3か国4地域のネットワーク化 FF制度運営への参加 地域への発信



3か国の生徒が、協働学習の取り組みをとおり、地球市民の一員として持続可能な社会づくりにアプローチする。身近な環境問題に生徒自身が取り組むことにより地球的環境問題を考える。小さな力を集めると大きな力となることを認識する。



### ■ ウェブTV会議システムによる協働学習

3か国こども会議を実施した。フレンドシップスクールや国内外の学校間で環境問題の協働学習をウェブTV会議システムを活用して行った。豊中市・気仙沼市・韓国・ニュージーランド(NZ)の小・中学校5校が参加し、平成25年9月～12月の間に、①エネルギー②食糧③ゴミをテーマとして取上げた。本校は震災を経験した3都市の学校とフレンドシップを結んでいることから「エネルギー」問題を選択し、リサーチワークを実施した。気仙沼市中学校長や、NZの校長等から震災状況等を聞き取り、「私たちが復興の担い手であり次の社会をつくる人材であること」「NZでは地域のエコリーダーは子どもたちであり、校内ではゴミが出ないのが当たり前であること」に衝撃を受けた。これが契機となり、以下の生徒会の活動につながる。

### ■ 生徒会活動と地域での活動

ESD実践ガイドを活用し教科学習等や生徒会活動をESDの視点で捉えなおした。生徒会ではFF制度（光熱水費削減分還元制度）の運営に参画し、現状の課題と生活目標を連動させ、PTAや地域住民と連携し学校生活や家庭でのエネルギー削減を実現した。また、保護者、地域参加型の講演会を開催しESDで取り組む地域活動を振り返った。



## ▶ Outcome 成果と課題



リサーチワークは中学校における従来の学習スタイルを変えるものであった。これにより、生徒は自分の考えを伝えるために必要な客観的なデータ(根拠)を持つことの大切さを認識した。グローバル人材の育成の必要性を学校・保護者・地域住民が共有した。協働学習を継続するための国内外ネットワークの土台づくりができた。豊中市のASPnet校の役割として、本校のESDの視点で捉える協働学習の成果を全校に発信し実践校を増やし、国内外協働学習ネットワークの拡充を図る。教育課程内での継続的な取組みを定着するために時間を確保する。

## ▶ Transformation

実践による変化

従前から取り組んでいるエコ活動やクリーンアップ活動が世界につながっていくことを実感し広い視野を持てるようになった。他国の人と協力した主体的な活動が広がってきた。被災した気仙沼市や他国の学校では、劣悪な環境で学習していることを知り、生徒会が中心となり、義援金活動を始める等、生徒たちが自発的に環境問題や学校生活に関心を向けるようになった。生徒会の取組みを発信することで、地域・保護者の意識も変わり、国際的な課題へも目を向けるようになった。

学校名：豊中市立第二中学校(だいにちゅうがっこう)

校長名：田中 敬三(たなか けいぞう)

生徒数：481名

住所：〒560-0056 大阪府豊中市宮山町2-1-1

電話：06-6843-5288

対象学年：全学年 生徒会

教科・領域：英語科 理科 特別活動 総合的な学習の時間

連携校・団体：とよなかASPネットワーク連絡会

豊中市教育委員会事務局 豊中市国際教育推進協議会

ESD実践ガイド実務担当者会

フレンドシップスクール提携校(米国・ニュージーランド・気仙沼市)

豊中市役所環境部環境政策室

大阪大学国際教育交流センター



ESDは、学校教育がめざす「生きる力」の育成の要。シンクグローバリー、アクトローカリーの精神(地球上の諸課題を生徒・教職員・PTA・地域等が共有し、身近な問題と一体化した取組みを広げること)。教育課程をESDでリセット。次世代の担い手として持続可能な社会をめざす教育活動。

# 「ホールスクールアプローチ」で取り組む ESDの実践

関係性・当事者性・未来志向性をキーワードに

平和

【キーワード】

ホールスクールアプローチ 協働 関係性 当事者性  
未来志向 対話



本校では、これまでの教育実践がESDの理念に合致しているとの認識のもと、2006年度より「ホールスクールアプローチ<sup>\*</sup>」によるESDの実践研究に取り組んできた。教科・領域の関連性を意識した「ESDカレンダー」をもとに、つながりのある学習を通して生徒の当事者意識を育て、未来を担う主体者としての自覚を持たせることがねらいである。そうした学習の中から、キーワードである平和にかかわる取り組みについて述べる。

<sup>\*</sup>…学校全体として取り組み、それを継続的に深めていく手法。



## ■ 平和の集い

生徒の主体的活動の中に27年前に生徒会の発案で始まった「平和の集い」がある。以来その意思を受け継ぎ、生徒自らが課題を設定し、学習を進めている。例えば、アンネのバラを初めて日本にもたらした牧師とまわりの人間の生き方に触れ人間の尊さを考えたことが、東日本大震災の支援活動や交流へと発展した。学級での調査や討議を経て、集いでは、多面的に事象をとらえる。上級生の意見が下級生の思考を深め、下級生の素朴な意見や情感に上級生が考えさせられたりと、対話により自己の考えが深まり、新たな知見が創りだされる。今年度はESDの新たな10年の始まりのための「平和宣言」を作成する活動に取り組んでいる。

## ■ 韓国との交流学習

平和の学びの延長に「韓国との交流学習」がある。3年前から始まったこの取り組みは、韓国人来訪者の世話をされている方や在日の方、留学生などの支援で成立している。本年度訪韓する生徒は事前学習で「国と国とのつながりは人と人との意識で変えることができます」と述べ、昨今の日韓関係の中での自己の役割を考えるようになっている。



## ▶ Outcome 成果と課題

「平和の集い」の取り組みは、教科で得られた知識を活用し、そこから生まれた疑問や課題意識を自ら調べ、仲間と話し合い、他者の考えや生き方に触れることを通して、知見を広め他者とともに行動しようとする意欲を高める。さらに、実践したことを次の学習につなげ、次の学年に引き継いでいく役割を担っている。生徒は一つの学習がさまざまな学習へと発展することに喜びを感じ、また学習を通して自己の変容が実感できるようになった。今後はこれまでの成果を生かし、地域の課題を掘りさげ、地域の方とともに行動する学びへと拡大させていきたい。

## ▶ Transformation 実践による変化

まず、「協働」の重要性を生徒・教師ともに認識した。ESDがもつめる「つながり」は、教科・領域という学習内容だけでなく、学習方法を教師がともに開発実践し、学習の場での教師と生徒、生徒相互の協働を意味している。実践例の「平和の集い」は、各教科の学びをつなぎ、生徒の意見をつなぎ、学校だけでなく、さまざまな関係機関をつなぐ学びを成立させている。さらに、学んだことを韓国理解学習に生かし、日韓関係を国家間の問題から人間理解へと考える態度が形成されてきている。

学校名：奈良教育大学附属中学校  
 (ならきょういくだいがくふぞくちゅうがっこう)  
 校長名：松川 利広(まつかわ としひろ)  
 生徒数：485名  
 住 所：〒630-8113 奈良県奈良市法蓮町2058-2  
 電 話：0742-26-1410  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：全領域  
 連携校・団体：奈良 ASP ネットワーク  
 気仙沼市内の小学校1校・中学校2校  
 韓国公州大校教師範大学附設中学校



ESDとは、従来の学校教育における授業内容や方法の転換を図ることを通して、学校と社会のあり方や、教師のあり方を問い直すものである。

# ふるさとに夢と誇りを持とう！

## Think Globally, Act Locally！

総合

【キーワード】

環境保護 福祉貢献 被災地支援 ふるさと学習  
国際交流

### ▶ Goal ねらい



名勝月ヶ瀬梅溪にかかわる歴史・文化・伝統を身近に感じる本校は、地域とのつながりも深い。故郷を誇りに前向きに生きる生徒、未来につなぐ生徒を育てるESDを目指す。

### ▶ Activity 実践内容



#### ■ アルミ缶回収活動

生徒会の「アルミ缶で車いすを！」を合言葉に地域ボランティア、生徒会、家庭、学校がアルミ缶回収に取り組んだ活動は19年目を迎え、これまで車椅子106台を寄贈できている。1年生はリサイクル工場を見学した。昨年度は校医の先生が南三陸町で活動されていることから、志津川病院へ車椅子を寄贈した。

#### ■ 友愛訪問

生徒会主催で19年間続く活動。事前学習として福祉センターの方にボランティアの心得を学ぶ。一人暮らしのお年寄りを訪ね、手伝いしたり、会話したりする。訪問前後には暑中見舞いや年賀状などを送り交流を続ける。

#### ■ ふるさと学習プログラム

ふるさとの良さを体感し誇りを育てる学習。「ふるさとWALK」では地域ガイドに校区を案内してもらい、見どころや良さをフォトストーリーにまとめ「宝物コンテスト」に応募。また保育園・小学生と共に梅とり作業を実施、地産地消の梅干しや梅シロップづくりを進める。梅干は商品化し販売する。もう一つ主要地域産業の茶に関しては、「闘茶会」「煎茶道」という伝統文化体験を



通して、もてなす心や礼儀を習得する。また、月ヶ瀬の烏梅うばいを使った「紅花染」学区ブランド商品をつくり「世界遺産学習全国サミット」で展示・販売を行った。

#### ■ 国際理解・交流

長年、ベルギー訪問団との交流や国際連合大学の韓国教職員交流事業による交流会、ジェネシス生徒交流、慶州生徒の交流会を行った。また異文化理解交流教室を続けている。

## ▶ Outcome 成果と課題

←

O  
Outcome

地域と共に地球環境保護、伝統文化継承、福祉、ボランティア活動を行った。生徒が目や輝かせて郷土の美しさや歴史の深さを語り、偉大な先人の生き方に触れ、郷土に誇りを持った。課題としては、今後、生徒が主体的に取り組む力や表現力を高めることである。

## ▶ Transformation

実践による変化

#### ■ 外国とつながる

本校では長年、地域の支援を受けていた活動を、ESDの視点でまとめ、再構築した。小規模へき地校である本校がユネスコスクールや外国とつながることで、*Think Globally, Act Locally!*が達成できる。また、韓国教職員交流などでのESD実践をしている仲間とつながり、いろいろな手法を学び元気や活力をいただいた。奈良のESD「自然とつながる 人とつながる ものとつながる 歴史とつながる 世界とつながる 未来へつなげる」で取り組みたい。

学校名：奈良市立月ヶ瀬中学校（つきがせちゅうがっこう）

校長名：井本 章子（いもと あきこ）

生徒数：35名

住所：〒630-2302 奈良県奈良市月ヶ瀬尾山2551

電話：0743-92-0020

対象学年：全学年

教科・領域：総合的な学習の時間 道徳 社会

連携校・団体：奈良ASPネットワーク



奈良は1300年、都の文化・伝統を守り受け継いでいる。この思いを大切に伝えていく、繋いでいく教育が大切と考える。「人とつながり、歴史とつながり、自然とつながり、ものとつながり世界とつながり、未来へつなげる」と、ことばを変えて子どもたちに教え、繋いでいきたい。

# 夢プロジェクト5か年の実践

ESD日米教員交流を生かして

総合

【キーワード】 夢タイム 夢きた祭り 夢ソング 夢太鼓 夢とも



## ■ 夢タイム

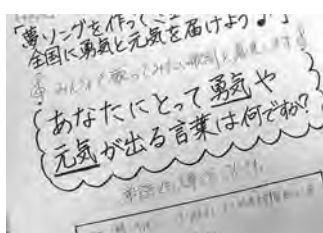
多様な人々とつながり社会性・関係性を学ぶことで、夢実現に向けて前進する生徒を育む。発信に向け表現力の向上を図る。

## ■ 夢きた祭り・夢太鼓

地域・社会貢献活動の充実を図る。

## ■ 夢ソング・夢とも

音楽のもつ無限の力を多くの学校と共有し、被災地支援に役立てる。



## ■ ESD日米教員交流を生かした実践

### ①課題解決型・探求型の総合・「夢タイム」

日米教育委員会の「ESD日米教員交流」に参加して学んだ「知識は行動を変える」を念頭に置き、「地域・社会貢献」をテーマにESDの概念に基づく教育活動を展開した。積極的に地域・社会に出て人びとの思いにふれ、祭りの復活や看板製作など環境改善に生徒自ら行動を起こした。

また、米国の多様な学校視察での多くのディスカッションが、授業改革に役立った。生徒の個性を育む大切さや、探求心・批判的思考力・判断力・表現力の向上を図る教師の指導・支援を学び、今後の実践にも生かされる。

### ②音楽プロジェクト・「夢ソング」

ESD日米教員交流の最大の魅力は、日米教員による学校間の継続したつながりにある。特に東日本大震災の被災地支援として生まれた「音楽プロジェクト」は、生徒自らが歌詞を考え、英語訳も行った。被災地支援に賛同した日米10校の学校の子どもたちが、被災地の人たちに少しでも元気になってもらいたいと願いながら同じ曲を歌い、ひとつの映像にまとめた（被災地の学校に郵送・Web配信）。音楽のもつ無限の力に生徒





も教員も感動を覚え、日米の教員交流のつながりが教育実践に生かされた。

## ▶ Outcome 成果と課題



全国学力・学習状況調査の意識調査に「将来の夢や目標をもっている」という質問では、本校生徒の「十分あてはまる」の回答状況は、平成26年度は78%を占め、平成23年度の45%と比べると33ポイント増加している。これは、社会とのかかわりに目を向け、自分がやりたいことは何なのか、地域社会が必要としていることは何なのかを探る夢プロジェクトの成果と考える。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 概念の定着とつながり

日米教育交流での講義が、カリキュラムを見直し、改善することに大いに役立った。ESDの概念にそった教育活動によって、生徒は、夢プロジェクト5年の経験を経て、様々なかかわりに気づき、夢実現に向けて前向きに挑戦するようになった。

教職員は、単年の行事から、持続発展的な行事へと意識が変わり、組織的・計画的な実効性のある教育活動へと改善できた。特に「音楽プロジェクト」は、日米教員交流によって広がった視野のたまものであり、地域の方から意義深いと支持が得られ、現在も継続している。

学校名：武雄市立武雄北中学校（たけおしりつたけおきたちゅうがっこう）  
 校長名：林 正昭（はやし まさあき）  
 生徒数：122名  
 住 所：〒849-2342 佐賀県武雄市武内町真手野25956-3  
 電 話：0954-27-2004  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間等  
 連携校・団体：日米ESD協力校 The Town School（米国）  
 嬉野市立大野原中学校 広島県立三次高等学校 筑波大学附属坂戸高等学校 千葉県立佐倉南高等学校 大阪府立成美高等学校 留寿都村立留寿都小学校 武雄市立若木小学校 武雄市立武内小学校 福岡県立城南高等学校  
 ユネスコスクールの交流校 大崎市立古川北中学校



「地球（アース）ing、夢の力の可能性」

未来は変えられる、夢の力で、夢をもち、夢に向かって前進するため、自ら考え、積極的に行動する力を身につける。また、地域・社会に貢献するために、問題解決や探究学習に創造的に取り組み、自らの生き方を探る。



---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

## 第4節

# 一貫校

---

# 科目「海外研究」を中心とした 一連の国際理解教育

「世界異文化学習会」「海外料理学習会」「海外研修」

国際

【キーワード】 多文化共生 国際理解 食育



国際理解教育を通して国際感覚を高め、自律心を養う。海外研修先であるカナダについて理解を深める。特に、カナダは多文化国家であるため、様々な文化への理解を深める。



「海外研究」は高校2年生の必修科目であり、カナダでの現地学習の他、年間様々な事前学習・事後学習を通じて、異文化理解教育に取り組んでいる。

## ■ 事前学習の内容

毎年、埼玉県国際交流協会から外国人講師を招いて講義や料理学習会を開催し、異文化理解を深め、多文化共生について学んでいる。今年度は世界9か国の講師にご来校いただき、それぞれの国について講義してもらった。また食物調理コース全生徒を対象に、「食を通した国際理解学習」を推進するため「海外料理学習会」を開催し、そこで習った料理を9月の文化祭の模擬店で販売し、地域と国際理解学習を進めている。過去、トルコ・タイ・マレーシア・ロシアなどの料理を学び、今年はワールドカップ開催にちなみ、ブラジル料理について学習した。





### ■ 現地学習の内容

「海外研修旅行」(1週間)と「語学研修旅行」(2週間)があり、ともに文部科学省の「教育改革推進モデル事業」に認定されている。海外研修旅行では二泊三日のホームステイの他、小学校や保育園・介護施設を訪問し、カナダの人々との交流を図る。語学研修旅行ではホームステイをしながら、バンクーバーアイランド大学で語学研修を受ける他、交流会に参加するなどの活動をする。

### ■ 事後学習の内容

事前学習・現地学習を振り返りレポートを作成する。また、代表生徒が下級生に対しパワーポイントを使ったプレゼンテーションを行い、海外研究について報告を行う。

## ▶ Outcome 成果と課題



必修科目という性質から、体系的に異文化理解を推進することができる点はこの科目の利点である。単発の行事で終わらせず、継続的学習の流れを作ることができる点は大きな成果である。一方で、事前学習や現地学習で、グループワークなどの協働学習の時間が不足しがちであり、一方的な講義形式になる傾向がある点を改善していきたい。

## ▶ Transformation

実践による変化

ユネスコスクールに加盟する前から「海外研修」を実施していたが、その活動と目標は本校の中で完結しており、海外の高校生と交流を行ってもそれが以後の学習に活かされることはなかった。ユネスコスクールへの加盟以降、「世界異文化学習会」では、埼玉県内の外国人に講義をしてもらうことにより、身近なところでも国際交流ができることに気づいた。加えて「海外料理学習会」では学んだ食事を本校文化祭において地域の方に食べてもらうことで、生徒の視点が海外だけでなく、地域住民との連携をいかに行うかという点にまで広がりつつあることを実感している。

学校名：国際学院中学校高等学校

(こくさいがくいんちゅうがっこうとうがっこう)

校長名：大野 博之(おおの ひろゆき) 生徒数：857名

住所：〒362-0806 埼玉県北足立郡伊奈町小室10474

電話：048-721-5931 対象学年：高校2年生

教科・領域：国際理解 食育

連携校・団体：Sekolah Sultan Alam Shah(マレーシア)

Sekolah Islam Fitrah Al Fikri(インドネシア) 国立鳳山高級

中学(台湾) 国立豊原高級中学(台湾) 私立僑泰高級中学(台湾)



本校に入学する生徒は、自分の能力や将来に不安を持つ者が多い。ESDは、一人ひとりが国際交流や環境学習を通して将来をよりよく変えられる貴重な人材であることを実感させられる教育であると考えている。

# 海外研修国際ボランティアコース(バンコクコース)

今私たちにできること

国際

【キーワード】 国際協力 貧困層自立支援 異文化理解

## ▶ Goal ねらい



NPO法人ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパンに協力を依頼し、貧困層自立支援のための海外建築ボランティアを实践する。「建築」とはいうものの、この活動で最も大切なことは、「家を建てること」そのものではなく、「高校生にできる国際協力を实践する」というところにある。この研修では海外の人たちの暮らしを肌で感じ、そこに住む人びとが本当に必要としていることは何なのか、そのために自分たちができることは何かを考え、实践することを目的とする。また、帰国後はそこで得た体験を自分たちの実生活と関連づけさせ、今後どう生かしていくのかを考えさせる。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 研修地はバンコク

高3の夏休みに実施される「国際ボランティアコース」の研修地はタイのバンコク、期間は10日間ですべてホテルステイ。参加生徒は25名程度。4月から4か月間に、土曜講座として事前学習を設けた。現地が必要となる情報や前もって考えておきたいことなどを学習した。家の建築は柱と屋根しかない状態から始めた。現地のスタッフの協力を得ながら、6日間で土台基礎・床・壁において素人でできるところまで建築を進めた。毎夕食後にミーティングも行い、情報共有とともに「本当に必要な支援とは何か」「自分たちが今築いているものは何なのか」「言葉の壁をどう乗り越えるか」などを話し合いながら日々の作業に取り組んだ。





## ▶ Outcome 成果と課題



大きなけがや事故・病気もなく、参加者全員で最終日を迎えられたことは、「大成功」と評価してよい。そして何より、目の前にある課題に真摯に向き合う姿は、普段の学生生活のなかでは得られないものとなった。事後学習では、学びを表現・発信する手段として「JICAグローバル教育コンクール」への出品を課題とした。結果、写真・映像部門で佳作と団体奨励賞、また教員が出品したレポート部門で入選を受賞した。また、第4回ESD大賞では高等学校賞を受賞した。今後は生徒が社会に出てからこのような経験をどのように生かしていくのか、またどういった機会にこの成果を広く発信していくことができるのかということが課題となっている。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 他者と向き合い、自分と向き合う

生徒は国際協力をすることに身構えなくなったと同時に、その難しさを実感できるようになったと感じる。国際協力は初めから大きなことを成し遂げようとするのではなく、目の前の困っている人を助けようということから始まる。さらに言えば、「助けたい」「何かの役に立ちたい」と思う、その気持ちをもった瞬間から始まる。しかし一方で、言葉の壁や文化の違い、国を取り巻く環境の違いから、その思いを成し遂げることは容易ではない。己の「可能性」と「無力さ」を知ったという点において、大きく変化したと考える。

学校名：立命館守山中学校・高等学校

(りつめいかんもりやまちゅうがっこうこうとうがっこう)

校長名：亀井 且有(かめい かつあり) 生徒数：1,362名

住所：〒524-8577 滋賀県守山市三宅町250番地

電話：077-582-8000

対象学年：平成25年度まで高校3年生 26年度から高校2年生

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：特定非営利活動法人ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン NPO法人日本タイ教育交流協会



ESD実践にあたって大切にしていること

「過去から学び、今日のために生き、未来に対して希望を持つ。大切なことは、何も疑問を持たない状況に陥らないことである」というアインシュタインのことば。

# グローバルキャリア人育成を目指した ESDの推進

国際 【キーワード】 教科教育におけるESD授業開発 グローバル人材の育成  
課題研究 大学・地域との連携 国際交流活動  
英語コミュニケーション能力の向上



本校は、「グローバルキャリア人 (= 国際的視野を持ち未来を切り拓く人材) の育成」を教育目標に掲げ中高一貫教育を推進している。ESDプロジェクトでは、右記の実践内容に取り組むことで、ESDの「固有の価値」に対する理解や各種能力・態度を総合的に育成しようと考えている。



## ■ 大学との統一的プログラム

神戸大学との一体運営による統一的プログラム「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発に向け、「総合的な学習の時間」における課題研究をESDの観点から構成している。

具体的には、1・2年次の「入門期」では協同学習、言語技術訓練を行い、3・4年次の「充実期」に課題学習を合科的な「対話表現」「地球市民」「理数探究」「生活環境」に編成し、グローバルの観点を意識しながら「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」の充実を図っている。また、5・6年次の「発展期」には、「地球の安全保障」「国際ネットワーク」「異文化コミュニケーション」「グローバルサイエンス」等を領域として卒業研究に取り組ませている。

国際協力事業関係者や国際問題についての専門家による「グローバルリーダーセミナー」を実施し、JICA 研修員や留学生との交流や、修学旅行を含む海外研修旅行への参加を通してグローバルな視点の涵養及びリーダーの育成に取り組んでいる。

また、平成26年度より「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」に3年生が参加し、





海外の学校とインターネットを通してESDをテーマとした協働学習を行い、学習成果として1枚の巨大壁画を制作している。

さらに、防災への意識を高める取組として、生徒独自の企画による防災訓練の実施なども行っている。



大学等が主催する「模擬安保理大会」「オックスブリッジ」などのプログラムに参加し、研究者や他校生たちと交流することを通して、国際的な問題をより自分の課題として認識し、その解決に向けて前向きに考えようとする姿勢が養われている。今後もより質の高いテーマを扱い、自ら発信する国際交流体験をどのように提供するか、生徒の研究を支援する校外組織を含めた指導体制の整備、学習成果を発表する機会と場を設定していくことが必要である。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 生の体験を聞き、意見を交換する

実施している様々な取組を通して、生徒、教員、地域のつながりがより強まったと感じる。地球規模の課題解決に対し、草の根的に取り組んでいる人たち（民間人や専門家）の生の体験を聞き、直接意見を交換することによって、それらの課題をより身近に感じ、自らの課題として関心を高め、地球市民の一人としてその解決に向けて努力していきたいという意識が高まっている。

学校名：神戸大学附属中等教育学校  
(こうべだいがくふぞくちゅうとうきょういっくがっこう)

校長名：船寄 俊雄 (ふなき としお)

生徒数：782人

住所：〒658-0063 兵庫県神戸市東灘区住吉山手5-11-1

電話：078-811-0232

対象学年：全学年

教科・領域：学校教育活動全体

連携校・団体：神戸大学 東京学芸大学附属国際中等教育学校  
名古屋大学教育学部附属中・高等学校 兵庫県国際交流協会  
神戸大学ブリュッセルオフィス (ベルギー)  
Alley's School Cirencester Deer Park School (以上、英国)  
Iganga High School (ウガンダ) 神戸市シアトル事務所  
International Community School (以上、米国)  
Cleveland District State High School (豪州) Kilakala Secondary School (タンザニア)  
南榮中学校 (台湾) Preparatoria Lomas del Valle UAG (メキシコ)



我が校にとってのESDとは、現代社会における地球規模の課題に対する知識を深め、それらの課題を自らのものとして身近なところから取り組むことにより、それらの課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出すことができる人材を育成する教育である。

# 施設一体型小中一貫校におけるESD

9年間で見出す持続可能な社会への道

総合

【キーワード】 小中一貫 世界遺産学習 多文化共生 キャリア教育

## ▶ Goal ねらい



施設一体型小中一貫校としての学習の中で、自分たちの住む地域や「なら」を見つめ、他の地域や異文化と比較することを通して、持続可能な社会を作るための人・もの・こととの関わり方や、自分の生き方を考える。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 家族から、地域、海外のつながり

地域にあるものを、広い視点で比較して考えることを大切にし、そこに見えてくる「他者とのつながり」「社会とのつながり」を意識しながら学習を進めている。

総合的な学習の時間「なら」の前期では、一番身近な社会である「家族」から始め、生活に根づいている文化や自然を通して地域に学び、人との関係を大切にしながら自分の社会を広げていく。また、奈良県立奈良西養護学校との交流を通して人権の視点からも学ぶ。中期では、地域の社寺や世界遺産である古都奈良の文化財を教材とし、それらが受け継がれてきた意味、そして、未来の「なら」へ自分たちがどう関わっていくのかを考える。後期では、京都や沖縄、海外の文化と「なら」を比較し、持続可能な社会にどう関わっていくかという視点を大切にしながら進路選択へとつないでいく。

また本校は、オーストラリアのハリソンスクールと交流しており、ハリソンスクールの生徒や教員が来校する時には、全学年で実施している英会話科と連携し、児童生徒、教員が様々な取組を行い交流している。



## ▶ Outcome 成果と課題



地域を出発として9年間の系統あるカリキュラムを考えることで、最終的に目指すべき児童生徒の姿を職員が共通理解でき、ぶれない学習を展開できた。

ただ、本校は小中一貫校となりまだ4年目であるので、1年生が9年生になった時に本当の成果がわかると考える。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 国際理解を目指す

児童生徒においては、自然環境や伝統文化の良さを維持し守り継いでいくことへの意識は高まっていると感じる。また、進路選択においては、英語科のある学校へ進学する希望者が多く、異文化を認める姿勢が身についた。平成25年度の全国調査では、「外国人への関心」のアンケート項目でも、肯定的回答が全国平均を10ポイント以上も上回った。

地域においても、ハリソンスクールからのホームステイを受け入れたりするなど、この活動を通して、地域の人々と学校とがより深く連携でき国際理解にもつながった。

学校名：奈良市立富雄第三小中学校（とみおだいさんしょうちゅうがっこう）

校長名：吉田 義和（よしだ よしかず）

生徒数：662名

住 所：〒631-0064 奈良県奈良市帝塚山南二丁目11-1

電 話：0742-43-9568

対象学年：全学年

教科・領域：生活科 総合的な学習の時間 英会話科

連携校・団体：奈良教育大学 奈良ASPネットワーク

ハリソンスクール（豪／教員・児童生徒の相互訪問、歌・作品の交流） 奈良県立奈良西養護学校



自己と社会、自己と他者との関係性に気づき、地域社会の一員として、より良い「つながり」、より良い「生き方」を模索することがESDと考える。

# 『女性への抑圧』について学ぼう

(人権教育)

人権・ジェンダー 【キーワード】 女性 格差 貧困



世界各地で「人工的な性差」によって女性が活躍する機会が奪われていることを知る。さまざまな原因や社会状況の中で貧困状態に置かれてしまう人びとがいることを知る。



## ■ 女性の社会的環境を考える

班に分かれて、4枚のカード（インド、パキスタン、日本、ブルキナファソ）をそれぞれの基準によりグルーピングする（例：子どもが学校に行ける／行けない／将来的に豊かになる可能性がある／可能性が少ない、など）。世界地図でインドの場所を確認し、ポスターを見て少女の置かれた環境を考える。ポスターは「公益財団法人プラン・ジャパン」より引用。その後、「インドの女の子の話」を読み、各班で気になった箇所を話し合う。インドの女の子の暮らしをよりよくするためにはどんな点を改善する必要があるのか考える。話し合い後に感想を書き、まとめを共有する。





## ▶ Outcome 成果と課題



「女性の社会的地位が低いのは法律が整備されていないからではなく、人々の認識や社会的な伝統や風習によるものだと分かった。」「女性が差別を受ける。それだけで生まれてくる子供にも将来影響を与え続ける。なぜだろう。」などの感想があった。女子校の生徒ではあっても、日常的生活と、世界で女性が置かれている現状との乖離を具体的に理解する機会は少ない。今回の実践事例のような具体的な個々の事例をもとに、幅広くさまざまなテーマを扱うことによって、生徒自身の問題として考えるように、指導を工夫する必要があると考える。

学校名：清心中学校・清心女子高等学校  
 (せいしんちゅうがっこう・せいしんじょしこうとうがっこう)  
 校長名：小谷 恭子 (こたに きょうこ)  
 生徒数：728名  
 住 所：〒701-0195 岡山県倉敷市二子1200  
 電 話：086-462-1661  
 対象学年：高校1年生  
 教科・領域：ロングホームルーム  
 連携校・団体：ユネスコスクール世界大会高校生フォーラム  
 ASPnet 参加校

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 世界とのつながりを実感

岡山市で開催される「ユネスコスクール世界大会高校生フォーラム」には、本校も岡山県のユネスコスクールの一員として多くの高校生が運営スタッフとして参加する。世界33か国の生徒が集まる国際的なイベントに接することで、世界とのつながりが実感できるものと期待している。校内での活動としては、「生命科学コース」によるビオトープの整備や自然観察、絶滅危惧種の保存などを通して環境問題について学習を深めている。一方グローバル教育では、オランダの学校とのスカイプ会議によって「洪水による災害問題、水資源の問題」などを英語によって議論してきた。このような活動が、生徒にとって改めて「地球規模の問題」であることを認識させる機会となっている。



カトリック系ミッションスクールである本校は「こころを清くし、愛の人であれ」を校訓とする。平和な国際社会の構築に寄与する人材の育成はもちろん、人権問題や女性問題に対する意識の高揚も重要な教育である。環境学習なども含め、日常的な教育活動そのものがすべてESDの本質に基づくものであると考える。



---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

## 第5節

# 高等学校

---

## 「デジタル絵本によるポートランドとの交流」と 「私のまちのたからものコンテストの取り組み」

国際

【キーワード】

日本語学習教材 電子書籍 ユネスコ未来遺産運動  
私のまちのたからものコンテスト

### ▶ Goal ねらい



- ①日本語学習教材として、iPad で日本の昔話などを題材としたデジタル絵本を制作。札幌の姉妹都市であるポートランド市の子どもたちと交流し、国際理解教育を行う。
- ②日本ユネスコ協会連盟の「私のまちのたからものコンテスト」で、小樽祝津地区で開催された食育イベント取材し、スライドショーの作品として紹介する他、電子書籍の写真集として出版し、ユネスコ未来遺産運動として、情報発信を行う。



### ▶ Activity 実践内容



#### ■ 国際交流とデジタル教材の製作

①日本語を学習するポートランド市の幼稚園から高校のリクエストで、25冊の日本語の絵本と動画教材を、電子書籍とデジタル教材にして、本校のインターネットで利用できるようにした。

夏期研修で本校に来た高校生に、絵本を紹介した他、スカイプを利用して、ポートランドの高校生たちにもデジタル絵本と教材を紹介し、交流を行った。

②ニシン番屋で行われた食育のイベント取材して、電子書籍にまとめ、札幌ユネスコ協会の「私のまちのたからもの絵画展」で発表した。また、ポートランド市の日本語学習教材として制作した「デジタル絵本」の読み聞かせを行った。

③札幌市中央図書館のコンテンツとして、電子書籍「デジタル絵本」を提供し、デジタル絵本の読み聞かせを市内の小中学校で行った。





- ①姉妹都市ポートランド市のグラント高校と国際交流を行った。
- ②2冊のデジタル絵本を無料出版した他、札幌市中央図書館の電子図書館に5冊のデジタル絵本を提供した。市内の小学校でデジタル絵本の読み聞かせを行った。
- ③日本ユネスコ協会連盟のコンテストで、「ニシンの街に受け継がれてきたもの」が協会連盟賞を受賞。写真集『私のまちのたからもの 小樽祝津週末食育番屋』をアマゾンより出版した。

## ▶ Transformation

実践による変化

**■ 国際理解、異文化理解に役立つ**

デジタル絵本を制作する際に一番苦勞した点は、英訳文の作成であったが、実際にポートランドの生徒たちに理解でき、教材として活用してもらうことができた。

また、ニシン番屋での食育イベントは、北海道開拓時代の海産物中心の日本人の食文化、和食の魅力を紹介することができたと思う。

学校名：北海道札幌平岸高等学校（さっぽろひらぎしこうとうがっこう）  
 校長名：井田 圭介（いだ けいすけ）  
 生徒数：955名  
 住 所：〒062-0935 北海道札幌市豊平区平岸5条18丁目1-2  
 電 話：011-812-2010  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：美術「映像メディア表現」  
 情報「情報メディアデザイン」  
 連携校・団体：市立札幌大通高等学校  
 ユネスコ寺子屋プロジェクト 日本ユネスコ協会連盟  
 札幌ユネスコ協会



本校は生徒の人間性と個性を育成し、その先の価値観や行動に変容をもたらすことを目標としています。ESDは、これを達成するための生徒の探求と実践の機会を十分に確保し、質の高い教育を提供するものです。

# 世界自然遺産・知床等、 地域をフィールドとしたESD活動

伝統・地域

【キーワード】

世界自然遺産・知床 知床自然体験学習 史跡発掘体験学習  
学校設定科目「知床自然概論」  
地域の教育資源（知床博物館・知床自然センター等）の活用

## ▶ Goal ねらい



「世界自然遺産・知床」等、地域の豊かな自然環境をフィールドとして、自然環境の保全や野生動物との共存をテーマとする体験的な学習活動を、地域の教育力の活用によって展開し、生徒に、地域の自然環境の素晴らしさやそれを持続する必要性（責任）や方策を理解させ、将来にわたって地域に貢献できる意志とスキルを持つ人材を育成する。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 実践に至る経緯

斜里町は、「世界自然遺産・知床」を擁する自然環境に恵まれた土地である。また、知床博物館や知床自然センター・知床五湖フィールドハウスのほか、環境省や林野庁の施設もあり、体験学習実施にかかわる施設や講師の確保が容易で、地域の自然環境をよりよい形で未来に引き継ぐための学習環境が充実している。

学校設定科目「知床自然概論」や特別活動「知床自然体験学習」など、地域の豊かな自然環境、特に知床をフィールドとした体験学習を、ESD活動の中心として、平成23年、本校のユネスコスクールへの加盟が承認された。

### ■ 実践のポイント

地域をフィールドとして、ESD活動に位置づけた環境学習のプログラムを展開した。自然環境の保全・野生動物との共存をテーマに体験的な学習として、1年次では特別活動である「知床自然体験学習」「史跡発掘体験学習」を実施、2・3年次では自由選択科目である「知床自然概論」を実施した。知床博物館や知床自然センター・知床五湖フィールドハウスの地域の教育施設や人材を活用した。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

「世界自然遺産・知床」に暮らす人間として必要な、地域の自然にかかわる生徒の理解を促進できた。自然との共生にかかわる責任と行動の拠り所となる見識を生徒に育成できた。地域の自然の魅力伝える態度とスキルを生徒に育成した。

### ■ 課題

町内小中学校と連携し、地域理解教育の一貫性を確保すること。他のユネスコスクールとの情報交換・交流を実施し活動内容の改善・充実を図る。与えられる学習から、自ら学ぶ学習へ移行する指導方法の改善を図る。

学校名：北海道斜里高等学校（しゃりこうとうがっこう）

校長名：狩野 康弘（かのう やすひろ）

生徒数：224名

住 所：〒099-4116 北海道斜里郡斜里町文光町5番地1

電 話：0152-23-2145

対象学年：全学年

教科・領域：教科 特別活動 等

連携校・団体：北海道清里高等学校 北海道羅臼高等学校  
北海道標津高等学校

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 生徒

活動を通して、生徒は、地域の自然の価値を認識し、世界自然遺産を擁する地域に暮らす人間として、自然環境の保全・共生にかかわる責任と行動を理解するとともに、その魅力を伝える態度・スキルを身につけることができた。

### ■ 教員

地域を理解する学習活動として、この教育活動が本校では重要度が高いことを認識し、前年踏襲に陥ることなく、取り組みの改善・充実を図るなど、実践を通して、改善への意識・態度が醸成できた。

### ■ 地域との関係

本校の教育活動が、地域が推進する世界自然遺産の保護・保全活動の将来の担い手育成と方向性を同じくすることから、地域から学校への理解が深まるとともに、その期待に応えるため、本校でも活動の充実を図った。



ESDは、グローバルな視点をもって地域の自然環境の価値を理解するとともに、その持続のために地域で活動し、貢献できる人材の育成を目指す教育活動。

# 国際姉妹校とともに取り組む 環境活動

総合

【キーワード】 異文化理解 国際協力 環境を守る活動

## ▶ Goal ねらい



### ■ 環境問題の取り組み

世界18の国・地域の21校の姉妹校とともに、それぞれの地域から地球規模の環境問題を共通理解し、共同行動を生徒が自ら考え実行することで、国際社会を生きる人間としての資質を育てること。特にエネルギー資源との関連で理解を深めること。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ エネルギー資源・温暖化問題

エネルギー資源・温暖化問題に関して、大学教員・研究者の講演会を実施する。

平成26年度は東北大学大学院環境科学研究科村田准教授、岩手大学農学部伊藤准教授、産業総合技術研究所浅沼主任研究員を講師として招へいする計画。

毎年8月に、海外姉妹校の生徒・教員を招待し、盛岡においてCHUO国際教育フォーラムを実施する。各国における環境問題と解決の取り組みを発表し、本校を含め世界22校が共通に取り組む行動を提言する。平成25年度(第15回)では水質汚染、森林資源、食料・ゴミ問題、地球温暖化について、それぞれの国・地域の実情に応じた行動提言がなされた。





## ▶ Outcome 成果と課題



環境問題に関する知識理解は、講演をとおして確実に向上している。また、姉妹校の生徒が、本校の授業に参加し、本校生徒の家庭でホームステイすることで、異文化理解が深まり、コミュニケーション能力が向上している。今後の課題として、イベント後も継続して情報交換をし、共同行動をより活発化していく方策を研究している。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 国際教育と環境問題

国際理解に関しては、20年余におよぶ交流活動の積み重ねにより、海外体験や、国際姉妹校生徒との交流にほとんどの生徒が積極的に取り組めるようになってきている。環境問題に関しては、生徒が主体となって省エネルギー標語の取り組み・呼びかけを実施しており、持続的な発展は一人ひとりの行動にかかっているという意識が定着しつつあると感じている。

学校名：盛岡中央高等学校（もりおかちゅうおうこうとうがっこう）

校長名：富澤 正一（とみさわ まさいち）

生徒数：1,084名

住 所：〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ4-26-1

電 話：019-641-0458

対象学年：全学年

教科・領域：国際理解 環境教育

連携校・団体：デイビッドソン・ハイスクール（豪州）、ブイ・ティ・シャーン・ハイスクール（ベトナム）、復旦大学附属中学、長治市第二中学（以上、中国）、テイラーズ・インターナショナルスクール（マレーシア）、昌文女子高等学校（韓国）、オツモエタイ・カレッジ（NZ）、バンコク・クリスチャン・カレッジ（タイ）、コレージュ・サンタンヌ・ド・ラシーヌ高等学校（マウント・ダグラス高等学校（以上、カナダ）、SMAドウィワナ高等学校（インドネシア）、国立経済サービス大学附属高等学校〔才能を持つ子どもの学校〕（ロシア）、強恕中学、長榮高級中学（以上、台湾）、ブランシュ・ド・カステイユ（フランス）、ザ・マスターズスクール（米国）、クール・セイント・マリー・ド・ハン高等学校（セネガル）、コレジオ・ワード高等学校（アルゼンチン）、ラヤマキ中学・高校（フィンランド）、聖ウルスラ中学・高校（ベルギー）、ハンデルスギムナジウム高校（ノルウェー）



我が校にとってESDとは、本校教育が目指す、進んで未来を創造する人間、常に理想の実現に向けた努力を怠らない人間の育成に欠かすことのできないものである。

# 地域連携による環境教育の取り組み

国際理解教育の実践を土台として

環境

【キーワード】 エコロジカル ビジネス 変革

## ▶ Goal ねらい



地域の企業やNPOなどと連携しながら、エコロジカル(生態系保全)とビジネス(商業・経済活動)を両立させた持続可能な社会の在り方を研究し、そのような社会を実現するために身近にできることを実践している。こうした活動を通して、生徒たちが個人および社会全体の生活様式の変革を志すようになることが期待される。



## ▶ Activity 実践内容



総合的な学習の時間における校内組織の一つであるエコロジカルビジネス班の生徒を対象に、多様な環境教育の取り組みを実践している。

もみ殻から作ったボードを販売する企業や廃タイヤからマットを再生し販売する企業と連携した活動をはじめとして、あきた地球環境会議と連携した県内リサイクル製品業者についての広報、「うちエコ診断」「エコすごろく」の作成に取り組んでいる。

さらに、秋田県の「環境の達人」地域派遣事業による環境講座の年数回の受講、秋田ユネスコ協会が呼びかける募金活動への参加や高校生対象のセミナーでの発表、秋田パドラーズ主催の河川敷クリーンアップへの参加、秋田杉の廃材からリサイクル箸を作成する方法を小学生に教える講座に至るまで、その活動は多岐にわたる。

5月から11月まで週に1～2時間、所属生徒が学年を超えて集い、こうした活動と一緒にしている。授業時間内に地域の人々が教室を訪れたり、休日に学校外で活動したりすることも多い。数年前には生徒を海外(ウガンダ、ネパール)に派遣し、現地の環境問題について見聞させたこともある。



## ▶ Outcome 成果と課題



エコロジカルビジネス班の実践は、その前身である「ユネスコスクール班」の活動を土台としている。同班はこれまで、『ユネスコスクールによるESDの実践—教育の新たな可能性を探る』（アルテ、2013年）のほか、国際協力、国際連合、アフリカ理解、地球環境問題に関する4冊の本を編集・出版してきた。こうした活動は全国への情報発信にはなったものの、現在のところ校内では広がりや欠いているため、ESDの意義も含めて、この班の取り組みを全校生徒・教員にいかに関知し、理解を深めてもらうかが課題となっている。

## ▶ Transformation

実践による変化

生徒たちは、環境保護とビジネス（商業）を両立させようとする地域の人々の熱意と奮闘を目の当たりにし、それらを両立させることの難しさ、環境保護になり、かつ利益も出るような商品の開発の難しさを知った。自分たちにどのような製品が開発できるだろうかと試行錯誤を重ねるうちに、生徒たちの思考力が鍛えられ、ビジネス感覚が磨かれたように思われる。また、企業やNPOなどに所属する大勢の大人たちとのかかわりを通して、ビジネスにおける礼儀やマナーも自然に身につけることになった。

学校名：秋田市立秋田商業高等学校  
（あきたしょうぎょうこうとうがっこう）

校長名：鎌田 勝（かまだ まさる） 生徒数：718名

住 所：〒010-1603 秋田県秋田市新屋勝平台1-1

電 話：018-823-4308

対象学年：2～3年生 教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：大仙市立大曲南中学校

一般社団法人あきた地球環境会議

秋田県「環境の達人」地域派遣事業環境講座

秋田ユネスコ協会 NPO 法人秋田パドラーズ

エイズ・内戦による孤児保護施設（ウガンダ）

現地小・中学校・児童保護施設（ネパール）



ESDは、生徒にも教員にも、新しいことに挑戦するきっかけを与えてくれた。ESDがなければ、地球規模課題への取り組みも、地域の人々との幅広い交流も、小・中学生に教える活動も行われることはなかった。

# 千葉県の連携と発信力強化

伝統・地域 【キーワード】 連携 つながり 他者理解 自己理解



- ①持続可能な「社会を変える行動（活動）」をしている高校、及び高校生を増やし、将来的なグローバル人材の育成につなげる。
- ②ESD地域モデルの一つとして、他県とは異なる千葉県独自の実践を創る。
- ③各学校での取り組みが中心となるが、拠点を作ることで、他校と定期的に情報共有、学び合いや協同作業ができる仕組みを構築する。ASPnetのnet（つながり）を実践したい。
- ④教員異動があっても続けられる、生徒主体の持続的な体制を各校で構築する。



## ■ 連携で実践体制を

千葉県のユネスコスクールの実践の大きな強みは「連携」である。2013年8月に全高等学校加盟校10校にて連絡協議会を発足しESDの実践体制を構築している。

現在は特に、ユネスコスクール世界大会にかかる各県での海外生徒受け入れについて、千葉県でも生徒主体のウェルカムパーティーを企画準備している。日本の文化や良いところを海外の生徒に体験してもらうため、生徒のアイデアや言葉からテーマを「お祭り」として、ソーラン節や屋台、着物体験やクイズなどでもてなす予定で話し合っている。







## ▶ Outcome 成果と課題



今年11月のユネスコスクール世界大会以後の活動を、以下のとおりの流れで10校の生徒たちが話し合っている。

- ①学び合い（他者理解&自己理解）の共通認識をする。
- ②自分たちが体験した社会の「問題」を共有、自分たちの「課題」に落とし込む。「異なるものとの出会いと気づき」「このままでは今後の社会はなるのか?」
- ③課題に対して様々な視点を出し合う。「様々な人の立場を想像し、今後向かうべきストーリーとは?」
- ④行動・活動へ「変化を起こすために何ができるか?」

## ▶ Transformation

実践による変化

ユネスコスクール加盟校は歩みだして短い時間ではあるが、他校から積極的に学ぶ姿勢や自校の取り組みを情報共有する姿勢が強くなった。

本校でもホームページでの対外広報を常に行い、校内生徒にもユネスコ研修会を実施し、生徒の留学体験報告、教員の中国政府日本教職員招へいプログラム報告から、異文化体験を学ぶ場などを増やしている。

それにより生徒もESD国際交流プログラムや高校生カンボジアスタディツアー、米国豪州短期留学などに非常に多くの生徒が積極的に手を上げるようになり他者や他国への関心を示すようになった。

また、ユネスコ加盟校連携でも、様々な意見を持った生徒と意見交換する機会を得て「異なるもの」との出会いから自己理解を深めている。

学校名：千葉県立千葉東高等学校（ちばひがしこうとうがっこう）  
 校長名：三上 浩司（みかみ ひろし）  
 生徒数：1,099名  
 住 所：〒263-0021 千葉県千葉市稲毛区轟町1丁目18番52号  
 電 話：043-251-9221  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：家庭科 総合的な学習の時間 他  
 連携校・団体：千葉県高等学校ユネスコスクール加盟校10校



ESDとは、人とのつながりが教えてくれる他者理解と自己理解、そして自分の思いを伝える一歩の努力、それが周りに伝わり広がっていくサイクルのようなもの。

# 地域と歩むESD

Skypeを使った国際理解教室

ボランティア

【キーワード】

地域ボランティア 国際理解教室〈いじめをなくす運動へ〉  
防災教育

## ▶ Goal ねらい



ユネスコスクール加盟初年度の活動として、これまで実践してきた地域との連携事業を再確認することと、ESD新プランを始動することをめざした。国際理解教室を新規スタートさせることで生徒の視野を広げ、多くの場面での活動エネルギー育成を目指した。

## ▶ Activity 実践内容



### ① ボランティア活動（地域交流）

防災避難訓練、子育て支援フォーラム、選挙補助等の社会参加ボランティア、福祉施設など、近隣の地域でボランティア活動を行った。

### ② 国際理解教室

a. 人権教育へ —— アメリカ建国の歴史と銃社会にスポットを当てて日本とは異なる文化について考えた。

紛争の歴史を持つイスラエルの大学生とインターネット(Skype)を使って交流。相互の国を紹介、イスラエルやパレスチナ問題について学び、平和についてSkype討論を行った。

世界の紛争や平和について学んだ後、紛争や争い事の原因になっていると思われる多くの差別問題の存在を振り返り、私たちの身の回りにある「いじめ」について注目。アイルランドの若者(中学生・高校生・大学生)とSkype討論。

b. ベナンから視察 —— ベナン共和国から本校のソーラーカーへの取り組みを視察するため3名が来校。国の紹介とアフリカの状況等について話してもらった。

交流のあった海外の皆さんに向けてグリー



ティングカード(クリスマスカード)を作成。

### ③ 防災教育

修学旅行(震災学習)と宿泊防災訓練

2年生の修学旅行先を東北地方に設定、本年で3回目の被災地訪問となった。被災地では防災庁舎跡や仮設住宅を訪ねて「傾聴ボランティア」などに取り組んだ。また、地元警察署、市役所防災課とともに学校施設を避難場所に想定した宿泊防災訓練(一泊二日)を実施。

## ▶ Outcome 成果と課題



ユネスコスクールへの登録申請を行うことで本校がこれまで取り組んできた地域との交流活動や教育活動に明確な意味づけを行うことができた。また、教科指導や生活指導とは異質の高揚感(ワクワク感)や温かさを持ちながら自ら考えることができる活動なので、「学校が持つ力」を發揮できる貴重な場面であると思う。

ただし、学校の日常は多忙で、興味はあるが負荷増を感じる先生も多いと感じる。もっと気楽に、そして簡単に取り組むことができるようなESDの仕掛けを考案、紹介して学校全体が明るくなる活動にしたいと考える。

## ▶ Transformation

実践による変化

ボランティアに一度参加すれば「また参加したい」と、実際に半数以上が次の機会にも参加するようになる。また、Skypeを利用したコミュニケーションスキルも、初回は声も小さく自信なさげな様子から楽しげな会話に変化していくのがわかる。英会話スキルの向上というよりも、異文化や非日常の場面を楽しむことができる度胸(慣れ)が身についていくことを実感し頼もしく感じた。

学校名：千葉黎明高等学校(ちばれいめいこうとうがっこう)

校長名：西村 清(にしむら きよし)

生徒数：837名

住 所：〒289-1115 千葉県八街市八街ほ625

電 話：043-443-3221

対象学年：全学年

教科・領域：総合的な学習の時間

連携校・団体：なし



ESDは、生徒も先生も一緒に元気になって、よりよい社会づくりの構成員として考えることができる一人の人間に成長させるものと期待している。

# 教科横断型授業による グローバルリーダーの育成

平和

【キーワード】

人権 人間の安全保障 平和 問題発見解決能力  
母語及び英語による論理的発信能力

## ▶ Goal ねらい



グローバル・イシューに対する基礎的な知識の習得、自ら課題を発見し、ものごとを多角的かつ論理的に検証し解決に導く思考力、母国語及び英語によるコミュニケーション能力や行動力を備えた人材の育成。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 『2050年の世界』Project

英語科と社会科が連携する授業。社会科は『2050年の世界』を教材として使用し、英語科ではその原書『MEGACHANGE』や関連記事を読む。さらに、社会科では女性の社会進出の機会と人権をテーマにグループで議論を行う。また、留学生を招き実際の変化について取材をする。班単位でまとめを発表、優秀なグループは専門家から評価してもらう。英語の授業では同じテーマに基づく論題でディベートを行い、スキーマを定着させると同時に英語での論理的発信力を養う。

### ■ Hiroshima Project

広島研修旅行を中心に四つの教科が連携して授業を展開する。情報科では平和に関するガイドブックを作成する。社会科は「グローバル化する世界における、平和共存のための安全保障の構築」をテーマに現地でのフィールドワークを行い、各人で平和構築プランを提案する。国語科では核兵器に関する文学作品やサブカルチャーを取り上げ、現代日本における核兵器への意識を考察、合わせて海外作品との比較を行う。英語科は、平和と世界遺産をテーマに米国フロリダ州



の St. Stephen's Episcopal School (SSES) の生徒に向けてチームごとに広島を紹介する英語の冊子を作成する。優れた作品はウェブサイトに掲載し、SSES において世界史の授業の教材として使用される。特に高い評価を得たチームは SSES を訪問、プレゼンテーション、ディスカッションを行なう。

## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

- ① 問題意識を喚起させ、意見を交わせることで、多面的なものの見方を育むことができた。
- ② 論理的思考力、クリティカル・シンキングを育むことができた。
- ③ 様々な英語の探究課題に取り組ませることで発言力を強化することができただけでなく、4技能がバランス良く向上した。

### ■ 課題

いかにして本校のメソッドを他校に広めていくか。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 教科横断型

教科横断型授業により授業のレベルも上がった。例えば、高いレベルの英語の文章を読む時、その話題についての基礎知識の有無によって理解度が大きく変わる。社会科で学んだものと同じトピックの文章は多少難解でも生徒は理解できるようになった。

教員側では、協力して授業開発をするようになった。また、生徒の成長が目に見えてわかるので仕事に対する充実度が上がった。

学校名：渋谷教育学園渋谷中学高等学校

(しぶやきょういっくがくえんしぶやちゅうがくこうとうがっこう)

校長名：田村 哲夫 (たむら てつお) 生徒数：1,264名

住 所：〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-21-18

電 話：03-3400-6363 対象学年：高校1年生

教科・領域：英語 社会 国語 情報

連携校・団体：東京外国語大学 St. Stephen's Episcopal School

(米国) Raffles Institution (シンガポール) Thuong

Kiet School (ベトナム) 大連市第五十五中学 (中国)

Nazareth College (豪州)



未来を自ら切り開き、持続可能な地球社会の実現に貢献することを望み、自分の個性や特技をどのように生かせばそれが可能になるかを考え、具体的な行動を起こす人、このような人材を育てることが本校の教育目標であり、本校にとってのESDである。

# 有馬高校が実施した ESD Riceプロジェクト

国際

【キーワード】 国際理解 国際交流 ESD学習

## ▶ Goal ねらい



本校は英語コースや在県外国人生徒の募集枠があり国際色溢れる教育環境にある。こうした背景の下、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが実施するESD Riceプロジェクト\*に参加し、国内の学校の他、インド・インドネシア・韓国・フィリピン・タイのユネスコスクールとの交流を通して異文化理解、ESD活動の推進、コミュニケーション能力の育成をめざした活動を展開していく。ESD Riceプロジェクトでは今後の米の生産・消費の変化とその原因をアンケートや聞き取り調査を行い、新技術についても関係機関を訪問して調べていく。そうした結果を踏まえて生徒自身で地域、日本、アジアの今後の米生産の望ましい方向について提言をまとめる。

\*…アジア太平洋地域のユネスコスクールが「お米」を学習活動の共通のテーマとして、持続可能な未来創りに貢献する児童・生徒を育むことを目指す、国際協働学習プロジェクト。

## ▶ Activity 実践内容



米を使った日本の食べ物の写真付き解説を生徒が作成、海外の参加校に送付し、一方で、海外の特色ある食べ物の情報収集を行った。米国の姉妹校生徒が来校した際、生徒が日本固有の米の食べ物（赤飯・白玉）を作り、一緒に食べることで日本の食文化の紹介や米国での米の消費について意見を交わした。

全農営農・技術センターやモンサント社農場をESD Riceプロジェクトに取り組んでいる生徒が訪問して稲作の新技術について学んだ。また、米の消費や新しい栽培技術について、各学年の生徒やPTA に対してアンケート調査を行った。

同様にESD Riceプロジェクトを進めているインドネシアの中学校・韓国の高校とテレビ会議を行い、生徒同士で中間報告や、米文化について紹介があった。

11月のユネスコスクール世界大会でESD Riceプロジェクトの研究成果を発表する。



## ▶ Outcome 成果と課題



海外の学校とのテレビ会議の成功は大きな成果と言える。国境を越えて生徒同士が同じテーマについて話し合えたことは意義深く、今後も継続したい。

高等学校段階になると全校生徒が同じテーマを年間通して実施することは難しい。既存科目・特別活動・クラブ活動等を活用しながら、焦点を絞りつつ活動参加形式を考えなくてはならない。

ESD活動を指導する教員の育成も課題となる。今日、教員の仕事は極めて多忙であり、こうした中で新しい取り組みをスタートさせることは容易ではない。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 生徒の活動

地域農家への聞き取り調査、全農営農・技術センターやモンサント社の日本農場見学を通して、また、地域で農業を行っている人、新技術開発に取り組んでいる技術者の声を聞くことで生徒の関心が高まった。

### ■ 教員の変化

各教科の教員が集まり、ESD Riceプロジェクトチームを作って各自専門の立場で生徒への指導を行ってきた。教科横断活動により自分の教科外の知識や体験を得ることができ、本プロジェクトへの参加の有効性が明確になった。また、海外の教員とのネットワークを構築でき、スカイプなどを用いた共同教育プログラム開発への可能性が広がった。

学校名：神奈川県立有馬高等学校（ありまこうとうがっこう）

校長名：伊東 由美（いとう ゆみ）

生徒数：866名

住所：〒243-0424 神奈川県海老名市社家240

電話：046-238-1333

対象学年：全学年

教科・領域：社会科 家庭科 理科 英語科 課外活動

連携校・団体：筑波大学附属坂戸高等学校

Riceプロジェクトに参加している海外5か国の学校

日本ユネスコ協会連盟

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

地域ユネスコ協会 県内ユネスコスクールネットワーク



本校は英語コースがありグローバル社会で活躍する生徒の育成をめざしている。また、在県外国人生徒がいる多文化共生の環境の下、生徒は様々な経験や知識を修得しながら、充実した学校生活を送っている。このような環境がESDにつながっていくものだと思う。

# 高等学校理科で 地域課題「獣害」に取り組む

伝統・地域 【キーワード】 地域課題 獣害 問題解決能力 生物基礎 生物多様性



## ■ まずは原因と対策から

矢作川流域の生物多様性保全を考え、そのより良い在り方を探究し、目指すべき姿の実現に向け行動することである。今回、豊田市の深刻な課題である獣害を取り上げ、その原因と対策を探ることにより、森林やそこに生息する大型ほ乳類（特にイノシシ）と人間のかかわり方を生物多様性保全の視点で考え、それを守るために自分たちで何ができるか考えさせる。



獣害を題材に取り上げ、「生物基礎」の単元にESDの視点を取り入れ展開し、事前・事後のアンケートを行い、成果を検証した。

実践にあたって愛知県農業総合試験場と愛知教育大学と連携して進めていった。

### ①課題をつかむ（1時間）

農業総合試験場主任専門員から三河地域における獣害の実態とその深刻さについて、映像などを用いたプレゼンテーションを聞く。獣害の原因について理解する。

### ②課題を深める（4時間）

グループで獣害について多面的に考え（害獣の視点からも）、獣害にどう対処するか考える。大学教授から生物多様性の保全についての話を聞き、最終的な意見形成の参考にする。

### ③課題について主体的に解決する（1時間）

「獣害対策と自分ができること」の発表会を行い、最終的に自分の意見をまとめる。発表に際しては、農業総合試験場主任専門員から講評をいただくようにした。





## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

前向きに授業に取り組み、獣害について自分の意見を持つことができた。さらに9割近い生徒が、獣害の解決に向け、何か行動したいという気持ちを持つことができた。

### ■ 課題

この授業で得た、行動したいという気持ちを発揮できるような場を生徒と共につくっていくことが今後の最大の課題である。

## ▶ Transformation

実践による変化

生徒は、イノシシの命をしっかり受け止め、資源として活用することが、生物多様性の保全にもつながり、重要であるというまとめをした。さらに、地域の一員として地域の課題解決に主体的に取り組んでいくことの重要性にも気づくことができた。また、グループでの話し合いから自分の考えを身に付けることもできた。

教員は、生徒とともに地域課題に取り組むことにより、生徒の大きな可能性に気づき、さらに、地域と学校をつなぐ可能性が大きいことが分かった。またESDの実践による一つの成果は、次の課題につながっていくこともよくわかった。

学校名：愛知県立豊田東高等学校（とよたひがしこうとうがっこう）  
 校長名：伊藤 泰臣（いとう やすおみ）  
 生徒数：718名  
 住所：〒471-0811 愛知県豊田市御立町11丁目1番地  
 電話：0565-80-1177  
 対象学年：1年生  
 教科・領域：理科（生物基礎）  
 連携校・団体：愛知県内のユネスコスクール EPO中部  
 愛知県農業総合試験場 豊田市矢作川研究所  
 NPO法人矢作川森林塾 愛知教育大学



我が校にとってESDとは、本校がある豊田市を本校のフィールドと考え、豊田市の課題解決を生徒が主体的に行うこと。critical thinking の能力を高め、自己肯定感が得られる実践を行う。

# 佐野高校ネパール・スタディツアー

国際 【キーワード】 貧困 持続可能な開発 多文化理解 シチズンシップ

## ▶ Goal ねらい



- ① 開発途上国での生活体験を通し、先進工業国を中心とした価値観から脱却し、さらに広く地球規模で世界を見渡す視野を獲得する。
- ② 世界の文化や価値観の多様性を認め、尊重する態度を養う。
- ③ 持続可能な社会の担い手として求められる態度と資質を養う。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 全人類の普遍的価値観

地球上の諸問題と自分とのつながりを理解し、その解決を考え、さらに持続可能な社会に向けての態度と行動力を養うことを目標に授業を進めている。

その授業の一環として、希望者を対象にネパールへのスタディツアーを実施している。ツアーの主な活動は小・中・高での交流授業、孤児院等での交流およびボランティア活動である。電気や水道がない村でホームステイをしながら、現地の人と同じものを同じように食べ、家畜の世話や家の手伝いをし、川で洗濯をし、夜には星空を見上げる。そのような体験の中から、生徒たちは国境や文化の差異を越えて、全人類に普遍的な価値観および問題に考え至るようになる。

さらに、この実践はツアーそのものよりも、帰国後に実施する校内や地域の学校、団体などでの報告会により重点を置いている。生徒たちは報告会を重ねるごとに、その学びを深化させていく。また、自分の学びを人に伝えることにより、未来の変革者となりうる自分自身の力に気づくという効果も狙っている。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

事後報告会を重ねるにつれ、日本の社会や自分自身の身近にある問題に焦点が当たるようになってきた。聴衆からの反応で、さらに多くの場所での発表を希望する声が上がった。また1名は大阪ユネスコ協会主催のスピーチコンテストで、優秀賞に輝いた。その他、様々なボランティア活動などに自ら参加しようとする生徒が出てくるなど、社会に積極的に関わっていこうとする姿勢が顕著になった。

### ■ 課題

この学びをツアー参加者だけでなく、さらにより多くの生徒にいかにも広めて還元していくか、という点が挙げられる。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 責任の意識

生徒たちの中に、自分も社会の重要な一員であり、よりよい社会の実現に向けて参画する責任があるという意識（シチズンシップ）が芽生えていると強く感じる。積極的に校内外のセミナーやボランティア活動に参加するようになったり、自ら進んでかかわろうとする生徒が増えた。

学校名：大阪府立佐野高等学校（さのこうとうがっこう）

校長名：山田 勝治（やまだ かつじ）

生徒数：1,071名

住所：〒598-0005 大阪府泉佐野市市場東2-398

電話：072-462-3825

対象学年：1・2年生

教科・領域：国際理解

連携校・団体：大阪のASPnet 国際交流の会とよなか（TIFA）

泉佐野地球交流協会（ica）



授業では、紛争など持続可能性を阻むような非常に深刻な問題を扱うことがあります。特にそのような場合には、まとめとして具体的な明るい材料や取り組みなどを紹介するように努め、未来に対する絶望や悲観ではなく、希望がもてるように注意して授業をすすめています。ESDは、生徒を、自分自身や学校という小さな殻の中から引き出し、地域社会および世界へとつなげてくれるもの、また現在から未来へとつなげてくれるものです。

## 高校生が学校と地域を変える！

高校生による震災復興支援のボランティア活動

ボランティア

【キーワード】

生徒の自尊心 震災復興支援活動 地域貢献活動  
学校・地域・NPOのネットワーク

### ▶ Goal ねらい



#### ■ 自尊心の高揚のため

生徒のマナー・身だしなみが悪いから地域での評判が良くないのか、地域の評判が良くないから生徒の自尊感情が育たないのか、堂々巡りのような悪循環の中で生徒指導に苦悩していた。

開校4年目の年度末、東日本大震災が発生(2011.3.11)。生徒から「何かせなアカン」という声が上がった。生徒の率先した取り組み(行動変容)を学校・地域が応援する関係ができれば、参加生徒の自尊心(意識変容)、学校・地域の信頼関係(関係性の変容)、更に地域の変容によって全校生徒の自尊心の高揚(意識変容)が実現できるのでは、と狙いを定めた。

### ▶ Activity 実践内容



#### ■ 被災地に元気を

2011年4月にボランティア団体を結成した。その年の5月から、2014年7月までの計5回、気仙沼現地ボランティアを実施、参加生徒のべ146名。

「被災地の高校生に心身を癒やしてもらおう!」「高校生交流で被災地の元気に貢献!」と呼びかけ、近隣自治会と連携しホスト家族を募集、近隣の高校とも連携して2014年3月まで3回、気仙沼の高校生のべ82名を大阪に招待し、生徒会・クラブ交流を実現した。授業参加の国際エリア、時事問題、ユネスコクラブの計150名を拡充すべく、昨年ボランティアポイント制を導入した。2014年度より生徒手帳に組み込み、地域ボランティアを全校生徒システムにした。





## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

生徒の行動変容は自尊感情の高まり（意識変容）、学校・地域の信頼関係（関係性の変容）を生み、地域の学校評価が変容したことで、全校生徒の自尊感情の高まりを生み出した。2013年度より近隣高校が合流した。被災地支援に複数校の生徒が取り組むことで、市民、各方面の関心の高揚と参画を生んでいる。

### ■ 課題

被災地の学びを全校生徒の学びに転化し、それをテコにした地域貢献活動の更なる広がりを実現すること。

## ▶ Transformation

実践による変化

日本ユネスコ協会連盟のESDパスポートを導入し、生徒手帳に組み入れ、スクールカラーにすることができた。2014年度から生徒ボランティアの更なる促進のために生徒指導部に各学年ユネスココーディネータを配置した。

学校名：大阪府立北摂つばさ高等学校（ほくせつつばさこうとうがっこう）

校長名：松浦 英二（まつうら えいじ）

生徒数：742名

住所：〒567-0848 大阪府茨木市玉島台2番15号

電話：072-633-2000

対象学年：全学年

教科・領域：課外活動 公民科

連携校・団体：宮城県気仙沼高等学校 ヤマヨ水産 気仙沼市気仙沼市教育委員会 箕面ユネスコ協会 エリーニ・ユネスコ協会 大阪府立茨木高等学校 金光大阪高等学校 コリア国際学園中等部・高等部 大阪府立春日丘高等学校 大阪市立大学大学院（創造都市研究科都市政策専攻都市共生社会研究分野）立命館大学 茨木ライオンズクラブ 茨木オーケライオンズクラブ 茨木ローズライオンズクラブ 茨木市玉島地区・水尾地区連合自治会 葦原地区自主防災会 茨木市真砂・玉島台土地区画整理組合 茨木市自治会連合会 茨木市スポーツ少年団野球部会 茨木市市民活動センター 茨木市役所



我が校にとってESDとは、自分がされて嬉しい事を人にする、という人としてのあり方を、学校・地域・NPOの連携による社会貢献活動を通して確立し、もって持続可能な社会をつくることに貢献する教育。

# 持続可能な社会を実現するための エネルギー環境教育

環境

【キーワード】 エネルギー環境教育 交流 海外

## ▶ Goal ねらい



持続可能な社会の実現のために、エネルギー環境問題をどのように解決するかを主体的に考えることのできる生徒を育成する。そのために、他地域や他国との交流を積極的に推進し、グローバルな視点を養う。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ エネルギー環境問題で他国と交流

長崎県高校生・大学生環境会議にスカイプで参加した。そこで、シドニー大学の学生とオーストラリアと日本のエネルギー環境問題について意見交換した。

タウンミーティング『市長としゃべろう ECOまちトーク in SUMA』に参加して神戸市のエネルギー・環境問題について神戸市長と意見交換し、具体的な提言をした。

文部科学省調査活動支援事業に参加してドイツと日本のエネルギー政策についての比較とともに、ALT（外国語指導助手）の協力を得て各国の政策について調査した。韓国のサンダン高校とスカイプで交流した。

平成26年度モデル的なESDプログラム「サモアから学ぶESD」を作成し、サモアと日本の比較を通して、生物多様性、地産地消、フードマイレージ（食料の輸送距離）、ゴミ問題、ESDについて学習した。

JICA 研修生や西オーストラリア州の高校生と交流した。



## ▶ Outcome 成果と課題



他国、他地域と交流するためには相手の文化、歴史、現状について詳しく事前調査することは当然であるが、それと同時に自分の地域、国のそれらについても相手からの質問に答えるために重要になる。実践を通して、生徒のエネルギー環境問題の関心が高まり、主体的に解決策を考えることができるようになったという成果が得られた。平成22年度にエネルギー教育賞優秀賞を、平成25年度に兵庫県グリーンスクール表彰を受賞することができた。

課題は交流校を増やすことである。今後は世界中のユネスコスクールを中心に、さらに活発に交流していく予定である。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ スカイプを使った意見交換

スカイプを使った長崎県との意見交換では「プルトニウム型の原爆を受けた長崎市民にとって隣の佐賀県でのプルサーマル発電開始に対して反対運動はあったのか?」とか「阪神淡路大震災の時の電気、ガスなどのエネルギーはどんな状況だったのか?」等お互いに積極的な質問が相次いで、理解を深められた。また、「サモアから学ぶエネルギー環境問題」では当事国の比較を通して、ESDについて今までとは違った視点から考えることができるようになった。

学校名：兵庫県立北須磨高等学校 (きたすまこうとうがっこう)  
 校長名：山田 千香子 (やまだ ちかこ)  
 生徒数：718名  
 住 所：〒654-0142 兵庫県神戸市須磨区友が丘9-23  
 電 話：078-792-7661  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：理科 総合的な学習の時間  
 連携校・団体：ニューマンカレッジ (豪州)  
 サンダン高校 (韓国)  
 長崎県立国見高等学校 (長崎県)  
 シドニー大学 (豪州)  
 Doral Academy Preparatory School (米国)



ESD実践の結果、意識の向上だけでなく、具体的に学校の光熱費、ゴミ処理費は毎年減少しており、エネルギー環境問題に配慮した行動ができるようになってきている。我が校にとってのESDとは、現在、未来を生きる世界中の人々が幸福になるために、各自が具体的にどのように考え、行動できるかを世界中との交流を通じて学ぶ場である。

# 世界遺産『石見銀山』の保全活動

伝統・地域 【キーワード】 世界遺産教育 地域との連携 継続 人権尊重

## ▶ Goal ねらい



世界遺産『石見銀山遺産とその文化的景観』の遺跡エリアで保全活動をすることにより、『石見銀山』への興味関心を引き出すことができる。またNPO団体や地域住民、世界遺産センター、石見銀山ガイドの会等と肌で触れあうことにより、地域の財産を守り続けている人たちの熱意を共感的に理解することができる。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 伐採した竹の運び出し

銀の採掘エリアにある、枯死・雪で折れた竹や坑道を塞いでいる竹で石見銀山の景観は損なわれていた。行政・NPO団体・地域住民や協力企業によって竹は逐次除去されているが、始末が追いついていない。石銀地区は細い未舗装道路が多く、重機が入れないため、伐採した竹をトラックやシュレッダーが入る広い場所まで運び出さなければならないからだ。

野積みされた竹を除去する活動は、平成24年5月から始め、春（4月）と秋（11月）の年2回を計画している。平成24年春は伐採して、景観を損なわない場所に竹を積み上げた。乾燥させた秋に、1年生全員で竹を釜屋地区から金生坑前までリレー形式で運ぶ活動を行った。活動時間は2時間程度に限定され、十分な数の竹を下すことができなかった。活動を続けるうちに、本活動に理解を示してくださる人の輪は広がり、危険が伴う竹の伐採は事前に大人が担当し、数日後本校生徒が竹の運び出しだけを行うという「分業」が確立されてきた。





## ▶ Outcome 成果と課題



本事業は男女混合で行っている。勾配の大きい山での活動は、体力の差がペースを狂わせ、全体の作業効率は落ちる。事故なく効率的に作業を進めるために、参加する生徒・大人はコミュニケーションを取り合いながら進めていく。

課題としては、学校と遺跡とは約20kmの距離があり、生徒の移動費等を確保することがあげられる（今年度は三菱東京UFJ銀行より援助していただいている）。



## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 教育活動の依頼

本校が行っている活動は、参加したボランティアの進学や就職、結婚や子育てなどライフステージが変われば、継続していくことは難しい。しかし、学校が保全活動の主体となれば、活動を継続することができる。このことで地域との絆は強まり、他の地域からの教育活動の協力や依頼が得られやすくなる。今年2月には、地元川本町の重要文化財「丸山城址」の保全活動を要請され実行した。この学習プログラムの汎用性を感じた瞬間である。

学校名：島根県立島根中央高等学校（しまねちゅうおうこうとうがっこう）  
 校長名：高見 敏彦（たかみ としひこ） 生徒数：226名  
 住 所：〒696-0001 島根県邑智郡川本町川本222  
 電 話：0855-72-0355 対象学年：全学年  
 教科・領域：学校設定教科「ふるさと」 総合的な学習の時間他  
 連携校・団体：大田市 大田市教育委員会  
 石見銀山世界遺産センター 石見銀山ガイドの会  
 NPO法人「緑と水の連絡会議」  
 NPO法人「石見銀山協働会議」  
 大森町の有志のみなさん



特に「ESD（持続可能な開発のための教育）」という言葉は校内で使われてはいないが、学校の教育目標等はESDの理念に沿ったものである。ただ、これは全ての学校で、同じであると思われる。

# アートマイル壁画共同制作プロジェクトによる 異文化交流

国際

【キーワード】 異文化交流 国際理解 コミュニケーション力  
協働する力 問題解決力

## ▶ Goal ねらい



アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト\*に参加し、海外の高校生と絵画制作を協働して行う過程で、異文化についての理解を深めるとともに、自国の文化についても見つめなおし、海外に発信できるコミュニケーション力を身につける。また自分たちの活動を、広く学校や地域に発信し、ESDの活動を広げていく。

\*…海外の学校とインターネットを活用して共通のテーマで国際協働学習を行い、学習の成果として1枚の壁画(1.5m×3.6m)を共同制作するプログラム。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ マレーシアと協働して絵画制作

マレーシアのモンフォート青少年センターの生徒との交流が決まり、マレーシアと日本の自然や文化、自国の人びとに親しまれている有名人や食生活について調べた。インターネットのスカイプを通して互いに意見をかわした後、交流を通してわかったことを背景に、両国の有名な人物8名を一つの食卓に並べて、自国の料理とともに描くことを決めた。両国が異なる文化を理解し合い、協調していくことを願って描いた。

完成した作品を送付し、感想を伝えあい、今後とも交流を深めていくことを確認した。校内でも展示紹介し、ESDの活動として学校全体に発信した。新聞でも紹介され、地域にも本校の国際理解に対する理念が伝えられている。作品は、岡山市内で開催される2014年11月の世界大会で展示される。



## ▶ Outcome 成果と課題



### ■ 成果

マレーシアの高校生とスカイプで顔を見ながら交流できたことで、海外を身近に感じられるようになった。協働で1枚の絵を完成させることで、海外の相手と通じ合えた喜びを感じることができた。

### ■ 課題

フォーラムを通じての交流は、担当教師が生徒の考えや意見をまとめて入力する方式の交流となったため、やりとりの回数があり多く持たず、生徒同士が親しく会話したり、親密に交友したりするところまでには至っていない。

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 科学・文化の両面から発展

国際理解は、具体的な実践の積み重ねによって図られていくものと考え。スーパーサイエンスハイスクールの指定を受けている本校では、科学技術に関する学習活動の一環として、様々な海外の高校と交流を図っている。アートマイルプロジェクトが文化的な側面での交流であることを考えると、ESDの取り組みが、科学・文化の両面から発展していくことの必要性を学ぶ上で、非常に有意義であったと思う。本校の生徒の活動は、世界的な視野に立ったものであり、さらに発展していく可能性をもっている。このことは地域や次世代の小・中学生にも理解されつつあり、本校へ入学を希望する中学生も増加してきている。

学校名：岡山県立岡山一宮高等学校（おかやまいちのみやこうとうがっこう）

校長名：中山 広文（なかやま ひろふみ）

生徒数：1,070名

住 所：〒701-1202 岡山県岡山市北区橋津221

電 話：086-284-2241

対象学年：1・2年生

教科・領域：部活動

連携校・団体：モンフォート青少年センター（マレーシア）

県内のユネスコスクール9校 大阪のASPnetの高校



持続可能な社会の実現は、今人類に課せられている最も重要な問題だが、本校にとってのESDは、高校生としての日々の学習活動の中に、一人ひとりが問題を解決していこうとする意欲と能力を身につけさせることだと考える。スーパーサイエンスハイスクールの本校は、科学技術先進国の担い手となる人材を育てていくという実践の中で、常に持続可能な社会をイメージしながら教育活動を行っている。

## 「マイ・ドリーム・プロジェクト」

持続可能な地域社会を林野高校生の手で

伝統・地域

【キーワード】 地域との協働 課題解決能力 全校での取組



### ■ 地域の課題を考える

過疎・少子高齢化が進行する中山間地域に所在する本校にとって、「地域社会の持続可能性」はまさに直面する課題である。そこで、「総合的な学習の時間」（「マイ・ドリーム・プロジェクト」、以下「MDP」という）を活用して「地域の課題を考える」をテーマに学習活動を行い、思考力・判断力・表現力や課題解決能力を育成するとともに、持続可能な社会の形成者としての資質を持つ人材の育成を目指している。



### ■ 体験を重視した探究活動

MDPでは、全校生徒が学年縦割りで10グループに分かれ、地域での体験を重視した探究活動を行っており、全教職員で指導に当たっている。テーマは環境、文化、歴史、福祉、医療など、ESDに関連するテーマを多く包含している。最も特徴的なのは、MDPの実践的発表の場として、地域の方がたと生徒・教職員からなる実行委員会が企画・運営する「むかし倉敷ふれあい祭り」の開催である。





## ▶ Outcome 成果と課題



地域の教育力を生かしたESD実践により生徒が大きく成長したこと、地域も高校生の力で少しずつ活性化しつつあることなどが成果である。課題は、今後さらにレベルの高い探究を行い、思考力や課題解決能力を向上させることである。



学校名：岡山県立林野高等学校（はやしのこうとうがっこう）  
 校長名：起塚 郁夫（おきづか いくお）  
 生徒数：342名  
 住 所：〒707-0046 岡山県美作市三倉田58-1  
 電 話：0868-72-0030  
 対象学年：全学年  
 教科・領域：総合的な学習の時間 他  
 連携校・団体：岡山県立矢掛高等学校 地元自治会 行政  
 美作市地域おこし協力隊 NPO など

## ▶ Transformation

実践による変化

### ■ 地域住民の自発的行動

生徒は地域の方がたとえ接し、さまざまな体験をすることで大きく成長した。身近なところで輝いて生きている人びとに話を伺い、持続可能な社会の実現という切り口で探究活動を行うことで、生徒は問題意識を持つとともに、地域を愛し、誇りを持ち、やがては地域のため、ふるさとのために役立ちたい、そのためにさらに学びを深めたいという思いを抱くようになった。教員集団も、その生徒の成長を目の当たりにして本校のESDに自信を深めるとともに、自らも持続可能な社会の実現というテーマをあらゆる教育活動の中に取り入れていこうという姿勢を持つようになった。地域住民も「高校生がそこまで考え、行動するなら、我々も」と、自発的に地域活性化への具体的な動きを見せるようになった。



地域に目を向けることは、自分自身の日常生活を改めて見つめ直すことに必ずつながっていきます。そして、地域をよりよいものにしていこうという課題意識は、自らもより良きものでありたいという向上心をもたらします。さらに、自ら選んだテーマは多くの場合自らの進路、生き方を考えることに結び付いています。

# 持続可能なESD活動

総合 【キーワード】 ESDの校内継続性 教員のESD研修 人事異動



ESD活動のコンテンツが整ってきた本校では、今までの「コンテンツ開発」から、「コンテンツの深化・発展」段階へと移行すると同時に、「コンテンツの継続・継承」が課題となってきた。特定の人を中心にコンテンツ開発を行ってきた本校ESD活動を継続していくには、学校のシステムによる「形の継承」と、運用する者同士の「魂の継承」が必要になり、その取り組みが進められている。



## ■ ESD推進体制

高等学校という特性上、教員の誰もがかかわる進路指導を基盤に置き、ESD的な観点から「総合的な学習の時間」を進路指導に絡めながら活用している（担任・副担任・環境科）。また学校設定教科の「環境」「やかげ学」をはじめ、教務・生徒・進路・保健厚生・図書・総務の各課も、その特性に応じたESD活動を引き受けており、長期的な展望については「改革委員会」がバランスをとっていく。「形の継承」は役割分担で可能だが、「魂の継承」は教員間の協働からしか現れてこない。複数の教員が軽い負担で協働できる機会を増やしつつ、ESD指導の核心を伝承する形態がとられている。

## ■ ESD年間計画

ESDの概念を生徒に教え、実践活動に移行させていくには、生徒への「仕掛け」と、それをサポートする教員の「スキルアップ」が必要となる。「仕掛け」は年間計画で示せるが、「スキルアップ」は年度ごとのメンバーによって変化する。構成員に応じた柔軟な教員研修がESD活動を支えている。



### ■ 環境・地域・国際

本校の主なESD活動には「環境」「地域」「国際」の3分野がある。それぞれの活動の「持続可能性」は別の要素によることが多い。他の活動とのバランスも考えながら、塩梅よく進めていかなければ、人的余裕がない現状ではパンクしてしまう。教科会議や学年会議での細かな定期連絡調整会が、その塩梅の安定を維持している。



ESD活動の「継続・継承」は人事異動のある教員だけで行っていこうとすれば限界がある。地域との連携、ユネスコスクール間での連携、本校から異動した教員との連携など、網の目のように張り巡らされた「ESDセーフティーネット」の形成がなければ、安定したESD活動は実現しない。校内教員以外の部分に、いかにうまく視点を移していけるのかということも「持続可能なESD活動」を考える上では重要なことになる。



本校にとってのESD活動は、校内のコースや科を一つにまとめる「輪」であるが、それはいか様にも変化できる「輪ゴム」のようなもの。この輪ゴムを伸ばしたり縮めたりすることで、各人の適性に応じた学習指導が行えている。

## ▶ Transformation

実践による変化

いわゆる「正解」のある勉強とは違い、ESDの勉強や活動は見据える未来により無限の道筋が生まれてくる。地域で自分の可能性を発見する者、生徒や教員同士の議論から本質的な感覚を得る者。「持続可能な社会の形成者」という目標を持つことで、生徒も教員もそこに向かうための共通語を獲得でき、それがより肯定的な学習活動につながっている。その点でESD活動を導入する前の学校と比べると、雰囲気は落ち着き、前向きな発言や活動も増え、現実の進路実績も伸びている。

学校名：岡山県立矢掛高等学校（やかけこうとうがっこう）

校長名：川上 公一（かわかみ こういち）

生徒数：398名

住 所：〒714-1201 岡山県小田郡矢掛町矢掛1776-2

電 話：0866-82-0045

対象学年：全学年（全教員）

教科・領域：学校のESD体制

連携校・団体：

（県立）和気閑谷高校 林野高校 真庭高校 一宮高校

（私立）龍谷高校 美作高校 学芸館高校 清心女子高校

以上、県内のユネスコスクール

（町立）矢掛中学校 矢掛小学校 三谷小学校 中川小学校

山田小学校 小田小学校 川面小学校 美川小学校

矢掛幼稚園 山田幼稚園 川面幼稚園 美川幼稚園

矢掛保育園 三谷保育園

（矢掛町内の各種施設）図書館 美術館 農業体験施設

老人福祉センター 高齢者福祉施設

# 生徒会が主催する ボランティア活動

ボランティア 【キーワード】 生徒会主体 ボランティア 地域から



生徒会が主体となって、生徒自身が本校のルーツである旧閑谷学校の創学の精神に触れ、地域に貢献できる力を身につけ、自主的に行動する。



本校のルーツである旧閑谷学校で観光客にガイドを行う閑谷ボランティアガイドは地域に貢献したいという生徒の要望から始まった。生徒主体であれば教員の転勤でも活動が廃れないとの理由で2011年より生徒会が取りまとめを行っている。このほかにも生徒会主催で学童ボランティア・エコキャップボランティア等の活動を行っている。どれも地域に根差した継続した活動である。ガイドを行う際の最低限の情報を参加者に配布し、参加者全員で旧閑谷学校を訪れ、経験者が初心者に模範を示す。その後、経験者と初心者がチームを組み実際に観光客にガイドを

行う。その後は休日などに時間を見つけて活動を行う。年度末には参加者全員でガイド本の改訂を行う。



## ■ 生徒の自発的な活動

生徒会による主催が始まって4年たち、外部との連携も生徒が企画・運営できるようになった。ユネスコのWebにESDの成功例として取り上げられた後、テレビ・新聞・ラジオで紹介された。今年度は、地域のイベントへの出店、商店のスペースでの展示、駅前施設の利用法を共に考える等の地域からの依頼も増えてきた。これにより自らの活動に自信を持ち、進路を決定する材料にする生徒も出てきた。

## ■ タブレットの利用







ボランティアガイド自体も観光客の要望に応えるため工夫を続けている。見えにくい場所は写真を利用し、音声も入れるために昨年からはタブレットを導入し、ガイド用コンテンツを生徒が更新できるようにした。このように生徒自身が主体的に活動に取り組み、問題を解決するための工夫を考えるようになった。外国人観光客には

英語で対応するなど、学校での学びを取り入れるような促しを行いたい。今後の課題はタブレットを核として、進歩しながら持続させることである。あえて歩みを速めることなく、論語にある「温故知新」を胸に、生徒自身が発展させる活動をサポートしていきたい。

## ▶ Transformation 実践による変化

### ■ 伝統の継承

活動を通じて相手のために何ができるか、という終りのない問題に取り組むことで、持続的に物事を考えられるようになってきた。創立344年という本校の伝統をつくるのは自分たちだという意識を持ち、受け継いだものを自らの代で発展し、あえて課題を残しつつ次代につなげるといった活動となっている。

### ■ 対外発表の成果

兵庫県立村岡高等学校との交流や福井大学でのラウンドテーブル、各種のフォーラムなど校外での発表の機会が増え、それに取り組むことで成長を続けている。発表内容も活動を通じて多くのことを学んでいるために通り一遍の言葉を並べたものではない。自分たちだけの経験にするのではなく、学んだことを校内にも発信するなど、以前にはなかった生徒の成長を見ることができる。



我が校にとってESDとは、  
必要不可欠な全ての根幹である。

学校名：岡山県立和気閑谷高等学校（わけしずたにこうとうがっこう）  
校長名：香山 真一（こうやま しんいち）  
生徒数：453名  
住所：〒709-0422 岡山県和気郡和気町尺所15  
電話：0869-93-1188  
対象学年：全学年  
教科・領域：特別活動（生徒会活動）  
連携校・団体：岡山のユネスコスクール9校（高等学校）  
大阪のASPnet

# 絆を深める リルフィー(Relfie)プロジェクト

リルフィー：人とのつながり

防 災

【キーワード】

リルフィー 地域で貢献できる生徒の育成  
環境にやさしいものづくり 次の世代を守る

## ▶ Goal ねらい



未来世代が自然の恵みを享受し、健全な環境の中で安心して暮らせる社会をつくるために、一人ひとりが様々な課題と自分とのつながりに気づき、互いに協力し行動できる意欲と能力を持つ人材の育成を図る。特に、防災教育・環境教育を中心に、生物の多様性や持続可能な社会発展への理解を深め、地域貢献の意識を醸成する。



## ▶ Activity 実践内容



### ■ 防災教育と地域の防災力向上

平成23年には科技高アマチュア無線局を設立し、大地震と津波発生 の想定で通信訓練を行った。平成24年には地域住民と合同防災訓練を行うとともに、人力発電機の製作などものづくりを通じた防災教育に取り組んだ。今年 は避難場所となる校舎を使い、災害時の避難所運営を行えるよう、生徒・教員が訓練を行う予定である。

### ■ 地域に貢献する環境活動

徳島県で“絶滅”したとされていた淡水魚カワバタモロコが再発見されたことから、県や協力企業とともにカワバタモロコの保護および保全繁殖の活動を始め、環境への適応力や繁殖力の研究を継続している。また、地元漁協と連携してわかめの二期作に取り組むなど、地元の経済や食を支える水産資源の増殖のための環境保全活動にも力を入れている。

平成24、25年には東日本大震災で被災した宮城県東松島市と女川町・石巻市の保育所・幼稚園を訪れ支援活動を行った。生徒は授業で製作した木製の遊具や家具・自作のソーラーLED照明などを保育所に贈り、子どもたちと心の交流を行った。



## ▶ Outcome 成果と課題



生徒は、地域の防災力向上の取り組みに参加する中で、地域住民との連携協働の大切さと、自助・公助・共助それぞれの役割を感じ取ることができた。特に、共助の土壌を堅固にするために、日頃から防災以外の分野でも地域と交流を図っていく。また、毎日新聞主催「ぼうさい甲子園」において「津波ぼうさい賞」を受賞した。

カワバタモロコの繁殖や、わかめの二期作への取り組みは確実に成果を上げており、継続中である。今後も環境教育・ボランティア活動を通じて、地域特有の資源保護に貢献したい。

## ▶ Transformation

実践による変化

本校は工業系と海洋系を持つ専門高校として、人的資源のほか設備や機動性を地域活性化のために生かすことをめざしてきた。そのため、生徒や教員全員が、科技高を支援して下さる地域の方々とのつながりを大切にしている。実際、人口減少と高齢化が進み、災害時の避難活動で高校生が担う役割は重要である。その役割を自覚する意味でも、本校は日常から「お世話をされる」側でなく、「お世話をする」側になろうというスローガンを掲げている。実際に地域の方々との訓練の様子を記録映像に撮り、自己点検・評価を行ったところ、生徒一人ひとりが自覚と責任感を持ち、きびきびと行動できた場面の確認ができた。

学校名：徳島県立徳島科学技術高等学校  
(とくしまかがきじゅつこうとうがっこう)

校長名：加波 義治 (かど よしはる)

生徒数：910名

住 所：〒770-0006 徳島県徳島市北矢三町2丁目1番1号

電 話：088-631-4185

対象学年：全学年

教科・領域：工業 水産

連携校・団体：オスナブリュック プリニクシュトラテ職業学校 (ドイツ)



我が校にとってESDとは、命をはぐくむ教育。人を人として大切にすることであり、自然・社会とつながることであり、そこに共に生きる喜びが生まれてくる。



---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

第6節

# 大学

---

# 奈良ASPネットワーク ESD子どもキャンプ

平和

【キーワード】

戦争遺跡 奈良公園 鹿 ならまち  
キャンプファイアー ESD ICT

## ▶ Goal ねらい



奈良のユネスコスクールの生徒を対象とした野外活動において、ESDの視点による地域の教材や活動プログラムの開発と実施により、ESDについての理解を深めるとともに、ESDを指導できる力量の形成を図る。

## ▶ Activity 実践内容



### ■ 背景

奈良には36のユネスコスクールがあり、その学校間交流やESDに関する研修、情報交換を目的に奈良ASPネットワークを形成している。このユネスコスクールの生徒を対象に、本学キャンパスにテントを張っての一泊二日のESD子どもキャンプを実施して3年になる。活動内容は教員と話し合いながら学生が企画・立案する。活動を通して生徒につかませたい内容や、つけたい力などについてESDの視点から考え、企画していく。

### ■ 実施内容

本学は第二次世界大戦時の奈良38連隊跡地に建設されており、当時の建物も残っている。この戦争遺跡を巡ることで平和について考える機会となる。また、キャンパス内には多様な樹木があり、昆虫がいるほか、奈良の鹿も学内で草を食んでいる。このような自然豊かなキャンパスでテントを張り、夜は満天の星空の下でキャンプファイアーを楽しみながら、自然に親しむことができる。さらに、限られた時間ではあるが、同じグループになった小・中学生や大学生との触れ合い、テント内での生活から、仲間づくりを体験す



る機会にもなっている。また、周辺には今では珍しい銭湯が数軒あり、銭湯体験もしている。平和と自然、文化遺産と仲間づくりを一体的に体験し学ぶことができるところにこのキャンプの特徴がある。

この活動を中心になって考え、運営するのがユネスコクラブの学生である。プログラム開発を通じて、本学や地域に対する理解を深める機会となっているほか、児童への対応、活動の見通しなど、学校現場で求められる指導力を養成する機会にもなっている。



指導される側の学生が、キャンプの企画・準備・実施によって、指導する側に成長している。活動するだけでなく、何をつかませたいかを、どういう方法が最適かを真剣に協議することは、講義では習得が難しい指導力や企画力の養成につながっている。今年で3回目だが、学生が世代交代していく中で、先輩から後輩へ、キャンプで獲得した知を受け継いでいくことが課題である。

## ▶ Transformation

実践による変化

キャンパス内でテントを張ってキャンプができる大学はあまりないと思う。それができる大学として、本学の新たな魅力を発信している。またテントを設営することで、全学の学生や教職員の目に留まり、ESDを発信する手段にもなっている。最初は様々な問題をクリアしなければならなかったが、今では定着し、本学の風物詩にもなろうとしている。

また、キャンプを中核に、奈良のユネスコスクールの教員同士や、教員と学生の交流が進んだ。それを機会に、授業見学や支援に行かせてもらっている。また、教員と学生と一緒にESDを学ぶ「学ぶ喜び・ESD連続公開講座」や「ESD連続セミナー」「合同研修会」も実施できるようになっている。

学校名：国立大学法人奈良教育大学（ならきょういくだいがく）  
 学長名：長友 恒人（ながとも つねと） 生徒数：1,314名  
 住所：〒630-8528 奈良県奈良市高畑町  
 電話：0742-27-9108  
 対象学年：小学5年生～中学3年生 大学1年生～大学院生  
 教科・領域：課外活動



全ての学びは、地球に生きるあらゆる人が幸せで持続的な社会を実現するためにあります。ESDは教員養成の中核です。





---

# 第2章

ユネスコスクール  
優良実践事例

---

第7節

# その他

---

# こども新聞製作プログラム

国際

【キーワード】

国際理解 コミュニケーション能力  
情報収集力 ノブレスオブリージュ

## ▶ Goal ねらい



世界中の情報が身近に溢れるなか、これからの若者には情報選択能力と、問題を共有し、他者と理解を深めるためのコミュニケーション能力が求められている。本園では『こども新聞製作プログラム』を中心とした国際理解を深める授業を継続的に行い、世界で広く活躍する大人への道筋を子どもたちに指し示したいと考えている。

## ▶ Activity 実践内容



授業の中心となるプログラムは、年長児が記者となり、取材をまとめたページと、新聞記事を切り抜いて再構成したコラージュページからなる「こども新聞」を発行することである。今、実際に社会で起きている出来事を教材として利用するので、子どもたちの興味関心を引き出しながら、家庭でも同じ課題で会話することができるという利点がある。

新聞が発行されるまで、多くの工程を子どもたちに委ねる。電話交渉や現地取材、パソコンや印刷機の使用など、刺激的な体験が次々と押し寄せる。新聞を使う特性上、興味の対象となる出来事は国内外の境がないことが多く、おのずと広い世界へと活動が広がっていく傾向にある。定期的に発行される「こども新聞」は、在園児すべての家庭に配られ、子どもたちがまとめた紙面によってさらに会話が深まっていく。

しかし幼児が興味関心を持つ世界には限界があるので、NGO組織やアーティスト、クリエイター等の専門的な能力を持った人たちによる特別授業やワークショップなどを組み合わせて実施し、大人からも積極的に子どもの世界、視野拡大を促すアプローチを行う。



## ▶ Outcome 成果と課題



これまでに作られた「こども新聞」は100ページを超え、毎月5ページずつ増えており、海外でも紹介されている。紙面をつくるだけでなく、チャリティー活動につながっているのも大きな成果だといえる。

課題として、広く社会全体の動きを把握し、先達としての意見も述べつつ、子どもたちと一緒に考え、行動できる、機動力の高い教師が必要である。



## ▶ Transformation

実践による変化

幼児とはいえ、社会参画への強い意志と、議論を行うだけの十分な情報を持ち合わせていることを改めて感じさせられた。

子どもが取材活動で社会へとかかわっていくと、地域やまわりの大人は必然的に分かりやすく物事を伝えるための工夫や準備をすることになる。多くの大人は、幼児に社会の仕組みを教えた経験がない。大事なことを適切に伝える行為は、子どもたちが身につけようとしているコミュニケーション能力と同じであると言える。

学校名：ナーサリー富田幼稚園（とみだようじえん）  
 園長名：落合 輝紀（おちあい てるき）  
 園児数：155名  
 住 所：〒770-0937 徳島県徳島市富田橋5-15  
 電 話：088-653-4872  
 対象学年：2～5歳  
 教科・領域：人間関係 言葉 表現  
 連携校・団体：JICA JNNE



子どもに教えるという一方の学びにならないよう、大人と子どもと一緒に学ぶというスタンスを意識して大切にしています。

# 化学・農業実習を通して 地球環境を学ぶ

**環境** 【キーワード】 燃焼と植物 植物が生み出す三大栄養素  
地球上を循環する水・酸素・二酸化炭素 人間・動物・植物の共生  
植物は地球上に酸素をもたらす唯一の存在

▶ **Goal** ねらい

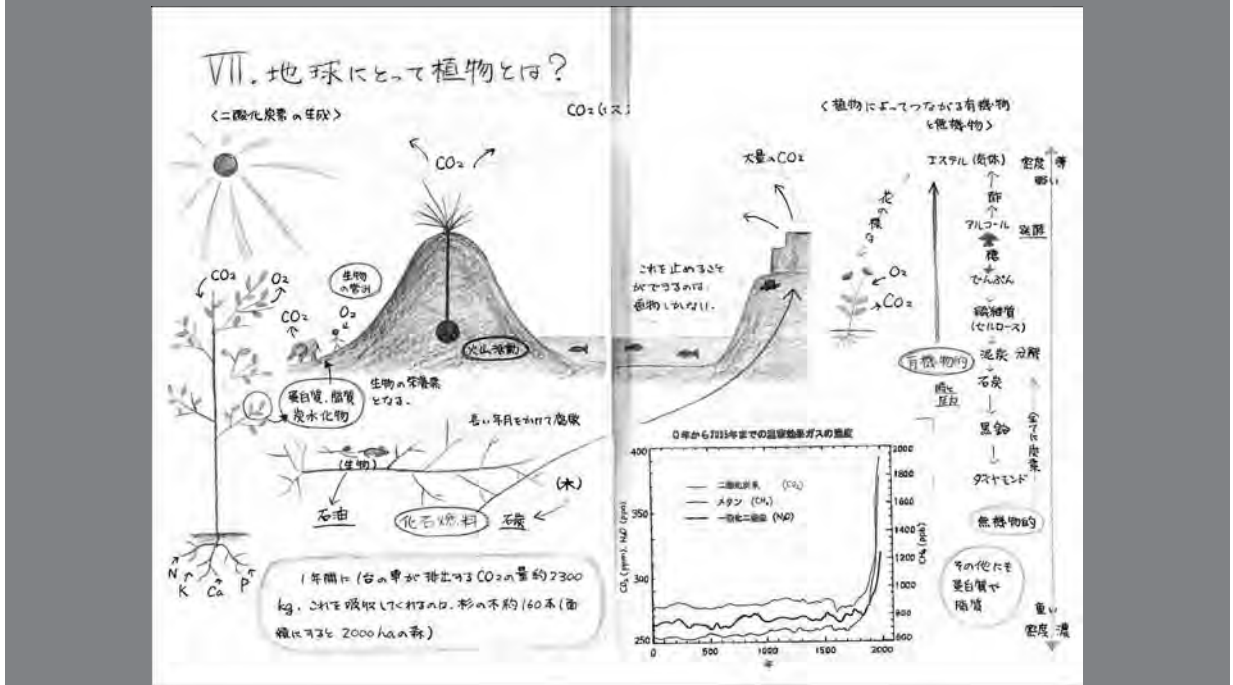
ごく身近な植物の存在を、化学と農業実習や自然農講義を通してより深く理解したうえで、地球環境の保全の重要性に実感を持ち、自分自身の生活に役立てる気持ちを育む。

植物や動物  
自然界の全てのものが  
お互いを支え合っている  
何か欠けると全てが壊れてしまう  
この完璧な世界の設計図を  
插いたのは誰だろうか  
なぜバランが壊れたらこの世界に  
人間が加えたのだろうか  
自分が創り上げた美しい世界を  
壊してゆく存在を知りながら  
しかし、信じてあげて  
地を従えようという責任を与えて

▶ **Activity** 実践内容

- **7年生(中学1年生)**  
観察することを通して、根・茎・葉・花の質の違いに着目する。植物の体を作っている自然界の要素との関連を考える。
- **8年生(中学2年生)**  
酸とアルカリ(塩基)の学習を通して、水の性質や役割を理解し、水が地球上を循環することを再認識する。
- **9年生(中学3年生)**  
農業実習と自然農講義によって、植物(農作物)と人間、動物、地球環境との深いかかわりを知る。また、有機化学の学習を通して、生物が生きるために必要な三大栄養素は、すべて植物から生み出されることに着目する。そして、植物が栄養素を生み出す光合成の過程で、酸素がもたらされることを理解する。





## ▶ Outcome 成果と課題

### ■ 成果

中学3年間の化学の学びと農業実習を経て、生徒たちはそれぞれに、地球環境を守るためには植物=森林を守る必要があることに気づき、自然保護につながるメッセージ性を持つ詩作をおこなった。

### ■ 課題

植物の科学的理解によって、地球環境保全への高い意識を持たせることができた。今後考えられる発展型としては、現代社会の分野へと話題を広げ、現在、どのような地域で森林が減少しているか調べ、原因や問題と向き合い、森林減少を止めるための解決策を考える学習につなげることである。

## ▶ Transformation 実践による変化

化学という小さな現象から出発して地球規模の事象に至る結びつきを生徒たちは実感として身につけることができています。今回応募する事例は、教育活動のすべてをESDと捉える私たちの教育実践の一端をクローズアップして紹介したもので、この取り組み単独でのESD実践による変化というより、これまで積み上げてきた実績すべての上に実を結んだものと考えている。

学校名：NPO法人横浜シュタイナー学園（よこはましゅたいなーがくえん）  
 代表名：加納 健（かのう やすし/代表理事）  
 生徒数：108名  
 住所：〒226-0016 神奈川県横浜市緑区霧が丘3-1-20  
 電話：045-922-3107  
 対象学年：7～9年生（中学1～3年生）  
 教科・領域：化学・農業実習と自然農講義  
 連携校・団体：神奈川ユネスコスクールネットワーク  
 （窓口：横浜市立永田台小学校、神奈川県立有馬高等学校） 玉川大学 NPO法人新治里山「わ」を広げる会（横浜市にはる里山交流センター指定管理者） 新治谷戸田を守る会 田んぼクラブ NPO法人ぶかぶか 全国のシュタイナー校7校 その他多数



日々の教育実践の1コマとしてESDを行うのではなく、教育実践の隅々にESDが浸透していることが大切と考えている。どんな教科でもESDと成りうることを実証していきたい。ESDとは、子ども本来の成長を調和的に引き出すものであり、本来の教育のあり方である。

# ユネスコスクールについて

---

「ユネスコスクール」は  
ASPnet (UNESCO Associated Schools  
Project Network) に加盟している学校の  
日本での呼称です。

---

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示された  
ユネスコの理念を実現するため、平和や国際的  
な連携を実践する学校です。文部科学省及び日  
本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを  
ESDの推進拠点として位置づけています。

現在、世界180の国に約9,900校のユネスコ  
スクールがあります。日本国内の加盟校数は、  
「国連持続可能な開発のための教育の10年  
(DESD)」が始まった平成17年から飛躍的に増  
加しており、平成26年4月時点で705校となり、  
1か国あたりの加盟校数としては、世界最大と  
なっています。

---

## ユネスコスクールに参加すると…

---

- ユネスコから認定証が送られてきます!
- 世界中の参加校との交流が実現!
- ユネスコスクール公式ウェブサイト上での情報  
交換が可能に!



このグローバルなネットワークへの参加に関心  
のある方は、ユネスコスクール公式ウェブサイトにて  
詳細をご覧ください。

ユネスコスクール公式ウェブサイト  
<http://www.unesco-school.jp/>



- ESDに関連するイベントの最新情報や、各校の実践、役に立つ教材、ユネスコスクールをサポートする団体・機関などの情報を発信しています。
- ユネスコスクールには、ログインID・パスワードが発行され、ユネスコスクールが自ら情報発信したり、意見交換などを行うことができます。

## ユネスコスクール活用例

- 「加盟校情報」に学校情報や取り組み内容を紹介できます。
- 「教材ルーム」にオリジナル教材や、おすすめの教材を紹介できます。
- 「地域情報ルーム」や「カレンダー」に研究会や交流会などの案内を発信できます。
- 「みんなの掲示板」では、情報発信したり、意見交換を行うことができます。
- 海外ユネスコスクールとの交流を始めるため、パートナー校を探すことができます。



『ユネスコスクール公式Webサイト活用ガイド』では、サイトの活用方法を分かりやすく紹介しています。ユネスコスクール公式ウェブサイトからダウンロードしてご活用ください。



## 事例掲載校 分野別 INDEX

### ■環境 (23 校)

学校種	都道府県	学校名	ページ
小学校	宮城県	大崎市立大貫小学校	28-29
小学校	宮城県	気仙沼市立面瀬小学校	30-31
小学校	宮城県	気仙沼市立唐桑小学校	32-33
小学校	東京都	小笠原村立小笠原小学校	18-19
小学校	東京都	小笠原村立母島小学校	42-43
小学校	神奈川県	横浜市立永田台小学校	52-53
小学校	富山県	富山市立中央小学校	56-57
小学校	福井県	勝山市立鹿谷小学校	58-59
小学校	大阪府	大阪市立関目東小学校	62-63
小学校	和歌山県	橋本市立紀見小学校	70-71
小学校	岡山県	岡山市立小串小学校	74-75
小学校	福岡県	大牟田市立白川小学校	86-87
小学校	福岡県	大牟田市立吉野小学校	90-91
中学校	宮城県	気仙沼市立大谷中学校	94-95
中学校	宮城県	気仙沼市立唐桑中学校	98-99
中学校	東京都	多摩市立東愛宕中学校	14-15
中学校	石川県	金沢市立泉中学校	106-107
中学校	福井県	勝山市立勝山北部中学校	108-109
中学校	福井県	敦賀気比高等学校付属中学校	110-111
中学校	愛知県	岡崎市立新香山中学校	116-117
高等学校	秋田県	秋田市立秋田商業高等学校	150-151
高等学校	兵庫県	兵庫県立北須磨高等学校	166-167
その他	神奈川県	横浜シユタイナー学園	188-189

### ■総合 (18 校)

学校種	都道府県	学校名	ページ
小学校	東京都	江東区立八名川小学校	44-45
小学校	東京都	多摩市立多摩第一小学校	46-47
小学校	東京都	多摩市立連光寺小学校	50-51
小学校	愛知県	岡崎市立男川小学校	12-13
小学校	愛知県	東浦町立緒川小学校	60-61
小学校	奈良県	奈良市立済美小学校	66-67
小学校	岡山県	岡山市立津島小学校	78-79
小学校	広島県	福山市立駅家西小学校	80-81
中学校	宮城県	仙台市立南吉成中学校	102-103
中学校	東京都	大田区立大森第六中学校	104-105
中学校	静岡県	伊豆市立天城中学校	114-115
中学校	愛知県	豊田市立藤岡南中学校	118-119
中学校	奈良県	奈良市立月ヶ瀬中学校	126-127
中学校	岡山県	岡山市立京山中学校	8-9
中学校	佐賀県	武雄市立武雄北中学校	128-129
一貫校	奈良県	奈良市立富雄第三小中学校	138-139
高等学校	岩手県	盛岡中央高等学校	148-149
高等学校	岡山県	岡山県立矢掛高等学校	174-175

### ■国際 (14 校)

学校種	都道府県	学校名	ページ
小学校	東京都	多摩市立南鶴牧小学校	48-49
小学校	大阪府	豊中市立上野小学校	64-65
小学校	岡山県	岡山市立伊島小学校	72-73
小学校	愛媛県	松山市立新玉小学校	84-85
中学校	大阪府	豊中市立第二中学校	122-123
一貫校	埼玉県	国際学院中学校高等学校	132-133
一貫校	滋賀県	立命館守山中学校・高等学校	134-135
一貫校	兵庫県	神戸大学附属中等教育学校	136-137
高等学校	北海道	北海道札幌平岸高等学校	144-145
高等学校	埼玉県	筑波大学附属坂戸高等学校	16-17
高等学校	神奈川県	神奈川県立有馬高等学校	158-159
高等学校	大阪府	大阪府立佐野高等学校	162-163
高等学校	岡山県	岡山県立岡山一宮高等学校	170-171
その他	徳島県	ナーサリー富田幼児園	186-187